

---

# Rebirth

鹿の子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Rebirth

### 【ZPDF】

Z4288P

### 【作者名】

鹿の子

### 【あらすじ】

離婚して一人暮らしを始めた佐倉岬は、

同じマンションに住むカメ嫌いの須藤朗と知り合います。

果たして二人は恋に落ちる事ができるでしょうか。

物語は、岬と朗の視点で交互に進んでいきます。

(プロローグと一話は岬)

完結・プロローグ+全26話

自サイトでも公開中。

## プロローグ

新しい事を始めるなら春がいい。  
そうして二人で生活を始めたはずだった。

「ゴー Gon?」

「そう。『ゴー Gon』」

蝉の鳴き声がマンションの部屋中に響いていた。

今年の夏は、梅雨が明けた途端に容赦なく始まつた。

大きな窓から見える七月の午後の空には、たっぷりとした白くて大きな雲が悠々として浮かんでいた。

緑が生い茂る庭に立つ大きな木には先刻からのBGMの主が何匹か留まつて鳴いていた。

一階でこれくらいうるさいのだから、二階はもっとうるさいだろうと想像できた。

その、まるで部屋の中にはいるかの様な大きな鳴き声に紛れて、有加の言葉が上手く聞き取れない。

「えつ？ ゴー Gonって言った？ ゴー Gonって、あの『Gon』？」

「そう。ゴー Gonって、あの『Gon』」  
ダンボール箱からガムテープを剥がす手が、思わず止まってしまふ。

その間もBGMは止まることなく流れている。

開け放しの窓からは、庭の木影で涼しくなつた夏風が優しく入ってきた。

髪を後ろで一纏めにしていた私のうなじにその風が気持ちよく当たつてくる。

産毛をさわさわと撫でていく。

有加の言葉が信じられなかつた。

私が合コンに？

有加は、私のそんな反応を気にもせず次々と開けたダンボール箱から出したタオルを洗面所の収納棚にしまつていく。みるみるうちに、箱の中身が減つていいくのがわかる。

「岬ちゃん、手が止まってるよ」

見ていいないようで見ている有加からチェックが入る。

「えっ、ああ。はい」

有加の言葉に促されるように、止まつっていた手を再び動かしだす。剥がしてもなお、べどべとしているガムテープをぐるぐる巻いてゴミ箱に入る。

その間も、ちらちらと有加の様子を伺つてしまつた。

有加は二つ年下の私の従姉妹だ。

「実はさ、今日の合コン。私が幹事なんだけどね。急遽一人来れなくなつた口がいてさあ」

空になつたダンボールを、有加は手際よくペタン口にして積んでいく。

「でね、やつぱり。『合コン的』には、女の子が少ないのって良くなくてさ。だから岬ちゃんが来てくれると、私がすぐ助かるんだけどな」

そーっと有加を見ると、有加もじーっとこちらを見ている。

あはは、と作り笑いで誤魔化そうとした私に追い討ちをかけるように有加が言つ。

「今日のお昼のさあ、差し入れのお弁当。今朝、早く起きて作つたんだよね。ワタシ

……。

確かに、今日の有加の差し入れのお弁当は力が入つていた。おにぎりの具だけでも、六種類はあつた。

お皿まで手伝ってくれていた、弟の港もばくばくと食べていた。

「岬ちゃんはさ、夕飯を食べるつもりで来てくれればいいから。ただ、いてくれるだけでいいから」

いたずらそうな瞳を輝かせながら有加は申し訳程度に両手を合わす。

「お願いしますよ！ 岬大先生！」

「あのねえ」

その時、しゅんしゅんとお湯が沸く音が聞えた。

「あっ、岬ちゃんは 座つてて」

機敏な動きで、有加はダンボールの間隔を縫つてキッチンへと向つた。

そろそろ三時になるので、お茶にしてお湯を沸かしていたところだった。

そういえば、有加はおやつも持参していた。  
キッチンで有加が紅茶を入れる音が聞える。  
キッチン用品は真っ先に梱包を解いていた。

朝から一緒にいるのに、こんな今更かわりの人が頼めないような時間に話を持ちだすところに、有加の作戦を感じる。  
でもまあ、有加がそんなことが出来るのも、私にだからって事もわかっている。

何だかんだ言つても、私たちはお互いを信頼していたのだ。

しかし、いいんだろうか？

いくら面子合わせといえば、私なんかで。

まあ、私に頼む位なのだから相当困っている状態なのだろうけど。

「何時？」

がらんとした部屋は、思いのほか声が響いた。  
有加の網にまんまと引っかかった私の声が。  
キッチンからひょいと有加が顔を出してきた。

「来てくれるの？」

有加のくるんとカールした睫の向こうで、大きな目がくるくると動いた。

昔から、有加には甘い私だった。

「あのね、七時半から『f』つてお店でなんだ。場所はさ、駅のガード下を越えてそのまま少し行つたところにあるイタリアンなんだ。ここからだと歩いていけるし。だから、岬ちゃんも行きやすいかなあ、なんてさ」

『f』。

ああ、不動産やさんが教えてくれた『行列が出来るお店』ね、と思った。

住宅街にある人気のお店として雑誌に載つたと、説明された気がする。

そんな人気のお店を選ぶあたり、有加の『合コン』への力の入る込みようがわかる。

お目当てのカレでもいるのだろう。

「わかった、行くわ」

今は、三時を過ぎたところなので今からもつ少し荷物をほどいて、シャワーを浴びて。行けないことはない。

「だから岬ちゃんって好きなのよ。あつ、合コン代は私が出すから。岬ちゃんは体ひとつで来ればいいからね」

欲しかったおもちゃを手に入れた様な素直な喜びかたを有加はする。

私に有加みたいな無邪気さがあれば。

あるいはもう少しあの生活が続いていたのかかもしれない。そつと左手の薬指をさする。

いつも指輪をしている方ではなかつたので、そんなに跡も付いていなかつた訳だけど。

有加と視線があつた。

有加の瞳が悲しそうに揺れる。

「合コンに来てくれなくても、私は岬ちゃんのこと大好きだからね」

有加は、恥ずかしげも無くそんな言葉を言つてくれる。

有加なりに、私のことを慰めようとしてくれているのだ。

「お弁当の差し入れをしてくれなくても、私は有加のことが好きだからね」

少しちゃかして言葉を返す。

「ふー！ お弁当だけじゃないモンね。シフォンケーキも焼いてきたんだモンね」

紅茶とケーキを載せたトレイを持って、有加が笑つて立っている。

新しいことを始めるのは春がいい。

そう言って二人の生活を始めた私たちがその生活をおしまいにするのを選んだ季節は、夏だった。

佐倉 岬と山村 仁は「一人が二十五歳の春に結婚して、二十九歳になつた今年の夏に別れを決めた。

## 1話・ドナルドな彼

パツと照明がつき室内が明るくなつた途端、壁側にまとめておいた段ボール箱が煌々と映し出された。

「大丈夫なようですね。すみませんね、時間が遅くなつて。どうも毎年この時期はクーラー関係の仕事がたてこんでしうがなくてね」そう言いながら、年老いた電気屋さんが照明の入つてたビニール袋を纏めだす。

私の両手には、電気屋さんから貰つた白いタオルが三本のつっていた。

約束の時間に大幅に遅れたお詫びだそうだ。

ビニール袋越しに、タオルに印刷された電気屋さんの名まえが見える。

『大和でんき』

電気屋さんの首に巻いてあるタオルにも、同じように名まえが入つてた。

「あつ、そのまで結構ですよ。捨てときますから」

時計は既に七時を過ぎていた。有加との約束の時間が気になつた。

「そうですか。じゃあ、すみませんが」

リビングの照明を付けに来てくれた電気屋さんがのろのろと帰り仕度を始めた。

マンションのリビングには、照明が付いていなかつた。

不動産を見て回つた時に、照明の付いて無いマンションがいくつもあつたのには驚いた。

私は、そんな事も知らなかつた。

いろんな事を何も知らないで、ちやつかり結婚生活を送つていた。

仁に頼りっぱなしだつたんだ。

近所の電気屋さんには、このマンションを決めた足で向った。  
と、言つたまま不動産屋さんの隣に、この電気屋さんがあつたというか。

私も電気屋さんと一緒に家を出る事にした。

『代官山とかのお店じゃないし、住宅街の気軽なイタリアンのお店なんだから。岬ちゃんも洋服とかラフでいいんだからね』  
その有加のお言葉に甘えて、私はダンボールの一番上にあつた服を着た。

今日は、洋服を全て箪笥に入れるところまではいかなかった。

とりあえず、皺になつたら困るスーツやコート類を括りつけの箪笥に掛けた。

だから明日もまた、収納作業が待つていて。

私は、本当になんて事ないシャツになんて事ないパンツを穿いた。

それでもつて、小さなストローバックにお財布とハンカチとティッシュを入れた。

そして玄関に出してあつたスニーカーを素足のままで履いた。

つまり、全く気合のない格好だつた。

夕方にシャワーを浴びたので、もうきつちりとした洋服を着たい気分ではなかつたのだ。

それでも、とお化粧だけは申し訳程度にした。

流石に男の人のいる席で、すっぴんでいられる程に若くはなかつたし。

玄関の扉を開けると、夜風がさーっと部屋の中を吹き抜けていった。

すとんと降ろした髪が、肩の上で揺れた。  
顔にかかるってきた数本の髪を、手櫛でそつと直す。  
髪の毛はまだほんの少し湿っていた。

風が吹くと頭がすーっとして気持がよかつた。

私はそこで、大きく深呼吸をした。

夏の草、夏の花、夏の木。

勢いよく草木が伸びていく息づかいを夜風が運んできていた。  
夏の夜の独特的な匂いがした。

盆踊りの音、夜店、近所での花火大会。  
夏の夜はわくわくするものがある。

楽しい思い出が一杯ある。

そんな気持は大人になつても変らない。

私は夏の夜が大好きだった。

『おまえを許さない』

仁の声が蘇る。

私は急いで頭を振った。

「では、また何かありましたら」

電気屋さんの皺枯れた声に、はつとする。

「あつ。はい」

声だけで笑うような、作つた笑顔で私は応対した。

エントランスホールを出たところに、電気屋さん名まえの入った  
軽トラックがとめてあつた。

電気屋さんは丸い背中のまま、ぺこりと頭を下げて運転席に乗り  
込んだ。

「お世話様でした。お気をつけて」

運転席に座る電気屋さんに、窓越しに声を掛けた。  
さあて、急がなきや、と思つ。

私は、駅に向つて勢いよく歩き出した。

「あーー！ 電気屋さん！」

突然背後で、男の人の大好きな声が聞えた。  
驚いて振り向くと、運転席に乗っていたはずの電気屋さんが再び  
エントランスホールに入つていく姿が見えた。  
どうやら、マンションの住人に呼び止められたようだ。  
ホントに、この時期の電気屋さんは忙しい。

マンションから歩いて十五分もかからないところに合コン開場の  
『f』はあつた。

腕時計を見ると、七時半ジャストだった。ほつと胸をなでおろす。

大きな木製の重い扉を開けた瞬間、ニンニクや香草の良い香りが  
鼻腔をくすぐつてきた。

力チヤ力チヤと食器やグラスの触れ合音もした。

食事中のお客さんは、家族連れからカツプルまでと幅が広い。  
小さな子ども用の椅子も用意されていた。

各テーブルの上には、円筒形の背の低い蝋燭が水を浮かべたガラスの容器の中ではのかな灯りを揺らしていた。店内の照明も、暗すぎもなく明るすぎもない絶妙の効果を出していた。

寒すぎない位に、軽くクーラーも効いていた。

お店の人の注文を受ける、はきはきとした元気な声も聞える。  
かすかに聞えるジャズのBGMにも好感が持てた。  
いいお店だった。

かなり計算されて出来たお店だという事がわかる。

住宅街にあつてうるさくない、むしろ住んでいる人が自慢したくなる併まいのお店だった。

係りの人に案内された奥のテーブルには既に有加が座つていて、私を見つけると嬉しそうに手を振つてきた。

六人。私を入れて七人になる。席はあと二つ残つていた。  
女の子たちは『代官山のお店』でなくとも、お洒落にしつかりと力が入つていた。

まあ、当然かな。

「岬ちゃん、どっちがいい？」

私の前にやつてきた有加が、にゅっと両手を出してきた。  
有加は、薄いブルーとベージュのチェックのノースリーブのワンピースを着ていた。

薄手の生地が、細い体にとても似合つていて可愛かった。  
彼女の白くて小さな手の平には、可愛い花柄の紙が二つ小さく四角に折りたたまれてのつていた。

「ぐじびきで席を決めるんだ」

テーブルに目を移すと、着席している人たちの中にこことした顔とばつちり目が合つてしまつた。

「こ、こんばんは。有加の従姉妹の佐倉 岬です」

いきなり、取つて付けたような自己紹介をしてしまつた。なんだか、間抜けな展開だつた気がする。

空いている席は二つ。

それも並んであつた。

はつきり言つて、私はどっちの席でもいいのになあと思つた。

私の場合は、ただご飯を食べるだけなんだし。

「じゃあ、はい」

右側の紙を選んで有加に渡した。

有加の細い指が、畳まれた紙をするすると広げていった。  
爪もつやつやとしたベージュ系のマニキュアだった。

「えつと、『B』だから」

空いている席の一方を有加は指差す。

「じゃあ、岬ちゃんはここね」

私は、有加に指定された席に大人しく座った。

右隣は空席になるのかな？

私の左隣は、背の高そうな（着席の状態なので何とも言えないんだけど）すつきりとした男の人だつた。

「こんばんは」

優しい笑顔の人だつた。

「こんばんは」

自然とこちらまでほほ笑んでしまつた。

その人を挟んで向こう側に有加がいた。

有加の色白の頬はピンクに染まつてゐる。

そつか、と、ピーンときた。

この優しげな人が、有加のお旦当てのカレなのね、と。そう思うと遠慮なくこのカレの横顔を見てしまつ。

「坂田！ あと誰を呼んだんだっけ？」

私の目の前に座る、細めの眼鏡をかけた男の子がこのカレに声を掛けた。

『坂田』君、か。

「あとは、朗だよ。朗」

坂田君の返事に、今度はもう一人の男の子が笑い出した。

「じゃー、やつぱ。朗の言う通りじゃん」

女の子たちが、えつー？ なに、なに？ と、ざわめきだした。

「いや、朗つていうこれから遅れてくるヤロウが言うにはさ。『待ち合わせをした時つてその場所に一番近いヤツが、絶対に一番遅く来るんだよな』って。それ、昔からのあいつの持論でさ」

みんな一斉に「なるほどー」と頷きます。

私もその持論は、なかなかいい発想だなあつて思つた。

「今回、朗の家がここから一番近いモンな

ちなみに、びりから一番目の私もおそらくこのメンバーの中では、

お店に一番近いところに住むヤツだろう。

電気屋さんが来るのが遅かつたとはいえ、その持論ヒヤウヒヤウ  
ピシャと当てはまつてしまつ。

「わっりー！」

その時、バタバタと店内に入つてくる足音と共に、私の隣にビックリと人が座つた。

びっくりして、そーっと顔だけその人に向ける。

目線の先にオトコノコがいる。

「あ、コンバンハ。スドウ ロウです」

乾いた声の人だった。

「『コ。コンバンハ。サクラ ミサキです』

なんだか勢いあまって、こっちまで自己紹介をしてしまつた。  
おまけに、つられるように今まで、パサパサとした声になつてしまつた。

『スドウ ロウ』君か。

グレイの半そでのTシャツから、そんなに日に焼けていない腕が  
によつきり出でている。

テーブルに置かれた彼の左手首には、見た事もないような時計が  
はめてあつた。

そしてその液晶の画面には文字盤が浮かんでいて、デジタルな長  
針・短針・秒針が時を告げていた。

じつと時計だけを見てしまう。変わった時計だった。

遅れてきた『スドウ ロウ』君に周りの男の子たちから「おっせ  
ーよ！」との野次が飛ぶ。

「珍しいね、朗が時間に遅れるなんてさ」

坂田君がひょいと顔を出して『スドウ ロウ』君に声をかける。

『スドウ ロウ』君の顔がくるつとこっちを向いた。

「ごめんな。ちょっと出掛けに、じたじたしちゃつてね」

すまなそうな顔をして、『ロウ』君は坂田君に謝る。

どうも、彼の声の質のせいか彼の名前が漢字変換できない。

『口ウ』だなんて、一体どんな字を書くんだら？

「では、全員揃つたことなので、早速始めたいと思ひます」  
坂田君の声でみんなの瞳が柔らぐ。

この人はアタリかもね有加、と心の中で思つ。。

「今日の幹事は、坂田と隣に座る石田 有加さんです。まあ、食事会つて事なんぞ、どんどん食べてどんどん飲みましょウ」

その言葉を合図に、お店の人人がワインやビール、そして前菜を運び出した。

ざわざわとした心地よい店内で、『合図』は、和やかに始まった。

話をしてこくうちにじうやら、今日の集まりは、お互いの学生時代の仲間というメンバーだといふことが分った。

有加は、大学の時の友達を呼んで坂田君は高校の時の友達を呼んだそうだ。

そしてこの二人の知り合つたきっかけは、以前開いた別の『合図』らしい。

『合図』とこつても大学の時の『合図』とは違い、（私の合図の知識はそこ止まつていたし）『イッキ』もなれば『王様ゲーム』もない。

坂田君の言う通り、ホントに『食事会』だった。

でも、一番驚いたのは徐に始まつた『名刺交換』だ。

男の子はともかく、女の子まで名刺を出している。

女の子の名刺は、薄くピンクだつたり紫だつたり。メールアドレスや、携帯の番号が書いてあつた。みんなそれぞれの工夫を施しある、お洒落な名刺だつた。

気がつくと、有加まで名刺を出している。

へえ。凄いのねえ。

そんな物を持つて来ていらない私は（そもそも、私は会社からの『白い名刺』しか持つてないし）男の子から名刺を貰うばかりで扱うものは一切無かった。

「佐倉さん、電話番号教えてよ」そんな、言葉にも「『めんなさい。』引っ越したばかりで、まだ」と答えた。

「携帯は？」「ごめんなさい。持つてないの」会社から仕事での時に持たされるのがあったので、それで十分だった。

なんだか手持ち無沙汰でみんなのやり取りをぼつーと見ている。その間、しつかりと食べたり飲んだりはしてたんだけど。

ふと、右隣を見ると隣の席の『ロウ』君も名刺交換には参加せず、なにやら心ここに有りすと言つた感じでしきりに時計に視線を落としていた。

ふいに前に座る眼鏡の飯島君に話しかけられて飯島君が好きだという、サッカーや野球の話になつた。弟がいる私にとっては、こういった話題はお得意分野だつた。

相槌をうちながら、時折質問してみたり。

有加の手前、ほじほじに感じ良くしないと、と思つ。

そしてそうしながら、こいついた氣のつかい方つて何かに似ている、と思つた。

『THE 接待』。

今日のこれは、『合コン』と言つより、私にとつては『接待』といつた感じだつた。

周りの人に向けて作つた偽者の笑顔がぴつたりと顔に張り付いたままで、顔の筋肉が固定されていく。

『合コン』は、これで最後にしよう。

まあ、誘われる事もないだろうけどね。

それにしても私はともかく、もう少し盛り上がりを見せてもいいだろうお年頃の隣の男『ロウ』君も、なんだか冴えない感じだつた。

時折一人何か考え込んで違う世界にトリップしながらも、所々で会話に参加して、そして料理を食べていた。

食べ方も、機械的に食べ物を口に運んでいると言つた感じだった。

もしかしたら、この人も誰かさんのかわりの人なのかもしれない。

そんな風に思えた。

デザートにコーヒー。

最後まで、おいしいお料理だった。

今度は、有加と二人でゆっくり来ようと思った。

おいしいんだけど、今ひとつお料理に集中できなかつた。

全く初めての人たちと、楽しく食事をするのは結構難しい。

コーヒーを飲みながら、『二次会』の話になつた。

困つたな、帰りたいなあと思つた。

明日会社だしな。

「オネエサン、帰りたいんじょ」

『口ウ』君がいきなり私の肩をつづいた。

『口ウ』君と話すのは、「コンバンハ」以来だつた。驚いて、返事の声すら出ない。

コノヒト、私に話し掛けているの?

『口ウ』君の顔を見つめてしまう。

改めて見る『スドウ 口ウ』君の顔はオモシロイ顔だつた。ハンサムなのが、そうでないのが、わかりにくい顔だつた。くつきりとした二重は『多分』ハンサムな要素だけど、ぱきつ、にぱつとした口はドナルドダックにも似ていた。

でも、私はこういう口が嫌いではなかつた。

表情や角度によつてコノヒトの顔はかなり違つて見えるんだろうな、と思つた。

その『スドウ ロウ』君のドナルドな口の口角が可笑しそうにきゅっと上がる。

やっぱり、間違いなく隣の『スドウ ロウ』君は、私を見て私に向かって話しかけてる。

しかし、そのでかい口から出る声は小さかった。周りに聞えないほどの声だ。

わざとそういうふうだった。

「俺も家に帰りたいんだけど、これって『合コン』だろ。一人で抜けるつて訳にもいかなくてさ。だからさ、俺と一緒に抜けてくれると助かるんだけど」

いきなりの申し出で、私の脳みそはフリーズしてしまった。

ハンサムな二重が私を見つめる。  
ドナルドな口がにっこり笑う。

一段攻撃か。

『スドウ ロウ』君は、要注意人物だと感じた。  
けれど『スドウ ロウ』君のその案は、私にとつても良策と思えた。

有加には悪いけど、二次会まで接待は『めんだった。帰つて、明日の服だって選びたかった。

「うん、いいわよ」

私も小さな声で『スドウ ロウ』君に返事をした。

まだみんなが着席の状態だった。

二次会は、『カラオケ』にするか『バー』にするかで話しをしているところだった。

隣の男『スドウ ロウ』君が立ち上がる。

坂田 浩一君以下、席にいた全員の注目が集まつた。

「あつ、俺さ。佐倉 崎さんをお持ち帰りするから。で、二次会パスね」

そういうと『ロウ』君は、みんなに向つてひらひらと手を振ると

私に左手を差し出してきた。

ちょうど。

オモチカエリって言葉は、どうよ？

思いつきり動搖しながらも、さうとは悟られぬよつた余裕の微笑で私も『ロウ』君の手をとつた。

ひんやりとした、さらつとした手の平だった。

汗なんかきそうに無い、手の人だと思った。

そしてまるで、芸芸会の王子とお姫様の様な安っぽい仕草で、私たちちは啞然とするみんなの前からお店の外へと歩いて行つた。

恥ずかしい。

思いつきり恥ずかしい。

でも、もう二度と会う事の無い人たちだ。

まあ、有加には後日説明すればいいわけだし。それでいいよね、と思つた。

店から出ぬなり、『スドウ ロウ』君は私の手を離した。

別に、全くいいんだけど。

何だかこう、そうあからさまに離さなくともいいんじゃないかつて少しだけ思つた。

「電車？」

『スドウ ロウ』君は私に聞いてきた。

「歩きます」

私も短く答えた。

「へー。なんだ。俺の家もこの側だから住所が近かつたら送つてあげようか」

『スドウ ロウ』君が黒いジーンズのポケットに手を突っ込んでじゃらじらとカギを探す音がした。

「飲酒運転の車には乗りたくない」

つい、きつい声で私が言った言葉に『スドウ ロウ』君はポカン

とした顔になつた。

「酒？ 今日は飲んでないけど、ああ、これか？」

といつと、車にしてはやけに小さなカギがポケットから出ってきた。

そして『チ』の前にとめてある、シルバーの自転車を指さした。  
「立ち乗りできる？」

「えつ？」

「ほら、これ荷台ないしさ。 あなたスカートじゃないし、大丈夫だよね」

そう言つと『スドウ ロウ』君は、さつわと自転車にまたがつた。

そんな『スドウ ロウ』君のじつと私を見つめる時は、なんだかとても意地悪に思えた。

『スドウ ロウ』君に、挑戦されている様な気分になる。私は、ムキになって自転車の後ろにまたがつた。

じついの自転車の乗り方は、よく港がしていた。

思い出したくないのに、ひょんなことから急に私は過去に引き寄せられる。

そして、頭の中に映像が映し出される。

『みつさきちやーん』

高校からの帰り道、後ろから声がした。

『岬』

静かにそう言つて、隣を歩く山村君が私の前に右腕を出してそのまま自分の後ろに私を導いた。

そんな私たちの横を、中学生の港が友達と自転車に立ち乗りしながら通り過ぎていった。

私にバイバイと手を振つていた。

突然の事で驚きながらも笑つてしまつた。

あんな乗り方は危ないって事はわかっているけど、それとは別のことひで弟が楽しそうにしているのは、お姉さんとしては嬉しかつたりするからだ。

『馬鹿なヤツ』

言い捨てるような、山村君の言葉に驚いた。

バカナ ヤツ。

確かに、バカかもしれないけど。

『岬の弟だる。もう少し、しっかりさせりよな』

『……うん』

でもねえ、といふ言葉が出なかつた。

港を見て嬉しかつた気持がすつと冷めてしまつた。

両手を『スドウ ロウ』君の肩に乗せた。

Tシャツ越しに『ロウ』君の体温を感じた。

『ロウ』君も、港みたいに立ち乗りをしていたくちなのだらう。なんだか、そんな『ロウ』君に私はほつとした。

「よつしゃー」そう言つて『スドウ ロウ』君は自転車を漕ぎ出した。

自転車が進みだした瞬間思わず『スドウ ロウ』君の肩を掴む手が強くなる。

足にも力が入る。

私、大丈夫なんだろうか？  
乗つていられるかしら？

そんな私の気持などお構いなしで、自転車はぐんぐん進んでいく。

段々と体も慣れてくる。

コツも掴んできた。

そうすると、周りの景色も見る余裕が出てきた。

歩くのとは少し違う速さで、街が移っていく。面白い。  
自転車に乗ることじたい、もしかしたら小学生以来かもしれない。

「気が強いね、佐倉 岬さんは  
おかしかったに』『スドウ ロウ』君は話しかけてきた。

「……」

さつきまでの『接待顔』の仮面が剥がれた、と思つた。  
まあ、いいやあと思う。

この人は、有加の想い人でもないよつだし、この先も全く関係の  
無い人だと思う。

そんなことを計算しちゃうといふが、二十九歳の悲しさであります  
しょうか？

そう思つて開き直りながら、はたと思つ。

「ねえ、私の家の方角はこれでいいんだけど。私、住所を言つたっ  
け？」

確かに私の家にどんどんと近くなっているのは間違いない。

けれど、合戸の最中もその後も具体的な家の場所までは言わなかつた筈だと思った。

「気の強い佐倉 岬さん。飲酒運転の車を断るところまでは上々だ  
けども、女人がポストや玄関のプレートにフルネームを出すのは  
よした方がいいと思うよ。これ、常識」

玄関、ポスト。ねーむふれいとお？

「な、何で。何でそんなこと言つの？ えつ？」

『スドウ ロウ』君の言つ通り、私は集合ポストに、フルネーム  
を貼つていた。まだ、紙で書いてテープで止めただけの『仮』のも  
のだ。それも貼つたのは、引っ越して来た今日のこと。

「佐倉 岬さんさ、マンション付いたら『205』のとこ見てみな  
よ。』『スドウ』つてあるからさ」

「同じマンションつてこと？」

「そういう事になりますかね」

「知つてたの？」

「んー。知つていたと書つより、段々とわかつたといふか」  
自転車は近くの公園を横に見て進んでいった。

ここまで来れば、マンションはすぐだ。

「電気屋さん、呼んだでしょ。佐倉さん」

「ええ、リビングの照明を」

あれ？『ああー！ 電気屋さん！』の声の人つて。

「もしかして、電気屋さんを呼び止めた人つて、スドウ君？」

「大正解。うちのクーラの調子が悪くてさ」

全く、なんて狭い世界なんだろう。

呆然として言葉にならない。

少し前までは、もう2度と会わない人だと思っていたのに。

同じマンションの住人？

うわあ面倒くさい、と思つた。

そういうつるつるうちに、私たちを乗せた自転車はするりと、マンションの前に到着した。

『スドウ ロウ』君は自転車を止めた。私は用心深くそれから降りた。

緊張していたせいか、足にまだ突つ張つた感じが残つている。

「そもそもな、恐々降りなくつてもさ」

「だつて、初めてだつたんだもん、こんな乗り方」

つい、ぽろつと本音を言つてしまつた。

ビックリする『スドウ ロウ』君と田が合ひつ。

しまつたあ、と思ひ。

ちょっと、しぐじつたかも。

「初めて？ 佐倉 岬さんは、賭博師に向いているね

賭博師？

「なによ、それ」

「はつたりと度胸」

……。

すゞいことに突いてくる。

それだけに、余計面倒くさい人だ。

あんまり、知り合いたくないのだ。

男の人というだけで、できたら友達さえ欲しくない。

男の人は、面倒くさい。

「これ、駐輪場に置いて来る」

『スドウ ロウ』君はそう言つて、さうあと自転車を押してビルへ行ってしまった。

困った。

自分だけ先に部屋に戻るのも、なんだか……ねえ。

しかたが無いので、集合ポストの前で待つことにした。

『ありがと。おやすみをない』へりには、言つのが礼儀だらう。

ふと、先刻言われたことを思い出してテープで止めた名前を剥がした。

『スドウ ロウ』君の言つ通りだと思つた。

郵便物が転送されて届くか心配で、ついついフルネームを出したのだけど。

多分、そんなことをしなくともきちんと郵便物は届くのだらう。

郵便の心配よりも、自分の身の安全を図らなくてはいけないのに。

男の人と暮らしすじとに慣れていて『自分の身を守る』ことに鈍感になっていたんだらう。

危機管理が、曖昧になっていたのだらうと思つ。

まだまだ、『』との生活が、自分にいろいろな甘さを出していくんだろうなと思う。

「あれつ。待つてくれたんだ

ホントランスホールに『スドウ 口ウ』君の言葉が響く。

「一人で先に戻るのも悪いかなって」

明らかに、待つてはいるとは思つていなかつたその声にまたもや、しぐじつたと思う。

「危ないなあ、佐倉 岬さんは」

「危ない？」

言われた意味が理解できない。

「その1。よく知らない男に簡単に送つてもらわない。その2。よく知らない男を『悪いかな』と思つても待たない。どうするの?、いきなり俺が佐倉さんの部屋に押し入つたら」

今、自分の甘さを『反省』していたところなのに、またもや『甘さ』を指摘されてしまった。

情けなくなる。

『スドウ 口ウ』君の言つことは、どれももつともだつた。だから素直に受け止めるしかない。

「ありがとう」

「はあ?」

「あなたの言つことは、もつともだわ」

「素直じやん」

「女も二十九にもなれば、少しくらい素直じやないとね」

二十九にもなつて、こんなにも世間知らずな私が恥ずかしかつた。

「二十九? 佐倉さん二十九なんだ」

「そうなの。いい年なのよ」

「二十五歳くらいだと思っていた」

ははは、と笑つてしまつ。

だよねど。

こんなしょーもない二十九歳はNGだよね。

それにしても、二十五歳とは。その年は、仁と結婚した年だつた。

「いやだな。二十五歳は  
あれつ？ 普通、若く見られたいじゃないの、女人つて  
私すでに『普通』じゃないんで  
『普通じゃない』か。確かにうこうう題名の映画がなかつたつけ  
？」

「『普通じゃない』つて？」

「うん」

あつたかなあ？

もしあるなら、それは私が見るのに一度いい映画かもしれない。

「俺、二十七なんだ」

まあ、予想通りと申しまじょうか。

「別にスドウ君に年は聞いてないよ」

なんて意地悪なことを、私からも言つてみる。

「まあ、一応。挨拶みたいなもんで」

「挨拶か。同じマンションだもんね」

同じマンションかあ。

「で。同じマンションのよしみとこいつ」と。佐倉さん、ちょっと

俺の部屋に来てくれないかなあ」

『スドウ ロウ』君の言葉に、耳を疑つ。

「はあ？ あなた今 私に『甘い』つて。知らない男には氣をつけろつて」

「ほら、だから今 自己紹介したじゃない。もう俺たちオトモダチでしょ？」

「オトモダチ」

「そう、お友達。という事で、お願ひしますよ、佐倉様！」  
確かに、こうして毎回も誰かに何かを頼まれなかつたつけ？  
でも、悲しいかな。

お姉さん気質の私は、頼まれるとひととはなかなか言えないのだつた。

しかも、なんとなく『スドウ ロウ』君には借りがあるよつた氣

持ちにせられたし。

『205号室』は、私の真上の部屋だった。

部屋に近づくにつれて、『スドウ 口祐』君はなにやら緊張した顔付になってきた。

そういえば、しきりに時計を気にしていたし。

なんだろう。まさか、何か犯罪に関係するとか。

「冗談じゃない。」

いくら人の良い岬さんでも、犯罪だけは勘弁して欲しい。

205号室。

『須藤 朗』という表札があった。

初めて彼の名前が、漢字になった。

「あ、開けます」

須藤 朗君の言葉が震える。

「ちょっと待つて」

「おかしいじゃない?」

何で自分の部屋のカギを開けるのに、そんなに神経を使いつのよ?.

須藤 朗君のカギを回す手を上から握る。

「なんか様子が変なんだけど。犯罪に関係する」とじゃないでしょ  
うね」

一瞬惚けた顔で、須藤 朗君が私の顔を見る。

「犯罪か。確かに、他の人にとっては何てことない事だらうけど俺  
にとつては犯罪に等しいことだよな」

ぶつくさ言いながら、私の手を上に乗せたままで須藤 朗君は力  
ギを開けてドアのぶを回す。

私もなんだか手を離せなくて、そのまま一緒にドアを開けた。

玄関の中の灯はセンサーで自動的に点くようになつていてる。ぽつ  
と点いた灯に照らされて、一つの小さな水槽が見えた。そして、水  
槽の中には。

「うわ――！」

須藤 朗君は大きな悲鳴を上げながら玄関の扉を閉めた。  
まだ、廊下にいた私たちは再び玄関前に立つことになった。

「あつ――！ やっぱり遅かったか！ やっぱり途中で帰るんだつ  
た」

須藤 朗君がキャラクターに似合わない弱気な様子でしゃがみこ  
む。

あの玄関に、そんなにこの人が怖がるようなものがあつただろう  
か。

「ねえ」

と言つて私も隣りにしゃがんだ。

「なにが、どうしたの？」

「……怖いんだ」

怖い。

「なにが？」

「……」

ここまできて、須藤 朗君は何か言つのを躊躇してゐるようだつ  
た。

「か

「か

「か？」

「かめ？」

「うわ――！ 口にしたくもない、その名前」

そう言つと、須藤 朗君は頭を抱えて蹲る。

「つまり、須藤君は水槽の中にいた、その……それが怖くて、私に  
ついて来てつて言つたわけ？」

「そ――です」

私は大きくため息をついて、おもむろに玄関の扉を開けた。  
すると、先刻と同じように灯がついて、その下には先刻と同じよ  
うに小さな水槽の中に小さな亀が、石の上にちょこんとのつていた。

「かわいいのにね」

水槽をつつきながら私は亀くんに向かつて話しかける。

再び廊下に出る。

須藤 朗君は相変わらずしゃがみこんでいる。

仕方がないなあ。

「私が預かつてあげようか?」

その言葉に、須藤 朗君は顔を上げた。

二重のオメメがうるさるしている。

初めて須藤 朗君よりも、優位に立つた気がした。

ちょっとぴり気分がいい。

「もしかして。最初っから、そのつもりだつたんじゃないの?」

からかうような口調で私はそう聞いた。

「……預かつて貰えるの?」

須藤 朗君の顔が輝く。

「預かるだけよ。持ち主がいるんじよ。その人が取りに来るまで

の間だからね」

へなへなと、須藤 朗君は廊下の床に崩れていった。

「助かる。ありがとう。その、持つて来た奴は解つてているから。今からでも連絡をとつて、なるべく早く取りに来るよう言つから」

須藤 朗君の白くなつた顔は段々と生氣を取り戻したよう赤味が戻ってきた。余程、怖かったのだろう。

でも、そんなに怖いもんかなあ。亀。

相変わらず廊下にぺたつと座つたままの状態で、ほつとした顔になつて須藤 朗君は廊下の天井を仰いだ。

「助かつたあ。ああ。今日、『合コン』に行つてホントよかつたなあ」

ドナルドな口がそうつぶやいた。

「あのさ。その人が持つて来る事がわかつていたのなら須藤君は『合コン』には来ないで、その人を玄関払いにすればよかつたんじや

ないの？」

素直な感想を須藤 朗君にぶつけてみた。

天井を仰いでいた顔がゆっくりと私の方に向いた。

そんなこと全く考えもつかなかつた、という表情で。

「佐倉 岬さんは、頭がいいねえ」

その言葉と共に、須藤 朗君の頭はがっくりとうな垂れた。

須藤 朗君は再び落ち込んでしまつた。

全くもつて、どういった運命のめぐり合わせか。

一人暮らし始めた初日に私は『亀』という同居人（亀）と、隣の男『スドウ 口ウ』君改め二階の男『須藤 朗』君とお知り合いになつてしまつたのだった。

## 2話・地味な女

昨夜の電話での約束通り、林 利奈は会社近くのコーヒーショップで俺を待っていた。

林は、入り口近くのテーブルに席を陣取つて俺の姿を目にとめるといひらりと手を振つてきた。

そんな林の姿を確認して、ああ、これで話しが出来るとほつとした反面、ああこれから話さなきやいけないんだあと、思つどびつと疲れが出た。

月曜といつ、一週間がこれから始まる朝だといつのに、気分はもうどつぶりと金曜の朝だった。

田で林に合図をしながら、俺はカウンターにコーヒーを買いに行つた。

程よく効いたクーラーが心地いい。

ズボンのポケットから小銭入れを出して、アイスコーヒーのショートを頼んだ。

流れのよくな口調のお店の女の子の声はマニュアル通りで、それはまるで店に流れるBGMの様だつと思つた。

コーヒーのいい香りに、リラックスする。

ふうとため息が漏れる。

そういえば、家のコーヒーは切らしていたかも知れない。タバ、空になつたビンをゴミ箱に捨てた記憶が頭を過ぎる。帰りにスーパーに寄つて帰つたほうがいいかなあとと思つた。

駅前の店は九時まで開いているので、残業が長引かなければ、なんとか寄れそうだと思つた。

考え事をすると無意識に右手がネクタイの結び目をついてしま

う。

絹のひんやりとした感触が手に伝わつた。

ああ、苦しいなあ。

暑かつたし。

おつと。

これから、仕事だというのにネクタイを緩めるわけにはいかない。社会人になつてネクタイをする様になつてもう五年は経つといふに、これだけはどうも慣れなかつた。他のヤツに聞いても、別段ネクタイがどうのつて言つヤツは俺以外はいなかつた。

『アノ生物』といい、ネクタイといい。

俺の意見は少数派だつた。

まあ、ネクタイの事で言わせて貰えれば、こんなのしたくない位、今日は朝から暑かつたんだけど。

いよいよ夏が本格的にやつて来くるのを実感した。

調子の悪いエアコンの修理には、明日の夜に来てもひつひつとなつた。

まあ、一番暑い日中に家にいられないわけだからそんなに不便つて事でもないんだけど。

夜だつて平氣で窓を開けて寝ちゃう俺だし。

でもそうなると、やつぱり今日は明日の分まで多めに残業したほうがいいのか？

コーヒー

クーラー

残業

「おまたせしました！　アイスコーヒーのショートのお客様」

「ああ。ハイハイ」

あわててカウンターに向き直る。

そんな俺を見て、バイトの女の子がくすつと笑つた。

マニユアル通りでない、素の笑顔だつた。

アイスコーヒーを片手に持つたまま林のいる席まで歩く。

歩きながら、頭の中を切りかえる。

『やぼやしている場合じゃないぞ。

ふつと壁に掛けてある時計が日にに入る。

八時十五分。

いつもより、三十分は早い。

三十分だ。

そしてこの三十分で、俺はなんとか話しつけないといけない。  
佐倉 岬の部屋に『居候しているアノ生物』の今後の身の振り方について。

「おはよつゝります」林の弾んだ声が耳に響く。

「……おはよ」

アイスコーヒーをテーブルに置いた。

つい、不機嫌な顔になつてしまつ。

俺がこんな気分でいるというのに、爆弾落としの張本人のこの浮かれた様に腹が立つ。

林は、そんな俺を気にもせぬ自分が注文した飲み物（ホイップクリームがたつぷりとのつた冷たいコーヒー、または何だかわけのわからない飲み物）をおいしそうに飲み始めた。

俺にとつての林も、まさにこの『何だかわけのわからない飲み物』と言つたところだった。

「林さんさ、よく月曜の朝っぱらからそんな凄いもん飲めるね」

俺は呆れながら、ストローでアイスコーヒーをすずつと飲んだ。

何も入れていらないアイスコーヒーは、ほろ苦かつた。

「えつ？ 飲み物を選ぶのに月曜の朝も火曜の朝も関係ないんじやないですか？」

マスカラでくつきりした茶色の瞳が、びしひと動く。

睫を動かしながらも、林は尙も得体の知れないドリンクを飲み続ける。

「まあ、いいや。で、いつ持つて帰ってくれるのさ。例のヤツ」と、

本題に入った。

水槽の中に生息していたアノ生物を『固有名詞』で呼ぶことさえ、俺は恐ろしかったのだ。

「例のヤツ? 何でしたつけ?」

予想通り、林は涼しい顔でしらばつくれやがつた。

「須藤さん、行つたんでしょ。『合コン』」

「行つたけど」

「楽しかつたですか?」

「キミの事ばかり考えて、楽しくなかつたです」

まあ正確に言つと、林が持つて来ると言つた『アノ生物』の事ばかりだけど。

「だつたら、行かなければよかつたのに」

「あつちが先約だつたの」

大体、坂田が『みかちゃん』だか『ゆかちゃん』と幹事で合コンをするんで（坂田は「食事会」だつて言つたけれど、アレは『合コン』以外の何物でもないと俺は思つ）、『人数調整』（なんだよこの事務的な響きは）の為に来いつて、しつこく言うモソンでOKした事だつた。

そうしたら、俺が『合コン』に行くと知つた林が「須藤さんが合コンに行くなら、部屋に亀を持って行きます」なんて訳のわからぬい脅しを掛けてきやがつて。

俺の『アノ生物』嫌いは社内では有名な話で（人の揚げ足をとる様な事ばかり、会社では広まるのだ）本気でヤツを恐がる俺の事を見ると、たいていの人はそつとしておいてくれたものだ。

だから、いくらなんでもそこまではしないだろつと半分[冗談で聞いていた話だつたのに。

たかを括つて聞いていた話だつたのに。

やりやがつたんだ、林は。

本当に実行したのだった。

その、犯罪とも言える行為を。

「可愛い女の子はいました？」

林が探るような声で俺に聞いてきた。

可愛い女の子。

「いたかなあ」

ぱつと、佐倉 岬の顔が浮かんだ。

『佐倉 岬』

可愛い顔だつたか？

じーっと林が俺の顔を覗き込む。

しみじみ『美人顔』だなあ、と思う。林って、顔の中のパーツが非常に良く出来ている。

再び佐倉 岬の顔を思い出す。

地味。

佐倉 岬の顔は、地味だつた気がする。

「地味な女ならいたなあ」

「はあ？」

「いや、だからさ。聞いただろ。可愛い女がいたかつて。で、地味な女ならいたつて答えたわけ」

「へえ」

ふふつと林は笑うと、妙に嬉しそうに得体の知れない飲み物を飲みだした。

ストローにはピンク色の口紅がついていた。つてことは口紅だつて食つているつてことだらうし。

あの味つて女は気にしないのかなあつて思う。

俺は気にする。

外国の口紅は嫌な味がする。

できたら、何にもない唇がいいと思う。

でもそうすると、やっぱり顔色が悪く見えるのか？

林のストローを持つ指先にある形のいい爪は、口紅と同じ色だつた。

女だなあ、と思つ。

女は毎日大変だーねえー、と。

女といえば、昨日の佐倉 岬はおかしかつた。

そーいや、佐倉 岬は化粧をしていたか？

たくさん食つていた様だつたから、落ちたのかもしれないな。

それにして、佐倉 岬の『あの顔』。

恐る恐る自転車を降りた時の『あの顔』。

あれは傑作だつた。

かなり俺の中ではウケていた事だけど、まさかあの場で大声で笑うわけにもいかず笑いをこらえるのに苦労した。

それでもつて、見ない振りをしてたけど降りた後も佐倉 岬の足はガクガクといつていたのだ。

あんなに、自転車に乗ることを何でもない事の様に言つておきながらのあの様さまだもんな。

で、とつと自分の部屋に戻つたんだがつたと思つていたら、どーいう訳かポストのところに立つていて俺にお礼まで言つちやつたりして。

へんな女だつたな、佐倉 岬。

待つか？ アノ状態で、初対面のオトコを。

俺は、都會で生活しているのにあいつた善人ぶつた無防備な事をする様な女は好かなかつた。

自分の身を自分で守ろうとしないヤツはオトコでもオンナでも好ましいとは思えなかつた。

だから、意地悪の一つでも言つてやりたいと思つた。

ちょこつと突付けば、すぐにぼろが出ると思つた。

やつた事もない事を、やつたかの様に言うそんなんはつたり女だから当然、俺の言つたことに反撃してくるだろつと思つた。  
けれど違つた。

佐倉 岬はこつちが拍子抜けするほど素直だつた。

そうなつてくると、何だかこっちがイイヒト相手にハツ当たりしている子ビもみたいな気がしてきた。

あ、佐倉岬めりも俺は年は下だかい。子どもと言えばココモ

なんだけど

待て

それは、全く面白くない。

「で、いつ持つて帰つてくれるのね？」

改めて林に聞きなおす。

休憩のことを考える為に貴重な三十分間を使っている場合じゃない。

一体何を考えているんだ、俺は

オイオイ、林。

どうにかしてくれよ。

まさか。どうにか『しない』気じゃないんだろうなあ。

「あとで、俺の部屋の鍵も返してよ。」

「くれたんじやないんですか？」

「ねつかし」なあ

おかしいのは、おまえの頭じゃ。

木が首を少しおじいて考えるよくな仕草をする  
策略家の瞳が面白そうに俺を見つめる。

その顔は確かに魅力的だ。

美人っていうのは、自分が美人だつて事を知つているんだろうか

鏡を見てどんな気持でいるんだろう。  
聞いてみたハモんだ。

?

おまけに林は顔だけじゃなくて、仕事だって出来る女だった。

だから、嫌いじゃない。  
だけど、好きでもない。

「わかりました。鍵も返しますし、例のヤツも持つて帰りますから」「奇跡の様な言葉が、林の口から出て来た。  
林が『爆弾処理班の女隊長』に見えた。

偉いぞ、林。

なんだ、三十分も必要なかつたじゃないか。

ほつとして、顔だつてにやけてしまう。

すると林は、俺の顔を見ながら残りの飲み物を一気に飲み干した。  
『じぽじぽ』と音を立てて飲み物だけがなくなつた。  
あのホイップクリームだけが、残つた氷の上にのっかつっていた。  
まるで飲みものの残骸つて感じ。

なんだかイヤーな雲行きを感じた。

こうなつたら、林の気の変わらないうちに。

「じゃあ、林さんさ。早速」と、話しう出した俺の言葉は、突然ぱし  
つとした声で遮られた。

「だから、結婚して下さい」

「ああ？」

馬鹿みたいに口を開けたまま、俺は固まつてしまつた。

今なんて言つた？

「け、けつこん？」

「そうです。須藤さん、私と結婚して下さい」

呆然とする俺に満足気なほほ笑みを浮かべながら、林はすつくと  
立ち上がつた。

俺は林に見下ろされる形になつた。

「須藤さん、考えておいてくださいね。私は、私が納得できる答え

が貰えるまでは、例のヤツは取りに行きませんから」

強い眼差しを俺に向けて、林ははつきりとこう言い放つた。

一体、何が何でどうなっているんだよ。

そして林は、再び俺につこりと極上の笑顔を向けたかと思つと  
颯爽とした足取りで店から出て行つた。

結婚？

誰が？

俺がかあ？

ウソダロ！

『厄年』つて、やつぱりあるんだろうか？

「えつ？ 厄年？ 女のならわかるけど」

秘書室のベテラン、莊野さんが答える。

しゃべりながらも、肉付きのいい指はペラペラと書類を捲つてい  
た。

総務の、俺が担当する書類の提出期限が今日なのだった。

「あつ。ねえ、ここには、何を書くんだっけ

捲る指が止まり、書類の空欄を指す。

「ああ。ここはですね」

書き漏らされては、手間が余計かかると言つもの。ただでさえ秘  
書は、席にいるんだかいないんだか解らない職種だ。（秘書って言  
うのは、ひとたび役員につかまる、会社にいても「いない」存在  
になつてしまふ事があるから。）

俺の指示通りに、莊野さんが綺麗な字で空欄を埋めていく。  
「で、厄年つて男と女で違うんですか？」

秘書室は、俺のいる総務の隣にあつた。

ついでに言うと、その秘書室の向こうにまじの会社の役員さんた

ちのいる部屋がある。

そして総務と、秘書室と役員室はとても密接にやりとりがあつた。

「ああ。厄年ねえ。須藤君って仕事は出来るけど、意外とそういうこと知らないのね」

俺に渡す書類を揃えながら、莊野さんは笑つてゐる。

秘書室には莊野さんの他に三人の秘書が在室していた。

「莊野さんだつてご存知ないんでしょ」

少しむつとして言い返す。年下の男子社員が拗ねて言つて言葉くら

いは、莊野さんは軽く流せる人なのだ。

「私？ だつて気にしないもの。 そんなの氣にしてたら、女を四十年もやつてられませんことよ」

ゆつたりとした体を揺らしながら、クスクスと莊野さんが笑う。

莊野さんのそれつて、答えになつていない。

気にしないから、知らなくていいってことか？ だつたら、俺と同じで知らないって事じゃないか。

「あら、でもうちの夫が何か厄がどうのつて言つていたわね」と、莊野さんは考え顔になつた。

「ただ今戻りました」

はきはきとした声が居室に響く。

「相澤さん、ご苦労様」

莊野さんが、帰つてきた秘書の相澤に声を掛けると相澤のこわばつていた顔が、ふつとほころんだ。

心なしか目も充血している。

もしかしたら、泣いたのかもしねない。

大方、役員さんに無理難題を言われたのだろう。

少し氣の毒になる。

「相澤さん、お茶をいれるけど何を飲む？」

奥のほうからも、別の秘書が相澤に声を掛けた。

「あつ、私が」

弾かれた様に、相澤が声のほうに反応した。

相澤は秘書室の中では一番年が若い。

入社して、今年で確か三年目だったと思う。

「やつてもらえば？ 相澤さん、顔が死んでるよ  
相澤の顔が真っ赤になつた。

「す、すみません」

そんなつもりじゃないんだけど、俺の言い方はきついらしい。  
やばい、と思った。

今の言葉で、相澤がへこんでしまつた。

莊野さんに軽く睨まれる。

「ねえ、相澤さん。私たち秘書室は一つのチームなんだから、そんなに一人で頑張らなくてもいいのよ。どんどん、私たちに相談してくれてもいいんだし。ほら、こういった書類なんかで解らない事があれば、ソームの須藤君に手伝って貰つてもいいんだし」

そう言いながら、莊野さんは書きかけの書類をひらひらさせた。

莊野さんのフォローだ。

莊野さんは人を使うのが上手い。

年数だけで、上にいつてしまつ男の社員よりもよっぽど集団で仕事をしていくセンスがある。

おかげで、うちの秘書室は本当にまとまりがよく仕事をこなす力もある。

莊野さんのこうじつた所を見習いたいと思つ。

会社には、困ったチャンの上司もたくさんいるけど庄野さんの様に、『オトナ』だつてたくさんいる。

そんな人達が必ずしも出世していないところが『企業マジック』でもあり『人事の七不思議』でもあり。

結局相澤は、先輩秘書の村野さんと一緒に給湯室にお茶を入れに行つた。

その後、ばたばたと立て続けに内線電話が鳴り結局秘書室は莊野さんと俺だけになつてしまつた。

莊野さんは黙々と書類の空欄を埋めている。

あれだな、まるで家庭教師にでもなった気分。

「須藤君、あんまり女の子を泣かしちゃダメよ」

突然、莊野さんに釘を刺される。

相澤のことだらうか。

「すみません」

「違つて。相澤さんの『じゅないわよ』

「はあ？」

「はあ。これだから最近の若い男子はねえ<sup>だんし</sup>」

「何ですか？」

「つまりね」

莊野さんが書類から顔を上げて俺を見る。

「会社つてある意味『密室空間』でしょ。他の人よりも少し仕事が出来て、少し見た目もよければ、女の子は参りぢやうのよ」

「それ、俺のことなんですか？」

「まあね。須藤君さ、この間『禁煙コーナー』を作ったでしょ。ほら、役員室の払い下げのソファとか使って。ああいうの、ポイント高いのよ」

「別に、俺が作ったわけじゃないですよ。たまたま、今回の室内の間仕切りの関係で、まあ、少し空間が出来て。で、じゃあ、以前から要望があつた禁煙コーナーはどうですかって上に提案して、通つて、出来たつてことで」

俺の会社じゃないんだから、そう簡単にあちこちこじれる訳じゃない。

もし仮に俺の会社なら、今すぐにでも『全室禁煙』にしてやる。

「まあ、そなんだけど。それでも、女の子はそうは見ないのよね。だから、本気でもないのに女の子に軽口たいたり下手に手を出したりしないようにね」

「……」

そういう事かあ。

『泣かさないで』なんて俺が『泣かされている』と言つた。  
そういえば、林とも確かにそのことで接触が多くなつて今回のこ  
とに至つたわけだし。

林も以前から『禁煙室』を希望していた一人だった。

そこで禁煙室を作るに当たつて、実質的に女子のリーダーシップ  
をボランティアとしてとつてくれたのも林だった。

だけどなあ。

「もしかして、なにか噂になつてるとか？」

「噂？ なあに？ もう既に誰かと何かあつたわけ？」

冷ややかな目で莊野さんが俺を見てきた。

「いえ、ないですよ」

背中に冷や汗たらり。

「忠告までによ。忠告までに。なーんか、須藤君つてお仕事以外は  
あてにならない感じだし。まあ、四十女の勘かな。じゃあ、はい。  
この書類よろしくね」

出来上がつた書類を俺に渡しながら莊野さんがウインクしてくる。  
「確かに預かりしました」

俺は一礼をして秘書室を出た。

恐るべし、莊野さん。

四十女の勘は侮れない。

でもなあ。なんだかなあ。

「一言セイでもないのに、そこまで言われなきゃいけないかな。  
面倒だなあ、と思う。

だいたい二十五を超えた男女が、いちいち真面目にアレコレしない  
といけないんだろうか。

お互い承知の輔の自己責任だろうが。

なーんて、思つてしまつのは、やはり俺が軽いんだろうか。

いい加減なんだろうか。

林と寝た事は、それは事実でもあるわけで。そして林は俺と結婚したいと言つてきた。

結婚。

結婚つて、そういうもんなんだらうか？

社内便やら、持参であちこちから書類が届きだす。

『今日提出期限』という書類は、たいてい『今日の定時のぎりぎり滑り込み』でやつてくる。

もう一日早く処理してくれたら、俺も助かるのにな、なんでそうしないかなあ。

本日最終の社内便のがどつさりと俺の机に置かれた。

「これ、須藤さん宛ての。置いておきますね」

同じ総務の小川さんがメールボックスに来た俺宛のものを持って来てくれたのだ。

「ありがとう、助かる」

小川さんがにっこりと笑う。

彼女の手にも、自分の処理分のメールがいくつかあった。

室内の電気がぱつぱつと消え始めた頃、机の上の未開封の社内便も先刻の半分までの量になつてきた。

とりあえず残り半分のこれを全てファイルしたら、今日は帰ろうと思つた。

チェックをしながら、どんどん部署別に仕分けをしていく。記入漏れのある部署のものには付箋をつけていく。がんがんやっていく。

こうして書類を片付けていくのは結構楽しい。

自分がラッセル車にでもなった気分になる。

どんどん開けていくうちに、一つだけ毛色の違うメールがあった。書類でなくて、何か箱のようなものが入っていた。

「なんじやい、これは」

宛名を見ると。

「業務部 林 利奈」とあった。

そーっと封筒を開けると、中には更に小さなビニール袋に入った箱が見えた。

箱には何かが貼つてあった。

手書きのメモの様なものが。

そのメモは箱にセロハンテープで軽く留めてあるようだった。

片手で袋を持ち上げ、ビニール越しにそのメモの字を読み取った。

メモには、右上がりの癖のある字で『例のヤツのエサです。よろしくね。利奈』と書かれてあった。

……。

エサ。

再びビニールを掲げて透かして見ると。

箱には、やけにリアルに描かれた『ヤツ』の姿があった。

「 ×！」

あやうく俺は、大声あげて叫んでしまうところだった。

『下』のボタンを押して、エレベーターを待つ。  
社用で使う、会社のロゴの入ったマチ付きの封筒を手に持つ。  
この中に、あの箱が入っている。

……恐ろしい。

考えただけで、手の平にじんわりと汗をかいてしまう。  
情けない。

エレベーターは七階で止まっていた。

ここは五階なので、すぐに降りてくるだろう。

「あつ！ 須藤さん！」

はきはきとした、突然の声にびくつとする。

「ああ、相澤さんか」

私服の夏用の麻のスーツを着た秘書の相澤が立っていた。

女子は制服だった。男も制服にすりやーな。

そうすりやあ、会社にはTシャツで来られるの。

「相澤さんも残業？」

エレベーターが下がつてくるのを視覚の隅で捕らえながら相澤に話しがけた。

もう瞳には赤みがなくなっていた。

自分が泣かした訳じゃないけど、ほつとした。

「あっ、はい。そうなんです。で、あのですね、厄年の事ですが  
そういうて相澤が俺にメモを渡してきた。

「これに書いてありますので」

チーンと軽やかな音がしてエレベーターが開いた。

「ああ？ ああ」

相澤からの紙を受け取りながら2人してエレベーターに乗り込む。  
エレベーターの中には7階から降りてきたと思われる同じ会社の  
社員が乗っていた。

俺たちが乗るとエレベーターはほぼ満員になつた。

なんだかんだ言つても、どこも残業は減らないのかもな。  
ギュインとエレベーターが一階まで降りていく。

「莊野さんからだつて？」

隣に立つ相澤をそつと見下ろす。

「はい」

相澤は、やけに小さくなつて立つていた。

混んだエレベーターは、女の子には辛いものがあるだろう。

「でも、なんで相澤さんが？」

「そ、それはですねえ」

なんなんだろう？

どうも相澤の歯切れが良くない。

「あつ。相澤さん、実は俺のことが好きだとか？」

ついからかってしまった。

そして、言ってから失敗したと思う。

昼間に莊野さんに釘をさされたばかりだと呟つた。

「いや、今のは」

「ば、ば、ば、バカな事言わないで下さいよ」

冗談だから、と言おうと思つた俺の言葉を、異様に焦つて真つ赤になりながら相澤が遮つた。

そうだよなあ。失礼致しました。

再び、チーンという音と共に、エレベーターの扉が開く。

ぞろりぞろりとエレベーターから人が降りる。

視線の前にあるガラス張りの窓の向こうの外は当然のじとく暗かつた。

でも、夏の夜道は嫌いじゃない。

わくわくした感じが、たまらない。

「相澤さん、夕飯は食べたの？」

「えつ？ ああ、まだですけど」

相澤は何かに気をとられていたようで、俺への答えが一瞬遅れた気がした。

「よかつたら、何が食べてく？」

相澤がこっちを見たので俺も話を続けた。

相澤のヘーゼルナッツのような瞳が綺麗だった。

「あつと。」めんない。約束があつて

相澤が顔を赤くしながら、やけに小さな声で答えてきた。

「そつか。じゃあ仕方ないな。またね」

「お疲れ様でした」

「はい、おつかれさん」

俺は出口に向つて歩き出した。

なのに、何故か相澤は俺を見送るような感じでその場に立ち止まつたままだった。

ぎりぎりセーフでスーパーに滑り込んだ。  
適当に食べるものを籠に入れていく。

そうだ、『コーヒー、『コーヒー。

コーヒーの棚を見つけ、小さめのビンに入ったインスタントコーヒーをただの種類買いこんだ。

全部で五種類。

これくらいあれば、また当分買わずに済むだろ？

ビールも買った。

このスーパーではビールも売っていた。  
ビールやら、コーヒーのビンやらでやたらといろいろとした買い物になった。

ビールは佐倉 岬への賄賂だった。

この間の合コンでも、佐倉 岬はすいすいとビールを飲んでいた。  
つまり、酒好きには酒が一番有効なのだ。

佐倉 岬には『アノ生物』を預かってもらっていた。  
しかもとりあえず、今の段階では『例のヤツ』に関しては迅速に  
事が運ばないことが見えてきた。

『納得できる答え』ってこののはつまり、林と結婚するとこう  
となるんだろうか。

と言つよりも、林は本気で俺と結婚したいのか？

今日も一日俺なりに考えたけれど、どうもナニとは思えなかつた。  
林くらいの女なら何も俺でなくても幾らでもオトコはいるはずだ  
と思つたし。

なんだかなあ。  
何かわけもあるのかなあ。

もしかして、女子社員の間での賭けの対象になつてゐるとか？  
その線が一番ありえそうな気がする。

『須藤 朗は、アノ生物と結婚のどちらを取るか？』

そういうや以前も、業務部長の髪の毛は『フェイクかリアルか』で女子が賭けていたよなあ。

まあ世の中の女が全てそうだとは、いくらなんでも俺も思わないけど女って可愛い顔しないで平氣で残酷なまねをする。

それをまた、悪いと思ってないところが恐ろしい。

女だつてことで何でも許されると思つてているんだろうか。

もし林のいう事が本氣だとしても（まあ、そうとは思えないんだけど）YESなんて言葉は、俺の口からは絶対に出ないんだから。そんなこといつたら半永久的に例の『ヤツ』は佐倉 岬の元にあるとこになる。

俺のところにきた『ヤツ』を、ずっと預かり続ける佐倉 岬。

現実逃避だ。

そんな馬鹿なことを考える暇があつたら、この状況を佐倉 岬にどう説明するか考えないとけない。

まず帰つたら、早速、賄賂のビールを彼女に渡し。箱を渡し。

「あれつ。須藤君？」

マンションの玄関ホールに佐倉 岬が現れた。

佐倉 岬はベージュの涼しそうなロングのワンピースを細い体に着て髪の毛は後ろで無造作にまとめていた。

あつさりした外観。

ほつそりとした体に真っ黒な髪の毛。

今時、こんなに真っ黒な髪の女は珍しい。

つて待てよ、外觀つて人の風貌を表すときに使つてよかつたんだつけ。

まあ、どうでもいいか。

佐倉 岬に近づくと、彼女の濡れた髪の毛からはシャンプーの一

い香りがした。

風呂だか、シャワーとかの直後なのだらう。

……。

「佐倉 岬さん。昨日の俺の忠告を聞いてなかつたの？」

佐倉 岬がびくりとして俺を凝視する。

彼女の反応が面白くて、わざと仰々しく話しあ出す。

「そんな、いかにも風呂上がりな格好で外に行くなんて、『私を襲つて下さい』ってアピールしてゐるものだつて。こんなのが女子高生でもわかつてるでしょ」

思いつきり皮肉をこめて、馬鹿にした言葉を選んだ。

なのに、佐倉 岬はまたまたやけに素直に返答してきた。  
「外に行こうつてことじやなくて、夕方取り忘れた郵便を、ポストに取りに来たんだけど。でも、これからは気を付けるわ」

またもや、拍子抜けしてしまつ。

そして拍子抜けしながらも思つ。

こういったものの言い方は嫌いじやない。

むしろ、佐倉 岬のこいつらつて、好感が持てる。  
俺なら人に同じ様な事を言われた時に、こいつ素直に返せるか？  
まあ、無理ですな。

はたと気づく。

今、俺はこんな風に佐倉 岬に説教たれたり佐倉 岬の行動をあれこれ批評している場合ではないのだ。

これから『佐倉 岬様』にお願いをしないといけない、という場面だったのだった。

何で話せばいいのか。

どこまで話せばいいのか。

両手にぶら提げたスーパーの袋が急に重く感じられてきた。

「ビールいいなあ」

佐倉 岬のつぶやきが聞こえた。

「あつ、よかつたら飲む？」

最初から彼女に渡すつもりだったのに、やけに恩着せがましく俺は言つ。

「えつ、聞こえた？」

佐倉 岬の顔が赤くなる。

「聞こえました。しつかりと」

「そつか。あはは

誤魔化したように佐倉 岬が笑う。

へらへらとした笑いだ。

佐倉 岬をつるのにビールは有効。

「ところで。須藤君つて面白い買い物するのね」

ビンだらけの袋を覗いて見て佐倉 岬が言つたつた。

「ああ、これ」と言つて、インスタントコーヒーの小ビンを一つ出した。

「いる？」

「ううん、いいわ」

「そう」

「いらぬのかあ。

「ああ、これはさ。俺、趣味なの。趣味つて言わないか。嗜好？こうしてさ、インスタントコーヒーのいろんな種類をその時々の気分で飲むわけ。でもつて利きインスタントコーヒーもできちゃつたりするわけよ」

自分でも可笑しいくらい饒舌になつたしまつた。

「えー？ へえ？ ふーん」

そんな俺の説明に佐倉 岬が面白そうに反応してきた。

ふふふ。須藤君つて可笑しいの。

佐倉 岬が笑つた。  
ぎょっとした。

佐倉 岬は、笑うともの凄く可愛かった。

ふふふ。利きインスタントコーヒー？ おつかしいの。

佐倉 岬の後ろで留めた髪から落ちる後れ毛が笑うたびに肩のあ

たりで揺れた。

さわさわ揺れる髪の毛を、さわさわした気持ちで見てしまった。  
口元から綺麗な白い歯が少しだけのぞいた。  
唇には口紅がのってなかつた。

詐欺だと思つた。

こんなのがりかよ、つて思つた。

もつと笑わせてみたい。

まるで小学生のガキみたいに、そう思つた。  
でも俺がそう思つた次の瞬間、佐倉 岬の顔がふつと暗くなつた。  
笑つたことを後悔したかのよつた表情になつた。

「ああ。ビール選んでよ」

お互ひの間に白々とした空気が流れた。

まるで、今の出来事がなかつたかのような。  
『無かつた』、と言つよりも『あつた事を忘れなきやいけないか  
のよひな』と言つた方が近い氣がする。

「うん。じゃあ

ビールの中にガリガリと入つたビールのつづれ一本を佐倉 岬は  
選んだ。

いろんな種類のビールをいれてあつたのだが、彼女の選んだのは  
一本ともモルツ系のビールが好きだつた。

俺もモルツ系のビールが好きだつた。

「ありがとう。えつと、おいくらかしり  
作つたような明るい声で佐倉 岬が言つ。

「えつ、いいよ。預かり代という事で」

いつちまで、ぎこちないような話し方になる。

「そつか。なんか、ごめんね

なんか、ごめんね。

その言葉がいろんな意味に取れた。

「そりいえば、うちのオキヤクサマひつじはびつなつたの？」

突然、佐倉 岬が聞いてきた。

いきなりのカウンター攻撃だ。

佐倉 岬は、すぐにでも『ヤツ』を引き取りに持ち主が来ると思つてゐるに違いない。

しかし、オキヤクサマか。

なかなか良い表現を使つた、佐倉 岬は。  
などと感心している場合ではナイ。

言わないといけない。

「実は、一、二日でどうにかなるつてことでは無くなつて  
都合が悪いことなので、ついつい声が小さくなる。

昨日初めて会つた男（つまり俺）から『ヤツ』を預かつてくれた  
だけでもありがたいのに、更にまだもう少し預かつてくれなんて、  
よくよく考えたら非常に不気味だ。

俺に妹がいたら、『そんなオトコからの、そんなヤツは預かるな  
！』って言つのは間違いない。

他人に危機管理がどうの、なんてほざいていられる俺では全くな  
かつた。

諸悪の根源は俺か？

まあ、しかし佐倉 岬がダメとなると誰か他に捜さないといけな  
い。

佐倉 岬以外に預かつてくれる人は。

やっぱ、坂田か？　あいつに取りにこむやんか？

「そう。じゃあ、しばらく預かつてあげるよ。みゅうけやんば」

佐倉 岬がビールを一本持つてこっちを見ている。

佐倉 岬は、髪も黒ければ瞳も黒かった。

正月に母親が煮る『黒豆』みたいな色だった。

つやつやと、真っ黒。

「で、みゅうけやんつて？」

だれじゃい。それ。

「ほら、『ミュウータント・タートルズ』っていうアメリカの『ミックスがあるじゃない？ 知ってる？ 須藤君はアイツの和名も嫌いらしゃいから名前をつけたのよ。ミュータントのみゅうちゃん』成るほど。

ミュータントなにがしの、なにがしのほうからつけないとこに佐倉 岬の心遣いを感じる。

なんて言えぱいいんだろう。佐倉 岬つて、面白い。はつと、袋の中に入ったみゅうの餌を思い出した。

「これ、エサだから」

スーパーの片方の袋の中に入れていた会社の袋を「じゃじゃ」と出す。そして更にそこから、例のブツとなるべくパッケージの絵を見ないようにしながら佐倉 岬に渡した。

「あっ。これね。私もじつは買つたんだ。同じやつだわ」まじまじと佐倉 岬はビニール袋越しに箱を見つめた。エサまで買ったのか？ 佐倉 岬。

「じゃ、代金を」

なるべく箱から顔をそらしながら話しかけた俺に「いいよ。ベルもらつたし」と、涼しげに佐倉 岬は笑つた。

エサの箱は見たくないけど、佐倉 岬の笑つた顔は見たいって、アホか俺は。

アホは速やかに退散する事にしよう。

「じゃあ、すみませんがよろしくお願ひします」

エレベーターは、たまたま一階にきていた。

『上』のボタンを押すとすぐに扉が開いた。

部屋は二階なんで外階段を使うことも多かつた。

まあ、特にどっちを使うなんてこだわりは無かつたし。

という事で、エレベーターに乗り込む俺を佐倉 岬が見送るかたちとなつた。

「しばらくお世話になります」

俺は佐倉 岬がいるであらう入り口に向ひ直つてベンツと頭を下げた。

そうしながら、頭を下げながらまた近づいてビールを持参しようと心に決めた。

佐倉 岬は俺が散々悩んでいた『説明』さえも聞かないで、みゆうを預かってくれるというのだ。

それは素直にありがたい。

顔を上げて二階のボタンを押した。

そして佐倉 岬のいる扉の方を向いた。

佐倉 岬の顔が笑顔で一杯になっていた。

?

一体何が何だ？

どうしたって言うんだ？

佐倉岬の笑顔に思いつきり動搖してしまった。  
もしかしたら、俺の顔は赤かつたかもしれない。

「『利奈ちゃん』と仲直りしてね」

閉まるエレベータの扉の向こうに、最高に可愛い佐倉 岬の笑い  
顔が消えていく。

利奈？

「あつーーー！メモ！」

みゆうのエサの箱にメモが入りっぱなしだったことを思い出す。  
ポケットの中で、かさっと紙の擦れる音がした。

莊野さんからのメモだ。

莊野さんの書いてくれた男の厄年に一十七才なんてあつたか？

ともかく、前途多難であるつ夏が始まった。

### 3話・彼からのお誘い

今日で一週間の仕事が終る、という金曜の夜の夕方五時近く。

私が勤める設計事務所に従姉妹の有加から電話があった。

『今日、帰りに岬ちゃんの部屋に行つてもいい?』

特に用事の入つていなかつた私は二つ返事でOKした。

有加と会うのは、あの合コンの日以来だつた。

あれからお互い連絡をとつていなかつたので、多分今日は「須藤君と、あの後どこに行つたか」、「須藤君とは、どうなつているのか」つてことを聞かれるんだろうなつて思う。

実は、須藤君とは同じマンションでしかも彼から亀まで預かっているなんて聞いたら、有加は目をぱちくりして驚くだらう。

私だつて自分で驚いている事だつたし。

事務所で少しだけ残業した後、私は駅前のスーパーで有加と二人分の夕食の食材を購入する事にした。

ここは、夜九時まで開いているので働く人にとっては、ありがたいお店だった。

今日の夕食は、有加のリクエストで彼女の好きな魚介類のパスタを作る事になつていた。

幾つかのハーブと、買い置きのパスタは家にあつたので魚介類とトマトホールを買えばOKだと思つた。

空調の効きすぎたスーパーの店内は、鳥膚が立つ程だつた。

思わず手の平で腕を擦つてしまつ。

手も、指先までが冷たくなつていた。

擦り合わせた部分だけが、微かに熱をもたらしてそれも一瞬で冷めていった。

本日のメインである魚介類の冷氣漂うコーナーを田の前にして私は一瞬怯んでしまう。

そして、ええいつ！ と気合を入れて、鮮魚のコーナーに近づいた。

売り場に置かれたラジカセからは、魚の歌が流れていた。

私は、ろくろく品物も見ずに目的のアサリとイカを買い物カゴに入れていった。

まあ、今からすぐ食べるんだから、そんなに神経質になつて選ばなくてもいいかなあ、とも思つたし。

次に、ビールの「一ナード足を運ぶ。

このスーパーには、アルコールも置いてあった。

本当に便利なお店だと思う。

しかし、やつぱり寒かった。

鮮魚コーナーとは違う、縦型のショーケース全体から、またもや冷気が流れ出ていた。

……。

やつぱり、薄手の長袖一枚を常にカバンに入れておくべきだろ？  
私の場合は。

気合を入れて、ショーケースに近づいて真剣にビールを選んだ。  
自分でも、魚を選ぶ時とは偉く違う態度だと思つ。  
有加は、ビールにつるさかつた。

いま盛んに宣伝している、カロリーの低いビールを好んで飲んでいた。

『岬ちゃん、知つてた？ ビールが一番太るんだってえ』

十分細い身体をしながら、有加はなおもダイエットが好きだった。

『石田 有加：趣味はダイエット』と言えるかもしない。

だから、注意深く『有加ブランド』のビールを選ぶ。

その種類の350mlの缶を一本選んだ。

冷たい手の平で更に冷たい缶を持つ。

きーんと冷えた缶に、体温が吸い取られてしまいそうだ。

やれやれ。

とりあえず、これで有加も大人しいだろう。

次に、私が好きなモルツ系のビールに手を伸ばし。

ドサッ。

その瞬間、私じゃない手がビールをカゴに入れた。  
びっくりしてその手を見る。

見覚えのある、スケルトンのバンド。  
デジタルな表示。

「こんばんは、佐倉さん。今日のメニューは、パエリア？」  
須藤君が私の隣に立っていた。  
言葉が出ない。

あんぐりと口を開けている私にお構いなしに、須藤君はどんびり  
とビールを『私の』カゴに入れしていく。  
ずんずんとカゴを持つ手がしごれてくる。  
すると、たつと須藤君が私からカゴを取った。

「ビールは俺が奢るよ。『みゅう』の預かり代としてさ」  
そう言つと、再び どんどんビールを（しかもモルツ系のものばかりを）入れていく。

困惑してしまう。

「えつ、いいわよ。だって一昨日もビールを貰つたし。それに、  
そんなに飲めないし」  
そうなのだ。

須藤君は、私が『みゅう』を預かつてからというもの、時折ビールを持ってきてくれていた。

まるで、昔の牛乳の配達屋さんの様に、袋に入つたビールを玄関

の前に置いていくのだ。

「でもさ、今日も買つているって事はもうこの間あげたのは、飲んじゃつたって事でしょ。つて事はさあ。成る程。佐倉さんつて、毎日ビールを飲む人なんだねえ」

須藤君の、相変わらず冴えている発言は全て大当たりなので、私は何も言い返す言葉が無かつた。

「ビールさ、これ位あればいいよね？」

須藤君は、大きな手でガラスの中のビールを数え出す。

須藤君の、きちんと切られた爪を見つめてしまつ。

「えつと、俺の分含めて十本入れたけど

「……はい」

もう、何本でもよかつた。

それに対して、このシチュエーションは、一体なんと言つべきか。

58

なんだか、ホントに私はダメだなあと思つた。  
須藤君から亀を預かつた事、さらにその期間を直ち延長してしまつた事。

あ～もう、ダメだよなあとと思つ。

あの時の須藤君の恐がりようや、持ち主がすぐには取りに来れない様子から『私が預かつてあげる』なんて言つたけど。

その時は、本当に軽い気持で言つたんだけど。

そこが、そもそも良くない。  
おせつかいやき、世話焼き。

なんだかんだすぐ人と関わってしまう。

なんの為に離婚した後も、実家には帰らずに一人で知らない町に越して来たんだろう。

こんな自分にがっくらしてしまひ。  
ここにこうして須藤君と立っているのも全ではあの日から始まつ  
ている。

有加に付き合つてしまつたあの日からだ。

須藤君に気がつかれないよつて  
小さくため息をつく。  
でも、仕方が無い。  
後悔したつて、仕方が無い。  
それも、これも結局は自分で決めた事だつたし。  
それに、こんな須藤君とのやり取りだつて、私が『みゅう』を預  
かつてゐる間だけの事だと思うし。  
いづれ『みゅう』は、持ち主の元に戻るんだし。  
そうしたら、こんな風な馴れ合つよつな付き合いも当然なくなる  
だろう。

「パエリアつて米を洗わないで作るつてホント?」

須藤君の声が遠くに感じた。

ふと見ると、隣に立つていたはずの須藤君は、人の買い物力ゴを  
持つたまま歩き出していた。

慌てて、その後を追いかけるようにして歩く。

「パエリアじゃないよ。今日作るのは

「えつ?」

驚いた顔して須藤君がこつちを向いた。

そんな顔をされるところの方が驚く。

須藤君は、私がパエリアを作るものだとばかり思つていたのだろうか。

どう考へても、パエリアを作る人の方が『絶対数』少ない気がするんだけど。

「魚介類のパスタを作るの」

そう答ながら、わざわざ訂正をする程の事でもなかつたかなあ、なんて思つ。

こんな事でも、馬鹿正直に返答をしてしまつ私が嫌だ。融通がきかない女だなあつて思つ。

「一人で食べるの?」

面白い質問をしてくる人だ。

「従姉妹とよ」と、答えながら、またまた正直に答えてしまつ自分で腹が立つ。

こういつた処、だめだなあと思つ。

誤魔化す術を知らない。

今日の夕飯のメニューとか、それを誰と食べるかとか。よくよく考えたら、随分とプライベートな話だつた。

「従姉妹? 佐倉さんの従姉つて近くに住んでいるの?」須藤君の質問は続く。

ああ、嫌だなあ。

こんな事は他人とは話したくないのに。

「まあ、近くつて訳ではないけど。須藤君も知つていいでしょ。この間の幹事の女の子よ」

「幹事の子?」

「うん」

「ああ! 『みきちゃん』だか、『ゆきちゃん』?」

須藤君の大きな声に驚いてしまつ。

「『有加』です」

「おっしいなあ」

ちつともおしくない。

「で、どんな子だつけ?」

「可愛い子」

本当に覚えていないのだろうか？

「ああ。ふーん。ああ、そうか」

須藤君は、なにやら考えるよつたそぶりをしてレジに向いだした。

そして、すぐ側の空いているレジの前にカゴを置いてズボンのポケットからお財布を出した。

「ねえ、須藤君。ビール以外は私が払うんだからね」

「えつ？」

そう言つた時に、すでに須藤君のカードはレジを通つていた。

「何？ 佐倉さん」

全然人の話を聞いていないよつた顔の、須藤君が振り向く。お会計はカードで一括されてしまった。

「須藤君、後でレシート見せてね」

カードとレシートを受け取る須藤君を置いて私はビニール袋が何枚か載せられたカゴをひょいと持ち上げる。ずつしりとした重さを感じる。

ビールがこれだけあると流石に重かつた。

「はい、はい、はい。俺が持つから」

レジの人からカードを素早く受け取つた須藤君が私が持ち上げたカゴを取つていつてしまう。

須藤君は歩くのが早かつた。

スタスタと大またで歩いた。

「今日、坂田がうちに来るんだ」

追いついた私に、須藤君がそんなことを言つた。

「へえ。坂田君」

あの合コンの時も感じたけど、やつぱりこの二人は仲がいいんだなあつて思つた。

二人で並んで、買った物をビニール袋に入れ出す。

須藤君は、ビールばかりを一つの袋に入れた。

私は先ず、イカとアサリを備え付けの小さな透明のビニール袋に入れた。

そして次に、スーパーのロゴの入ったビニール袋を開けようとした。

実は、このての袋を開けるのが私は苦手だった。

たいてい、一回では開けられなくて  
ぐずぐずと遅くなってしまうのだ。

「だからさ、来れば。うちに。有加ちゃんと一緒に」

須藤君の言葉で、袋を開けようとした手が止まってしまった。

「……なんで？」

私は隣に立つ須藤君の横顔を見た。

港の背が高いせいか、須藤君の事は、そんなに背が高い人だとは思わなかつた。

斜め上に目線を送ると丁度いい所に彼の耳が見えた。  
耳たぶが見えた。

須藤君も動きが止まっていた。

「坂田から、『合コンで知り合つた可愛い有加ちゃん』って、耳が痛いほど聞かされていてさ」

ぼそぼそと、須藤君がつぶやく。

面白くなさそうな声だつた。

面白くない事なら、私達を誘わなければいいのに、と思つ。

そんな須藤君の視線が、私の手元に落ちる。

「佐倉さん、とろい」

えつ？ と思って須藤君を見ると、彼は既に袋にビールを詰め終わっていた。

一方、私はと言つと。

まだ、スーパーの袋さえも開けていなかつた。

「貸して」須藤君が私から袋を取ると、彼はそれを『ぱつ』と一緒に発で開けた。

そして、まだ入れていない品物をどんどんしまいだした。

「ちょっと相談してみてよ、その事。従姉妹さんとさ」

そういうふうと須藤君は私買った荷物まで持つて、歩き出した。

「えつ。岬ちゃん、どうこう事?」

部屋にやって来た有加は、

私が須藤君の『お誘い』の事を話すと田中が白黒しだした。  
そりや、そうでしょう。

「だから、須藤君とはね、たまたま同じマンションだったの。でね、  
今日の帰りに寄ったスーパーで偶然会つて。有加が今からうちに来  
るつて話したら、須藤君の家にも坂田君が遊びに来る事になつてい  
るうじへ。で、よかつたら、一緒に飲みませんかつて」

須藤君から亀を預かっている事は、取り合はず省略した。  
そんな事は、きつといはずれ解る事だらう。

「それで、岬ちゃんは、何て答えたの?」

「ん。従姉妹と相談しますつて」

相談してつて言つたのは須藤君だけど、それもこの際そういう事  
で。

「そつか

よつやく気持が落着いたのか、有加は自分で買つてきたケーキを  
袋から出し始めた。

「これ、新商品うじへ。会社の側の『パーティ』で売つてたから」

「へえ

有加の好きなケーキ屋さんの包装紙だつた。

有加はダイエットをしている反面、こうじつたデパ地下の商品を買うのが好きだった。

「私、言つたつけ。岬ちゃんに」

「何を？」

「あのさあ」

そう言いながら、有加はケーキ屋さんの包装紙を箱から剥がしだし、剥がしたそれを綺麗に置みだした。

「だから、坂田君の事が気になるつて」

有加の指が綺麗に四角に包装紙を置む。

その動く指先を私は見ていた。

「聞いては、無いけれど」

私の言葉を聞いて、有加が照れたような笑い顔を私に向けて來た。

「「わかった」」

二人で声が揃つてしまつた。

顔を見合わせて笑い出してしまつ。

「あー！ もう。すぐ岬ちゃんには、ばれちゃうんだから」

有加が顔を真っ赤にしながら笑う。

そんな有加がとても可愛い。

「ああ。でもなあ。どうするかな」

有加が考え始めた。

有加をその場に残してキッチンへ向つ。

そして、途中で止まつていたサラダ作りを再開し始めた。

千切りにして塩を振つていた大根の水気をぎゅーっと絞つた。

面白いほどに水ができる。

何度かに分けて大根の水気を抜いた後、大葉を刻みだした。

大葉の爽やかな香りがすつと氣持よく胸に入つてくる。

このサラダも有加の好きな一品だつた。

大根サラダのドレッシングは、以前買った和風のものにしようと  
思った。

冷蔵庫をあけてドレッシングを確認しようとした。

ひょいと有加の顔が廊下から覗く。

キラキラとした瞳だった。

その勢いと瑞々しさは、ある種、感動的ですらあった。  
有加の瞳には未来が広がっていた。

「岬ちゃん、一緒に行ってくれるかなあ。須藤さんの部屋に  
有加がそう言った。

## 4話・一番人気の女

坂田 浩一は、この半年ばかり『女断ち』をしていた。

「有加ちゃんが来る？」

坂田のヤツは、真っ赤な顔して俺を見てきた。

氣色悪い。

そんな顔で、俺の事を見つめるな。

「そつかー。じゃあ、どうする？ 晩飯」

そう言いながら坂田は、『コイツが買ってきたたこ焼きをガサガサと袋から出して机の上にのせだした。

駅前近くに出来たこの評判のたこ焼き屋は、連日長い列ができる。

坂田は、「今日は、とつてもたこ焼き気分」、とこいつ事らしく、その長い列に御丁寧にお並びあそばして『和風たこ焼き』と『元祖 キムチたこ焼き』を、お買い求めになつたのだ。

ふと、佐倉 岬達の今夜のメニューを思い出す。

魚介類のパスタだと言つていた。

魚介類のパスタとたこ焼き。

食い合わせ的には、OKなのか？

まあ、シーフード繋がりではあるが。

「言つとくけどね、坂田。『来る』じゃなくて『来るかも』だからな。つたくよお、お前は一体いくつだよ。コーコーセイじゃないんだから、止めろよな。気持ちの悪い。そのウブそうな反応は」

田の前の同じ年の男に、俺はそう言った。

コイツは、半年前にこっぴどく女に振られた。

それ以来半年。

勝手に自分で女の子を「自肃」しちゃって、で、この夏 自ら

「解禁」（おまえは鮎か？）宣言していた。

そして、坂田クン復帰第一弾として組まれたのが、佐倉 岬の従姉妹と会った合コンと言つわけ。

なんて言つか「たこ焼き気分だから」って言つて列に並んだり、

「解禁したから」って事でいきなり女の子に惚れたり。

坂田は、いい意味で素直。悪く言うと、単純。

策略家になれ、とは言わないけど、もう少しビビリとかして欲しい。

そんな坂田の事を考へると、意外と友だち思いな俺がいたりする。

こんな風に、応援してあげよつなんて他のヤツに対しても思わない事だから。

「いやあ、こんな気分つてや、ちよつと久しぶりなもんでねえ。  
緊張、しちゃいますなあ」

嬉しさを隠せない語調で坂田が言つ。

「だつて、この間も昼飯二人で食つたんだろ？」「  
ため息をつきながら、隣にいる坂田を睨む。  
二人して台所に立つていた。

狭い台所は、ぎゅうぎゅうだった。

俺はでかい鍋をシンク下の棚から出し、水をたっぷりと入れてガス台にのせた。

坂田は、冷蔵庫からきゅうりを出していた。

「だつてさ、朗。あれば、あらかじめ約束していく事だろ？　いつ  
いう風に、不意に会えるつていうのとは、違つじゃん  
力チヤと火を点けた。

炎の大きさを、鍋の底に合わせて調節した。

「へえ。そーいうもんですかねえ」

俺にしてみれば、どっちにしろ会うわけなんだから 約束して会おうが、偶然に会おうが、全く同じに思えた。

坂田の様に、そこになんらかの違いを見出す事なんて考えたこともない。

まあ、坂田は妙にロマンチックなところがあるから、今しがして色々と意味があるのかも知れない。

坂田が丁寧にきゅうつを洗い、洗ったきゅうつを次々ビール袋に入れる。

そして、台所の流しとガス台の間にあるところ（向て皿の）だ、このスペースを二～三回軽く叩きつけた。

ボロボロになつたきゅうつを更に適当に手で折つていく。

坂田が碎いたときゅうつを、俺は油と生姜と鷹の爪を入れて炒める。

味付けは、酢と醤油だ。

簡単だけど、これがとってもビールには合つ。

これが今日の「THE キャンプメニュー」だった。

俺たちは、幼稚園の頃からお互いキャンプで鍛えあつた仲で、数えると気が遠くなるほどアモダチをやつしている。

そういう付き合つて、悪くはない。

「これ、運んでよ

きゅうつを盛つた皿を坂田に渡す。

皿を受け取りながら、いやつと坂田が笑つた。

「朗、おまえ、黙つてたな」

昔から坂田は、俺より少し背が高い。

とうとう「イツの背を追い抜く事が出来なかつたのが、ちーとばかり悔しくもある。

俺は皿線を少し上に上げ坂田を見た。

「何を？」

「朗が、佐倉 崑さんと同じマンションだつて

気がついていたか、と思つ。

「あれ？ 言わなかつたか？」

冷蔵庫を開く振りをして誤魔化す。

冷蔵庫の中には、坂田が買ってきた生のピザが入っていた。

ピザとたこ焼きとパスタか。

小麦粉屋にでもなつた気分だ。

「俺は、聞いてなかつたけどなあ」

何か言いたげな坂田だった。

別にわざと話さなかつた訳じやない。

色々と説明するのが面倒だつただけだ。

「あの日さ。おまえが一番人気の岬さんを攫つていつたんで、残された奴らブーブー言ってたぜ。まあ、他の女の子の手前あからさまな事は、なかつたけどな」

岬さん。

「一番人気、だつたのか？」

「何を言つてるんだよ。おまえだつて狙つていたんだろ？」

「このこのお」という仕草をしながら、坂田は皿を運んでいった。

狙つていた、と言えば、そななのかもしけない。

あの場で「一番帰りたそうにしていた女」つて事で。

「いつしょに抜けるのに一番適した女」つて事で。

しかし、いくら坂田にでも、そんな表現で佐倉 岬の事を言い表すのは、佐倉 岬に悪い様な気がした。

「どじが、一番人気だつたわけ？」

恐る恐る聞いてみる。

「おまえが一番よく解つてるんじゃないの？　まあ、他の奴らのいうには、第一清楚だ」

清楚、ねえ。

佐倉 岬の顔を思い出す。

「地味顔つて事だろ？」

「お前一回、日本語を習い直せ」

そ、そなのがか？

「しーません」

「第二に、優しく儂げな雰囲気がある」

ハカナゲ。

あの「みゅう」の入った水槽を両手でしつかり運ぶ姿は、男の俺から見ても逞しかつたぞ。

「第三に」

「まだあるのか?」

「スタイルが良い」

「……」

おいおい皆さん、何をもつて「スタイルが良い」と言つんだりうねえ。

「で、どこまでの付き合いになつたわけ? 岬さんと」

さつきから、坂田が「岬さん」って言つのが気になつてしまふが

ない。

「どこまでの付き合いについて。『』近所付き合い』だろ」

「ただの?」

「ただの」

「……してないの?」

「……坂田君。お下品」

男同士の会話は、まあこんなモンなんだけど。

「それは、大変失礼しました。そつか、朗は岬さん狙いじゃないんだ。つて事はさ、岬さんへのアタックにまだ望みアリつて伝えていいつて事かな?」

坂田は半分俺を挑発するように、そして半分は他の奴らへ朗報が伝えられるぞ といった二コアンスで、そんな事を言いやがる。

「いーんじやないのおー」

なんだか面白くない。

わざとそつけなく、坂田に答える。

火にかけた鍋のお湯がグラグラと沸いて来た。俺はコンロの火を止めた。

「そのわりには不機嫌そうな声だね、朗クン」

坂田の台詞に、かちんと来る。

「言つとくけどね。今からでも、彼女たちを俺の部屋に呼ぶのを  
断つてもいいんだぜ」

坂田の目がまん丸になる。

「あつ、朗！ 拗ねてる？」

拗ねてる、だとお？

「あつー！ 腹が立つ。よし、今から俺は佐倉 岬の部屋に行つ  
て今日の事は中止にすると伝えてくるからなー」

全く。

何で、坂田の為にこの部屋を提供しようと言つ トモダチ思いの  
優しい俺が、こんな風にからかわれないといけなんだ？

俺は、勢いよく玄関へとドスドスと歩きだした。

あわてた坂田が、俺に絡み付き背中に乗つてくる。

プロレスの技をかけるような格好で、坂田は俺にのしかかってきた。

まるで坂田を背中におんぶした様な体制になりながらも、どう

にか玄関まで辿り着き、たたきでスニー カーをつっかける。

そして、絡まる坂田の腕をひん剥いた腕で玄関のカギを開け、  
そしてドアを開けた。

「……コンバンハ、須藤君。もしかして、お取り込み中？」

少し視線が低くなっている俺の目に、大皿に乗つたうまそつな大  
根のサラダが映つた。

そして、そーっと目線を上に移すと。

そこには、ただ今の声の主 黒豆みたいな目をした佐倉

岬が、じっと俺を見つめて立つていた。

マンションのドアを開けた途端に、涼やかな夏の虫の音が聞えた。

蚊が部屋に入っちゃうかなあ、と思しながらも、背中でドアを押されて有加を待つ。

金属のドアの冷たい感触が、木綿のワンピース越しにじわじわと伝わってきて気持ちがいい。

蚊と言えば、と思い笑つてしまつ。

昔からやたらと蚊に刺される港と違つて、私はあまり蚊に刺されなくて。

そんな私を見て港は、「岬には、ムシもつかないんだなあ」なんて、日焼けだか虫刺されだかわらない腕をボリボリ搔きながら悪態をついてきたっけ。

床にポロポロと落ちる茶色の皮が汚くてその事を注意すると、一ヤニヤと笑いながら、わざと皮を私の方に飛ばしてきたり。

本当に港はワルガキだった。

そのワルガキ港も、今では小学校の先生をやつている。

港が「先生になる」、なんて言つた時に家族全員、滅茶苦茶に驚いたけど、今となつてみると、まあ意外に向いているのかも、と私は思つていた。

ただ、港が『先生』をしていく中で家族としては、少しばかり心配になることがあつたのだけれど。

二十九歳の姉が二十七歳の弟の事を心配するなんて、なんだか過保護だと思わないでもなかつた。

でも、お互いがオトナと言われる年になつてみても、姉は姉で弟は弟なのだつた。

どんなに体が大きくなつても、どんなに肩書きが立派になつても

港は私の『弟』で、『姉』の私にとつてはいつまでたつても心配な存在だった。

なんて、思いながら。

今私は、港の事を心配するよりも、自分の事をしつかり考えないといけないのかもしれない、と思つた。

港は口には出さないけれど、今回の事で相当私の事を心配をかけているのは分かつていたし。

遂に、弟にまで心配されるようになつたかあ、なんて少し複雑な気持になつたり。

有加は、まだ来ない。

初夏の夜風が頬にあたつた。

腕からぶら下がつた、パスタの材料の入つたスーパーのビニール袋も乾いた音を立てて微かに揺れた。

手には、さつき作つた大根のサラダが盛られたお皿があつた。こうして有加を待つ間、段々とサラダが手の中で温んでくるような気がした。

「ゆーかあ。まあだあ？」

なかなか来ない有加に声をかける。

私の声を聞いて、洗面所からひょいと有加が顔を出してきた。

「今、行くからあ

有加の手には、口紅があつた。

さつき、須藤君の部屋に行こうと一人で玄関まで来たのに、「やっぱり、もう一度洗面所に行つてもいい?」と言い残して有加は、お化粧直しに戻つてしまつたのだ。

はあー、と溜息をついた。

ぼんやりと有加のピンクの小さなミューるを見つめる。

有名なブランドの名前が書いてあった。  
高かつたんだろうなあ、なんて思った。

「岬ちやん、お待たせ、お待たせ」

ようやく有加が、ケーキの箱やらパーティで買ったお惣菜を持って玄関までやって来た。

有名ブランドの名前が、有加のすんなりと細い足の甲で消されていった。

「行きましょうか」と有加に聞くと、「うんー」とこう元気な答えが返ってきた。

すつきりとした有加の表情だった。

お化粧なんて直さなくても綺麗だったのに、それでも、少しでも奇麗な自分を見てもらいたいと思う有加の気持ちが可愛いいと思つた。

「岬ちやん。顔、ヘンだよ」

「えつ。……えつー?」

「嘘だよ、綺麗だよ」

有加がケタケタと笑いだした。

「ヘンな表情をしてた、つて事よ」

玄関の鍵を閉める私の脇腹を、有加が肘でグリグリと押してきた。

「もう、有加。危ないでしょ! 止めて!」

抱えたお皿が、落ちそうになる。

あははは、なんて明るく笑いながら有加は外階段を上がっていく。

私もその後に続いた。

住宅街の夜の空氣に、有加の弾むような足音とそれに続く私の音

がコンコンと鳴り響く。

「ねえ、岬ちやん。ホントに連絡もしないで須藤さんの部屋に行つ

てもいいの？」

有加は階段の途中で振り返り、少し心配そつた声で聞いてきた。  
昼間の熱を静かに放出していく土の匂いが、夜風に乗ってやつてくる。

ちりり、と何処かの家からの風鈴の音も聞えてきた。

「だつて、知らないし電話番号」

私の腕にぶら下がったビニール袋が、歩くたびにガサガサと頼りなげに左右に揺れた。

「えつ？ 知らない？ 岬けやん、須藤さんと電話番号とか、メー  
ルとか交換してないの？」

さも驚いたような有加の声だった。

「してないけど」

その、有加の口調に、私はしかられた子どもみたいな気持になつた。

「じゃあ、どうやって須藤さんと会つているの？」

会つ？

「偶然に、つてところかなあ」

『偶然』だよねえ、と自分で自分で問いかける。

「別に、須藤君に用事は無いし」

用事といえば、『みゅう』の事くらいだけど。

でも、『みゅう』の事を有加に話すという事は、須藤君の『彼女』の話題にも触れなくてはならなくて。

そんなに、氣をつかう事ではないかもしれないけど、いくら有加だからってそういうペラペラと人の恋愛事情を話していいものでもないと思つたし。

「岬ちゃんと須藤さんって、付き合つているわけじゃないの？」

はあ？

「なんで、そんなことを」

「うーん。なんとなぐ」

「なにそれえ」

有加は、全く突拍子もないこと言つ。

「だつて。さつき、岬ちゃんへんな顔したし」「だから、へんな顔つて。

「だから。なんとなく、そつかなつて思つたんだあ

「ふーん? 有加の言いたい事つて今ひとつよく解らないんだけど。

ともかく須藤君には、そんな事言わないでよ」

階段を上り、ようやく2階に着いた私たちは205号室に歩き出した。

204号室の前を通りて205号室へと向ひ。

『須藤 朗』といふ表札を確認した。

『スドウ ロウ』君から『須藤 朗』君に、この場所で漢字変換されたことを思いだした。

あの日有加に誘われて合コンに行かなれば、この同じマンションに住む住人ともこうしたお付き合いはなかつたのよね、と思つと不思議な気がした。

再び、お皿を左手に持ちインターフォンを押そうと手を伸ばしたその時だった。

「なんで、須藤さんにそんな話しおしゃりいけないの?」

有加だった。

有加の真ん丸な瞳が私を見つめていた。

私は、啞然として言葉を失つてしまつた。  
伸ばした指先までが下に降りてしまつた。

「失礼、でしょ? 須藤君に。なんでわざわざバツイチ女とくつつけられなきやいけないのよ」

諭すように有加に話す。

有加がもし、私と須藤君のことをそんな目で見ているのなら、な  
お更の事だと思った。

そこら辺の事は、しっかりと釘を刺さなきやいけない。

大体、『合コン』だつてそんな目的で行つたわけじゃないって、

有加こそ一番わかっている筈なのに。

苦いような思いで、胸が一杯になる。

そんな私の真剣な目に、有加も何かを感じたようだつた。

「そんな風に自分の事を言うのって。なんか、岬ちゃん良くないよ

しょぼしょぼと、有加が話し出す。

困ったなあと、思う。

有加ビジュンで私を見るのは、それはそれで構わないけど（でも、本当は構わぬないけど）、その思いを全く関係の無い人今まで応用させよつなんて、それは幾らなんでも困つてしまひ。

「だつて、私がバツイチなのは、ホントの事でしょ？」

「有加とは、私の離婚のことで一回しつかりと話さなくてはいけないとは思つてはいたけど。

まさか、それが今になるなんて。

しかも、こんな人の部屋の前で。

溜息をつく私の目に、外階段の側に『A階段』と書かれたプレートが見えた。

あの階段は『A階段』つていうのねえ、なんて、こんな状況でどうでもいいことを知つてしまつた。

黙つてしまつた有加が、再び話し始めた。

「まあ、そうだけども。岬ちゃんが離婚したのはホントのことだけどさ。でも、岬ちゃんは結婚してようが、離婚してようが、岬ちゃんは岬ちゃんだよ」

眩暈がした。

なんて言つたらいいんだね？。この口にはま。

「一体どういう言葉を使えば、私に対して好意ばかりを向けないようになつてくれるのだろう。

「有加じゃ、そーいう事を言わないの。第一、そんな問題じゃないでしょ?」

ついつい強い口調で有加に言つてしまつ。

泣きたくなつてきた。

「有加。一回部屋に戻ろう? そいで、ちゃんと話しあう。ねつ?」

有加の顔を覗き込む。

今度は有加がしかられた子どもみたいな顔になつた。  
有加の私に向けられる好意は、ありがたいと思う。  
それは、そうなんだけど、もう一方で無性に腹立たしくなる。

有加は、わかつていらないんだ。

だから、そう簡単に今の私を受け入れようとしてしまうんだ。  
全ては私の責任なのに。

結婚したのも。

離婚したのも。

それは、『やつてみないとわからない』なんていう、悪戯に優しげな言葉じゃ済まされない事だった。

結婚生活を続ける、という事。

人生を一人で送る、という事。

いい加減な気持で、流されるように結婚してしまつた私には最初からそんな覚悟はこれっぽっちもなかつたというのに。

だから、そんな風に私のことを受け入れられるのが辛い。  
優しい言葉が辛い。

そしてたとえ、何百人の人に優しい言葉を掛けられたとしても、

それで私のしたことが帳消しになるなんて思ってはいな。

『おまえを許さない』

それは当然の言葉だった。

なんとも言えない、空気が私と有加を取り巻いた。二人とも、金縛りにあつた様に須藤君の部屋の前で立ちつくしていた。

と、その時。

「うわあ

凄い声と共に、勢いよく目の前の玄関が開いた。

何事が起きたかと驚いて扉の方に向き直す。

人の部屋の前の廊下で棒立ちになっていた私たちの目の前に、坂田君をおんぶした須藤君が突如現れた。

「岬さんに有加ちゃん、ドーゾ上がってください」

坂田君の明るい声に背中を押されるような形で、私たちは須藤君の部屋に上がった。

にこにこ顔の坂田君は、私たちの荷物をガシガシと抱えて持つてくれた上に、私たちがサンダルを脱いで部屋に上がるのまで待つていてくれた。

坂田君とは対照的に須藤君は、とっても不機嫌そうな顔で、さつさと一人で部屋に入つていつた。

あのドナルドな口は、への字になつていた。

心配になる。

なんだか、私たちに勝るとも劣らぬ不穏な空気をこの一人に感じてしまつたから。

そして一方の私たちは、と言つと、今の驚きで完全に毒氣が吹き飛んでしまつたというか、気が抜けてしまつたというか。

そういう意味では、二人のあの登場の仕方に感謝はしているんだけど、だからって、有加とのさつきの話が帳消しになつたわけじゃなかつた。

でも、本当のところ、果たして自分の離婚について有加にどの程度話すことが出来るのかという疑問も私にはあつた。

離婚のこと。

そこに至るまでのいろいろを、私は未だに誰にもきちんと話せてはいなかつた。

だから、有加がそんな風に私を思ってくれる責任は私自身にあつたと思つた。

何もかもが自分の責任だと思つと、息をするのも苦しくなつてくる。

はつとして我にかえる。

ここは、自分の部屋じゃない。

人の部屋。

須藤君の部屋。

そして、この部屋の住人の須藤君は不機嫌。

「ねえ、ねえ、有加」

こんな気持ちのままお邪魔しているのはどうなのかなあ、と思い、廊下の前を歩く有加の背中をつづいてみる。

「ん？ なあに？ 岬ちゃん」

有加つたら、既にバラ色のほっぺなんかになつて、オメメまでキ

ラキラと輝いていた。

「……何でもない」

こんな表情の有加に、『やつぱり、帰らない?』なんて言えなかつた。

それにして、よ?

私たちの事はともかくとして、有加つたら須藤君のアノ様子に気がつかないのかしら?

あんなに不機嫌そうな顔をしていたのに。

あれは、よっぽど嫌なことがあったに違いないとしか思えなかつた。

なのに、坂田君も須藤君の様子に関しては、『全くお構いなし』な感じだつた。

じゃあ、坂田君とケンカをしていたわけではないって事なのかしら?

でもでも、須藤君は坂田君から逃げる様に玄関から出でていた様に見えたし。

なんだろう?

買い物?

な、訳ないし。

ああ、なんだか、気になつてしまつ。

「あつ、眉間に皺」

声のする方へと反射的に顔を上げると、須藤君がキッチンの入り口に立つていた。

須藤君は、キッチンにいたんだ。

有加と坂田君は、そのまま真っ直ぐにリビングに進んでいった。須藤君のその言葉に、私は思わず右手で眉間に押さえてしまった。

「皺。あつた?」

指先で皺を伸ばそつと、さりげなくマッサージなんてしてみたり。

「ウソ。「冗談だよ」

「ふいと、そのままガス台の方へと須藤君は歩き出した。  
私も後についてキッキンに入つた。

「ここ、使う？」

須藤君が、キッキンを指した。

ぴたつとした感じの手の平から伸びた指が、綺麗だった。  
「うん。いい？」

初めて入る人の部屋なのに、勝手知ったる、といった感じが不思議だった。

「全く、同じ造りなんだね」「つい、ぽろつと感想が出てしまつた。

「へえ、同じなんだあ」

須藤君もさらりと返してってくれた。

「じゃあさ、佐倉さん、寝ぼけてうちこ上がりこまないでね」「ナルドな口の口角が、にっと上がる。

その須藤君の見覚えのある表情に、とてもほほとした私がいた。

## 6話・面倒な女

背中をそつとさする。

バカ坂田が上に乗りやがったところが、少し痛かった。  
体格を考えて欲しいと思う。

そんなアホの坂田は、お気に入りの由美ちゃんだか、加奈ちゃん  
だかと、いやついていた。

台所には、佐倉 岬と俺の二人がいた。

佐倉 岬は、黙々と料理を始めた。

台所は、さつき坂田と二人でいた程の窮屈さは無かつた。  
やつぱり、女人は華奢なんだなと思つた。  
華奢でも、彼女の場合は遅しいとも言えたけれど。

「エンピツ」

佐倉 岬がつぶやく。

「坂田君が『エンピツ』って叫んでいるけど  
えつ？」と思つた瞬間、台所の入り口に、でかいなりをした坂田  
が顔を出した。

「朗。エンピツ貸してよ」

坂田が、何か言いたげなエセ爽やか笑いをしながら立つていた。  
嫌なやつだ。

「はい、はい、はいはいはい」

なんだか、自分の家なのに主導権ナシつて感じで腹が立つ。  
電話のそばにあるペンを取つて（坂田に目線で『ココにあるだろ  
うか！』と威嚇しながら）、そのままベランダに一人で出た。  
急いでクーラーを直してもらった途端、涼しい夏夜になった。  
一万二千五百円。

修理代が惜しくなる。

まあ、いずれにせよ、いつかは払わないといけない金だつたんだ

と、自分で自分に納得させよつと思つた。

ちりん。

『どこかの家で風鈴が鳴つた。

自分の家には、付ける気はしない風鈴だけど（風が拭くたびに『ちりんちりん』とされたら腹が立つ）、どこかの誰かの家で鳴るぶんには一向に構わなかつた。

『要するに、自分が当事者になるのは、『ごめんだつて事よね』軽蔑したような瞳を向けられながら、そんな台詞を言われた事がある。

『『そつだよ。面倒なのは、『ごめんなんだよ』今なら同じ質問をされても、もつといいかげんに答えたのかもしない。』

そう考へると、あの時の俺は、正直だつた。

『そんなんで、朗は人生楽しいの？』

すじくへんな質問だと思つた。

そつしたいから、そつしていふのと、そんな事を言われるなんて。

『樂しく暮す為に、そつしているんだろ？』  
そつこえればあの口も、『んな夏の夜だつた。

「あの。須藤さん」

千香ちゃんだか、美香ちゃんだかに声を掛けられる。  
彼女がベランダの網戸をそつと開ける。

「あの。ワインつてあります？」

「ワイン？」

「岬ちゃんが、あるんならお料理に使いたいって  
ああ、ワインね。

「今、行くよ」

確か冷蔵庫に、飲みかけのワインがあつたと思つた。

「あの、須藤さんは」

「その口に呼び止められる。

「ん？ なに？」

改めてよく見れば、確かに綺麗な口だつた。

坂田君、がんばらないとねえ。

「あの、岬ちゃんとは」

「……はあ」

途端に彼女は口をつぐんでしまつた。

「あっ！ 朗！ 有加ちゃんに、何かへんな事でも言つてんだろ！」

坂田がトイレから出でてくるなり叫んだ。

手は洗つたんだろうな、坂田。

「言つか、そんな事」

俯く有加ちゃん（名前が判明。そして確定）を置いて、俺はワインを探すべく台所へと向つた。

台所では、ぐらぐらとした鍋の中で、パスタがゆらゆらと揺れていた。

そして、その隣の中華鍋では（焼きもの系の鍋は、それしかないのだ）、魚介類のトマトのソースが出来つつあつた。

「へえ。うまげ」

ひょいと覗き込みながら、冷蔵庫からワインを出す。

「白でもいい？」

「白しかないのだが。

「うん。ありがとう」

佐倉 岬の白い手の平にワインのボトルを持たせた。

真剣な眼差しで、中華なべを見つめる佐倉 岬がおかしい。

その瞳がワインのボトルに注がれた。

「このワイン。お料理に使つてもいいの？」

佐倉 岬の揺れた瞳が俺を見つめる。

佐倉 岬が見ていたワインのボトルを俺も見た。  
そこには、とても可愛いラベルが貼ってあった。  
そのラベルを見て思い出す。

『須藤さん。ワイン好き?』

あの日、林 利奈が持ってきたワインだった。

佐倉 岬は、その事をまるで知っているかのような表情をしてい  
る。

癪に障る。

「いいよ

ぶつきらぼうに返す。

だつたら、何だと言つんだ。

女が持ってきたワインなら、だつたら、何だと言つんだ。

「わかつた」

そう言つと、佐倉 岬は、じょぼじょぼとソースの中にワインを  
入れる。

ふわーっと芳醇な香りが広がって、次の瞬間魚介とトマトとワイ  
ンの融合された香りが台所中に広がった。

「すげつ。いい匂い

冷蔵庫で眠つてたワインが生き返る。

もう少しのところで、配水管に流し捨てられる運命だったワイン  
が、だ。

それが、佐倉 岬の手によって、生き生きとした香りを放ち始め  
た。

何とも言えない、複雑な気持になる。

『そんなんで、朗は人生楽しいの?』

なんだつて、またそんな言葉を。

胸の中に苦い思いが滲み広がる。

人の家の台所で、さも知ったかぶりな様子で料理を続ける佐倉岬を、冷たい目で眺めながら思つ。

彼女は。

佐倉 岬は。

面倒な女だと。

あまり良く知らない人に自分が作る料理を出す時は、とても緊張してしまつ。

パスタソースを作る鍋から田<sup>日</sup>が離せない。

いつもわりとアバウトに料理をしているだけに、今日は心がけて注意深くソースを作る。

何度も作っている料理だし、多分失敗は無いとは思うけど。なんて事を考えていたら、パスタを茹でる時間を見るのを忘れたことに気がついた。

あっちをやれば、こっちを忘れて。

こっちをやれば、あっちを忘れて。

何がなんだか。  
パニックになってきた。

「へえ。うまげ」

須藤君が鍋を覗き込む気配がした。

ああ。パニックになっている場合じやなかつた。料理ができるのを待ってくれる人がいるんだから、気持を立て直してやっていかないと、と思つた。

須藤君が、冷蔵庫を開ける音がした。

さつき有加に、ワインのことを頼んだので、おそらく彼はそれで来てくれたんだと思う。

ピタッと、手の平に冷たいボトルの感触がした。

自然に、須藤君から手渡されたワインのラベルに田<sup>日</sup>が行つた。

そしてそれは、最近雑誌の広告でよく見かける人気のワインだつた。

『とても高価な品』という訳ではないけれど、だからってお料理

に使うには勿体ないワインだつた。

彼女が持つてきたワインだらうなあと思つた。

「このワイン。お料理に使つてもいいの？」

須藤君の顔を見る。

須藤君は、私が言つた意味がわからないのか、ぽかんとした顔のまま視線をボトルに移した。

「いいよ」

表情を険しくした須藤君が、乱暴な口調で返してきた。  
怒つている。

聞かないほうがよかつたのかしい。

「わかった」

なにが？ と自分で自分の『わかった』に疑問を感じながら、ソースの中にワインを注ぐ。  
ふわっと広がる香りにほつとした。

大丈夫。

ソースは、成功。

でも、須藤君は『機嫌ななめ。

「あと何分茹であるの？」

須藤君がイタイところを突いてくる。

「えつと、どうだろ」

実は時間を見るのを忘れて。

でも、もつと本当のことを言つといつも時間なんて適当で、パスタが熱湯の中でバラける感じを見ながら茹でて。

そんなことを説明したものかどうか、考えてしまつ。

隣の火にかかっている、お鍋の中のパスタをちらつと覗いてみた。

なかなか、いい感じには見える。

「一本取つて食べてみて」

「はあ？」

その間もぐりぐりとパスタは茹でられる。

「だから」

「つて事はで、佐倉さんは時間を計つてないって事?」

責めるような口調で須藤君が聞いてくる。

「そうです」

私の答えを溜息をつきながら聞いた須藤君は、菜ばしを使って一本パスタをつるんと食べた。

「これで、いいと思つた」

「ホント? ジヤ、ザル、ザル」

きょろきょろする私に対して、須藤君は悠々とした態度で、シンクの上の棚からザルを出してくれた。

「やあよ」

そう言つと、須藤君がパスタをお湯からあげてくれた。

一瞬で湯気がシンクの中にモワモワと広がつていいく。

片手に鍋、片手にザル。

須藤君は、手際よく道具を扱つていいく。

その馴れた手つきに、つい見とれてしまつた。

「なんですか?」

じろりと睨まれる。

「何でもないです」

須藤君のいちいちに、刺を感じてしまつ私だつた。

できた料理を運んでいくと、有加と坂田君は机一杯に雑誌を広げて何やら書き込んでいた。

「ああ、岬ちゃん。これねつ、おつかしくうこに当たるのよ」

ここにしながら、有加がこっちを向いた。

えつ? と見ると、雑誌の特集の占いだつた。

生年月日を足した引いたりして、表と照らしあわせて自分のタイプを見るとかいうやつだ。

あははは、と思つ。

「こんな状況で楽しく占いが出来るほど の 気持に、私なれなかつた  
から。

須藤君も、そんな二人の様子を見て一瞬言葉を失いながらも、坂  
田君に蹴りを入れてテーブルセッティング始めた。

須藤君の部屋のリビングは、フローリングの床の上にベージュの  
ラグマットが敷かれ、その上に低く細長いテーブルが置かれたいた。

「岬さん、この机ね。脚を長いのに替えるとイスでも使えるんです  
よ」

坂田くんがお皿を並べながら、このテーブルの説明をしてくれる。  
そして、坂田君の指す方向には、確かにこの机で使っていたと思  
われるイスが一脚、重ねて部屋の隅に置かれていた。

私は、脚が替えられる、そんなテーブルがあるつてことを初めて  
知つた。

須藤君がキッチンから、いろんな銘柄のビールを両手一杯に持つ  
てやつて来た。

私たちが持つてきたビールもその中にあつた。

「俺のドライもある?」「

坂田君が須藤君に聞く。

「見りや、わかるだろ?」

どさどさと、ビールの缶を床に置きながら須藤君が答えた。

じるん、と置かれたビールが本格的な『飲み会』の雰囲気を醸し  
出してきた。

どんどん運ばれる料理が、わらわらと賑やかな食卓を彩り始めた。

「お待たせ〜」

有加が、ピザを載せたお皿を持ってきた。  
ピザの上のチーズは滑らかにとろけていて、所々こげていた。  
香ばしい、とてもいい匂いを放っていた。

須藤君の不機嫌さも、『うしてあれこれ動いているせいか、さほど気にならなかつた。

仁との色々で、人の機嫌の悪さについて、少しナーバスなところが私にはあつた。

そして、そういう感情を、自分に向けられるのは正直悲しいけど、でも返つて私と須藤君には丁度いいのかも、とも思えた。これ以上、なにかしら親しくなるのは良くないと思つたから。だから、嫌われてよかつたんだと思つた。

須藤君も坂田君も、アルコールは強いみたいだつた。気が付くと、どんどこと空き缶が増えついていた。須藤君が、空いた缶をペコッとこます音がする。

どうやらそれが、須藤君の癖の様だつた。

そんなお二人さんを横目で見ながら、料理をいただく。

「あつ、このキュウリのお料理、おいしい」

この料理は、須藤君と坂田くんが一緒に作ったものらしかつた。鷹の爪のピリッとしたアクセントと、『こま油のいい香りが食欲をそそつた。

自分でも作つてみたいなあ、と思つた。

坂田君は、私の言葉に嬉しそうな顔をしてほほ笑んでくれた。初めて会つた時も思つたけど、坂田君の笑顔はいい。

素直な、邪氣の無い笑顔だと思つた。

「ねえ、岬ちゃん。やっぱり、岬ちゃんのお料理つておいしいわ」有加が、もぐもぐとサラダやパスタを食べて感想を語つてくれる。

「ホントに、うまいですよねえ。これ、全部。岬さん一人で作つたんですか？」

坂田君まで、そんなことを語つてくれる。

「しかも、このパスタの茹で具合つて言つたら。最高ですね」つるつるとパスタを食べる坂田君の隣で、須藤君が苦笑する。

「ああ。……これは、須藤君がやつてくれて」

苦笑だけして、しゃべらない須藤君の代わりに私が話す。

「だつて、コノヒト時間を計らないし」

サラダをつつきながら須藤君がしゃべった。

須藤君は、パスタには少しも手をつけていない。

「あれつ？ 朗。おまえパスタ食わないの？」

坂田君が聞く。

「……たこ焼き食つたからあ。なんかな」

ふーん、と有加がつぶやく。

「でもあ」

有加がオメメをぐるぐるさせながら須藤君を見た。  
「たこ焼きよりもおいしいですよ、こっちのほうが」  
そう言いながら、有加はパスタをパクッと食べた。

うーん。有加つてば。

しーんとなつた空気が肌にぴしひしと、突き刺さる。  
有加は、ほほ笑んでいるけど田が座つているし。

坂田君は坂田君で、有加の顔を穴があく程見つめているし。

須藤君は、サラダをつく手が止まつてしまつたし。  
そして私の額には、数十本の斜線が入つた、と思う。

「ゆ、有加あ。さつきの占いはどうだったの？」  
話をそらそらと、話題を振る。

「ああ？ 占いだつて？」

須藤君が鼻で笑う。

「鉛筆なんて騒ぐから何かと思つたけど。ああ、丁度いいじゃん。  
佐倉さんも、男運でも見てもらえば？ ビーセ、合コンに来るくらいなんだから男なんていないんでしょ」

今度は須藤君だつた。

「ああ、まあ、やつね。また、機会でもあつたらあ  
か、帰りたい。  
今すぐ部屋に帰りたい。

もしくは、誰かにこの場の空気を浄化して欲しい。  
「バツカだなあ、朗は。言つただろ? 佐倉さんは一番人気だつて」

坂田君が須藤君を小突いて話し出す。

「えつ? 岬ちゃんが? 漆い岬ちゃん!」  
きやいきやいと、有加がはしゃぐ。

なんていうか、話題がどんどん斜め四十五度にスライドしていく。

「あははは」

やけになつて、無意味な笑いをしてみる。

「じゃあ、坂田も佐倉さん狙いなのか?」

新しく開けたモルツのビールを飲みながら、須藤君が言つた。  
途端に、再び緊張が走る。

有加の笑顔も凍りつく。

意地悪な顔で、須藤君は坂田君を見る。

「おいおい坂田。おまえ、なーんて顔してんだよ。なんだよ、なん  
か言つ事でもあるのかよ」

「ぐぐぐぐくと須藤君がビールを飲み干した。

そして、お約束の様に、缶の横をペロッと潰した。

「あーっと。空になつたじやん。まだ、モルツはあつたかなあ  
須藤君が席を立つてキッチンへと向かつ。

冷蔵庫をあける音がする。

私たち三人は黙つたままだつた。

暫くして、須藤君がこつちに戻つてきた。  
彼の手にはビールは無かつた。

「佐倉さん、買い物に付き合つて」

突然名まえを呼ばれて、驚いて顔を上げる。

「モルツ、切れた」

「ああ、はい」

ゆっくり立ち上がり、お財布をカバンから出そうとした。それにしても、あんなに買っていたモルツビールが、もう無くなつたのかしら？

「お金は出すから、いいから」

私のことを促すような須藤君の声だった。須藤君は、既に玄関へと歩き出していた。私も急いで須藤君に続く。

「は、はい。じゃ、有加。ちょっと行ってくるから」

有加たちに声をかける。

二人とも、顔を赤くしながら俯いていた。

ああ、これって、もしかして？

玄関の扉を開けて須藤君が立っている。

視線は廊下のほうに向けられていて、私とは目が合わない。

須藤君って。

もしかして？

外に出ると、気持のいい夜風が吹いてきた。  
二人で無言で歩く。

私は、少しだけ須藤君よりも後ろを歩いた。怒りんぼの彼の、無防備な耳たぶが見えた。どこまで歩くんだろう。そう思いながらも、不思議と不安にはならなかつた。須藤君の後についていけば、多分どうにかなるんじゃないかなと思つた。

虫の音と、私たちが歩く足音だけが住宅街の夜に響いていた。時折、ナイター中継のテレビの音がわーっという歓声をのせて聞えてきた。

この時間なら、延長戦に入っているのかもしない。

今年は、どこの球団が優勝をするのだ。港も今ごろ、テレビにかじりついてお気に入りの球団の応援をしているのかもしれない。

歩くうちに、公園の前のコンビニが見えてきた。

結構な数の人たちが、コンビニで何かを買っている様だった。

「ここ」酒も置いてあるから

外に出てから、須藤君が初めて口を開いた。

「で、何本買うの？」

須藤君に聞く。

「ゼロ本」

きつぱりと須藤君は、そう答えた。

ゼロかあ。

「そう」

「そうか、やつぱりそつなんだ。

須藤君はあの一人の為に、仕掛けたんだ。

「じゃあ、私たち。共犯だね」

有加と坂田君の恋を始めさせようとした、共犯。

「共犯かあ

須藤君が考えるような仕草をした。

「上手いこと言つね。佐倉 岬さんは」

須藤君はそう言つと、横顔だけで少し笑つた。

8 話・心にかなつたり、心にもならぬ

「須藤さん」

会議室からの帰りに、後から声を掛けられた。

振向くと、林 利奈が書類を抱えて立っていた。

「よお」

そう答えると、俺は再び自分の席に向うべく歩き出した。林は俺に並んで歩き出した。

「朝から大変ですね」

今日は朝から、近々行なわれる居室の移動についての説明会を各プロジェクトに向け、順次開いたのだった。

昼飯も食べたんだか食べないんだかわらないうような状態だった。時計は既に三時近くになっていた。

俺の歩調に合わせる為に、林がパタパタと音を立てて歩く。

「まあ。無事に終わってよかつたよ」

新しく始まつたり、通常とは違う事を説明する時は、やはり緊張する。

『説明後の質問』つてやつが、全くどうこつ角度で来るか分かったもんじやないからだ。

「ふふふ」

林は笑っている。

今日の林は、機嫌がいい。

歩きながら自分の席が視界に入つてくる。

今朝、綺麗に整理していつたはずの机の上は、雑多に載せられた書類の山となつていた。

電話機なんて、既に埋もれて見えない状態だつた。やれやれ、とどつきかりと席に着く。

「スミマセン。実は、これも総務あてなんですよ。回覧をお願いしますね」

林が回覧板を、俺の机に置いた。

その途端、湿度を持つた甘い香りが俺の横を掠めた。

その香りには、覚えがあつた。

林の視線を感じながらも、俺はわざとそっちの方には目をやらなかつた。

林の顔は見なかつた。

回覧板には、社内の慶弔のお知らせが挟んであつた。

「へえ。結婚」

自分の言葉を自分の耳で聞きながら、しまつた、と思つた。

「彼女、須藤さんのファンだつたんですよ」

林が言つ。

林のやる事には、常に計算がある。

「は？」

突拍子もない言葉だつた。

周りに人はいなかつた。

会社つて、たまにそういう瞬間がある。

ふと顔を上げると、誰もいないつて。

そんな中で、林が俺に仕掛けてきていた事は明らかだつた。

「ほら、以前に女子トイレで入れ歯が落ちている事があつたじゃないですか」

林は話しを続ける。

『入れ歯事件』。

そういえば、あつたなあ。そんな事が。

「あの時須藤さん、彼女に優しくしたでしょ。で、すっかり、須藤ファンに」

優しく？

した覚えなんてないし。

「バカな事を言つてないで、仕事に戻りなさい」

バカな事？ と林はつぶやきながら、覗き込むよつにじて俺の顔を楽しげに見つめてきた。

俺と田が合うと林は、口元をきゅっと上げて更にほほ笑んだ。まじまじと近くで見てしまった林の顔には、せりつとした涼しげな化粧がしてあり。

やっぱり林は美人だった。

「いつ、持ち帰ってくれるのさ。アレ」

観念して、林の顔を見ながら話す。

俺たちの顔は、かなり近かつた様に思つ。

林の瞳が輝く。

「お返事。用意してくださいました？」

「返事は、NO」

林の艶々とした唇が、少しだけ歪んだ。

「じゃあ、こっちもNOです」

強い目線で睨み返される。

「ちょっと」「冗談じゃない」と続けよつとしたところ、タイミングよく電話が鳴り出した。

「ちくしょう」

書類の下になっていた電話機を、がざがざと探し出す。

「回覧、よろしくお願ひしますね」

そう言いながら、林がゆっくりとした歩調で部屋を出て行く姿を田で追つていた。

田の敵の様に、電話機は鳴り続ける。

他のシマの人が、何事かと眉をひそめてこちらを見るのがわかる。

ええい。

なんだってこの瞬間、口には、俺だけかな。

そう思いながら、やけになつて出でてしまつた受話器の向いからは、受付からの高く通る声が聞こえてきた。

受付近くのソファで俺を待っていたのは、今回の間仕切りの見積もりを頼んでいる業者さんだった。

どっしりとした体格の人なのだが、何故か落ち着きが無い印象を受ける。

彼のカバンは、書類やなにやらでパンパンに膨れ上がっていた。おまけに、あんなにたくさん物を入れているのに、肝心な書類が一枚足りない事がよくある。

ちょっと、俺には理解できないなあと、会うたびに思う。まあ、シゴトだし。トモダチって訳じやないし。

彼がどんなであろうと契約が上手くいきさえすれば、問題無しなわけだし。

そのまま応接室に移り、間仕切りの種類と数量と価格の話をした。

居室の見取り図を開きながら、今あるもので使えるものと、必要になる所の数を何度も見直した。

できるだけ出す金は押さえたい、それがこっちで、できるだけ出す金を増やさせたい、それがあちら。

お互い容赦の無い駆け引きだった。

「すみません、煙草を吸つてもいいですか？」

彼が聞いてくる。

聞きながらも、既にポケットに手は伸びて煙草を出そうとしていた。

「ドウゾ」

一応聞いてくるあたりが、しおらしいと言えるが。

しかし、この人の吸う煙草は『重い』。

しかも、量が半端じゃなく多い。

正直参るが、仕方が無い。

案の定、話し合いは難航した。

「もう少し、勉強していただけませんか？」

数はともかく、値段の折り合いがつかない。

「もう少し、勉強していただけませんか？」

再三に渡り、のらりくらりと打診をする。

「いや、こちらの方としましてもね」

あちらさんの首は、中々縦には振られない。

心の中で大きく溜息をつく。

既に俺の肺の中は、短期集中で黒くなりかけているような気がした。

こいつに、俺のガン保険の支払いを命じたい気分になる。  
静かな押し問答が続いたが、どうもうまい具合に話しがつかなかつた。

どんな交渉も、もう一度で上手くいくとは限らなかつた。  
まあ、結果的に、こちらの言い分が通ればいいのだから。  
机に広げたスケジュール帳に視線を走らせる。  
まだ、価格決定の期限までは、少しだけ余裕があつた。  
話し合いは、次回に持ち越されることになつた。

応接室から、総務に戻る前に禁煙コーナーに寄つた。  
時計を見ると四時過ぎだつた。

彼と、一時間以上も話していたことが解る。  
どつかりと、ソファに身を沈める。  
ようやく、本物の大きな溜息をついて」ことが出来た。  
参る。

仕事もプライベートもどつちも決裂。

一つが重なると、流石に参る。

両方とも、どうにかなりそうでどうにもならないのが、余計にストレスをためる原因だと思つ。

左手で、ズボンのポケットに小銭入れがあるのを確認した。  
よいしょ、と体を起こして、目の前の自販にお金を入れた。  
この自販は、缶でなく紙コップ式のものだった。

アイスコーヒーを押し、氷増量を押した。

カラシと紙コップが落ちる乾いた音がして、続いてザザザと氷が

落ちる音がした。

ウイーンといつモーター音と共にコーヒーが注がれ始める。

一体この自販の中身はどういう仕組みになっているのだろう。

そんな事を考えながら、手に紙コップを持ったまま窓に向ひつの景色を眺めた。

夏の太陽は夕方になつてもまぶしく白く光り、そのきつい日差しとやけに青い空が、少し離れた所にあるビルの、鏡みたいな外壁に映つている。

外はまだ、さぞかし暑いのだろう。

じつと眺めていると、ビルに映つた雲は、ゆっくりと大きく動いていた。

無機質なビルの壁に、動いていく空の映像が映し出されていた。けれど、日中は、クーラーの効いた部屋の中で快適に生活している俺には、なんだかそんのはヒトコトの景色だった。

映画や、ドラマの中で見るのが同じだった。

ふと、思つ。

こんなビルの中で、間仕切りの価格がどうのとか、林の事でイライラしている自分が、酷くしつぽけで愚かだと。

どうでもいいことじゃないか。

間仕切りの価格が多少高くとも、林がアッシュを取りにこなくとも。

もう俺は、あんな煙だらけ部屋の中に一秒たりとも居たくないなつたし、林に知つたかぶり顔で、周りをウロウロされるのもごめんだつた。

全て、どうでもいいことじゃないか。  
ばかばかしい。

そして、こんな事に振り回されている自分は、もつとばかばかい、と。

生暖かな夜の街を歩き、ようやく家に辿り着く。  
玄関を開けた途端、むつとした空気を感じた。  
今日の日中も、かなり暑かったのだろう。  
靴を脱いで、そのまま一直線でベランダへと歩く。  
がらりと、思いつき窓を開ける。  
外気がサツと頬を掠める様にして部屋に流れ込んできた。  
外の生暖かく感じた空氣も、この部屋の暑さに比べたら随分と涼しいものだった。

要は、比較の問題なのかもしれない。  
どっちがマシか。

そんなことを思いながら、なんとはなしに映った夜空を眺める。

生い茂る枝葉の向こうに、夜空に浮かぶグレイの雲が、ゆっくりと流れるのが見えた。

そして、細く『』なりになつた三日月の姿が、気紛れに雲の間から見え隠れした。

そのチラチラと輝く姿は、健気にさえ思えた。

月の存在は、星もろくに見ることができないこの街で、唯一夜空に輝く宇宙的なものだと思えた。

たとえ今夜、雲が無いとしても、星なんていくつも見えやしない。

まるで地上が燃えているかの様に、この街の夜の空色は、赤く濁つた黒さだった。

星が輝くには、明るすぎる。

そして、そんな空の下に、俺の生活の全てがあつた。  
仕事をするのは、好きなほうだと思つ。  
働く、といふ事が性に合つてゐるのだと想つ。

金銭的に自立しているという事も、安心感が有る。

親の人生に振り回されずにすむからだ。

自立という言葉は、自分の人生を好きに生きられる意味と同義語  
だと思っていた。

所詮、コドモつていうのは、親の人生にいいように引っ搔き回さ  
れる立場だと経験していたから。

けれど今、気が付けば、今の生活をちつとも楽しめてなんかいや  
しない、自分がいた。

自立という言葉は、自分の人生を好きに生きられる意味と同義語  
なんかじゃなかつた。

そんなことを思う俺の耳に、どこかの誰かの家で鳴る、風鈴の音  
が聞こえた。

恋が実る瞬間は、美しいと思う。

有加と坂田君の恋は、思いがけず私の目の前で始まった。  
そう。

恋は、始まつたのだ。

みゆうを預かってからというもの、須藤君は週に一回程、玄関前にちょこんとビールを置いていくようになつていた。

その様子が、まるで牛乳屋さんみたいだと思つてしまつた。

意外と須藤君は、律儀な人なのかもしない。

または、人に借りを作りたくない人なのかも。

それにして、なんかなあと思つてしまつ。

こういう、モノで「行為」に対するお礼を払うような事つてどうなんだろうつて。

もし、相手が弟の港なら「どうかと思つよ、こうじつのつて」、  
と話したりも出来るけど（でも、港からならビールはしつかりと貰うかも）須藤君は私の弟でもなければ、友だちでもない。

だから、須藤君の気がそれでおさまるのなら、わざわざ断りに行かなくてもいいのかなあとも思った。

それに、あまり須藤君とは、会話を重ねなくなつた。

話すつて事は、それだけ相手の事を知つてしまつ事になるわけだ。

私は須藤君の事を今以上に知りたいとは思わなかつたし、私の事も話したいとは思わなかつた。

有加と坂田君が付き合つようになつたからといって、須藤君と私も親しくならなくちゃいけないってことでもないし。

でも、解っている。

一番ヘンなのは、こんな風に須藤君の事をアレコレと考えてしまつている私なのでつて。

考えなきやいいのに。

ホントに、須藤君の事なんて、考えなきやいいのに。

「佐倉さん、『港区赤坂一丁目』の物件の地図のコピーと路線価格を調べてくれる?」

ぼんやりとしていた私に、事務所の柴崎社長からの声がかかった。

あわてて席を立つ。

「あっ。佐倉さん」

「コピーを取る背中に、社長が声を掛けてくる。

「はい」

「再来週、早ければ今週末なんだけど。直行で書類を届けてもらつ事が出てくるかもしないけど。いいかな」

「直行。

ダメな理由は、何もなかつた。

家に帰ると、留守電のランプが赤く光つていた。

再生ボタンを押しながら、シャワーを浴びようと着ていた服を脱ぎ始める。

昼間の暑い時間は、室内にいるとはいえ、ブラウスからは薄つすらと汗の匂いがした。

そのブラウスを洗濯ネットにパツと入れて、ポンと洗濯機に入れた。

電話からは、母の声がした。

岬ちゃん、元気？ ちゃんと食べてる？

母からの言葉に苦笑する。

二十九の娘をつかまえて『食べてる？』なんて。いくつになつても、子どもは子どもで、親にはなんだか心配をかけているんだなあ、と思っていると、「港のことなんだけど」なんて、突然『港』の名まえが出てきた。ぱつと、体中から汗が出てしまう。そして、思わず電話に近寄った。

あの口、岬ちゃんとこにお邪魔してない？

えっ？ いるわけ？ 口口に、港が？

焦りながら部屋中を見渡した。

まさか、既に部屋に上がりこんでいるなんてことは無いよね、と思いつながらも、もしかしているかもしれない、って思わせてしまう港つてブキミだと思った。

その時、ガサガサとビニールが擦れる音が庭の方からしてきた。そして、コツン・コツンとガラス窓をノックする音も聞えた。締め切つたカーテンの向こうには、誰かがいるみたい。

凄く、嫌な予感がした。

予感というよりも、確信に近かつた。

『誰か』なんて思いながら、頭に浮かぶ人物はただ一人。朝、脱いだままイスに掛けてあつたTシャツをぱつと着て、窓に向う。

BGMとして、母の声が効果的に響く。

港つたら、また今日お父さんと揉めて。さつき家を飛び出したのよ

カーテンの前で大きく深呼吸する。

どうか港がいません様に、なんて、一応カミサマにお願いをして

みたりもする。

そして、意を決して、ザザツと思い切りよくカーテンを開けた。布のカーテンとレースのカーテンと一緒に、勢いをつけて。すると、すっかり夜になつたマンションの庭の縁側に、白いTシャツを着たでかい背中が見えた。

そしてその人物は、ガラス越しに顔だけをこちらに向かながら手をヒラヒラと振っていた。

港だつた。

やつぱり、港がいたあ。

体中の力が、がっくりと抜けていく。

諦めの心境でガラツと窓ガラスを開けた。

「よお、岬。元氣？」

港は人の家の庭先で、呑気にビールなんて飲んでいた。そして、にゅっと私に向けて、まだ開いていない缶ビールを差し出してきた。

「ねえ。何してんの、港

ビールを受け取りながら、港の横にしゃがみこんだ。

「ん？ ボクかい？ お用見さ」

そう言つて空に浮かぶ月を指差しながら、港はおいしそうにビールを飲んでいる。

よく日に焼けた喉に、ビールがじくじくと入つていく。つられて私もビールを開けた。

今更気が付いたけど、このビールはまだ冷たかった。

「港つていつここに来たの？」

ビールに口をつけてながら聞いてみた。

「ん、五分？ いや、十分位前かなあ」

「ふーん」

そつなんだ。

本当に、少しの差だったのね。

「あのさ、あんまり聞きたくない事だけじ。港は、どうやつてここ  
の庭まで入つて来たのよ」

このマンションの構造上、そつ簡単にはまでは入つて来られ  
ない筈だったから。

「塀の上をせ、歩いてきた」

「ふーん」

そうでしょひよ。

もう散々、港のメチャクチャせに付き合つてしまつてゐるから、これ  
位の事ではビクともしないけど。

「港さあ、先生を辞めてないよね?」

「辞めてないよ」

私の質問に不思議そうな顔で、港が答えた。  
それを聞いて少しほつとした。

「あつ！ やられたつ！」

パチッといつ音を立てながら、港が自分の腕を叩いた。

「O型の血がたつぶりと吸われてしまつたあ」

港の手の平には、つぶれた蚊と蚊の吸つたO型とやらの血が付いていた。

ボリボリと港が腕を搔きだす。

「ほら、あまり搔いちゃだめだよ。薬をつけておひよ。港も部屋に入  
つたら？」

「港は、蚊に刺されやすいんだった。

「いいの？」

嬉しそうな顔で港が私を見る。

有加にじる、港にじる。

本当に私のツボを良く押せえてこむ。  
こゝのように甘えられているんだわづ。

まあ、仕方がないよね。私はお姉さんなんだし。

「靴は、脱いで上がってね」

「いえーい。ラッキー」

港は、右手にビールを持ちながら、左手でなにやらでかいリュックを持ち上げた。

「この様子だと、今日は家に帰れないかもしれない。」

「岬さあ、この袋を捨てといてよ」

港からポンと渡されたビール袋は、いつか須藤君と行ったお酒の買えるコンビニのものだつた。

「ねえ、港。このビールつて港の奢りだつけ？」

靴を脱いでいる港に、恐る恐る聞いてみる。

「えつ？ 違うよ。なんかさ、スドー君だつけ？ くれたんだよ」

……。

「カレーサ、岬の男？」

眩暈がする。

「んな訳ないでしょ」

動悸もしてきた。

「じゃなに？ 岬のシャティ君？」

「馬鹿なこと言わなーいの。で、岬さあ、須藤君に余計な事は言わなかつたでしょうね」

「余計なことつて何や?」

「うーん、何と聞つか。つまり、しゃべらなかつたならここなのよ」「じゃべるなつてど、何だよ。聞つだら。『ありがとうございます』

、はや」

妙なところで、港は礼儀正しい。

「まあ、ね。ああ、じゃあ、それだけね。話した事は

「ん、そうだな。ああ、でも岬の弟だつてことは言わなかつたよ。ほら、プライバシーつて事でさ」

「ふーん」

「でも、挨拶はしたや。『これから、岬と一緒に暮します』って」「暮すう？」

「うん。カレ、同じマンションだつて言つからや、挨拶はした方がいいかなつて」

そう言つと港は、確信犯的いたずらな笑顔を私に向けて、ニッと笑つた。

## 10話・茶色い男

佐倉 岬には、男がいた。

こつものよひ、「玄関先にビールを置いた」とした時、髪から、体から、どじもかしこも茶色い男が、佐倉 岬の部屋の前にやつて来た。

彼は、でかくて重そうでそして汚いリュックを肩から下げていた。

「あれ？ 岬は、まだ帰つてませんか」と、突然に茶色の彼は、真っ直ぐな視線を俺に向けて、そう話し掛けってきた。

「どうなんでしょ。チャイムは鳴らしていないのに」

本当に、そんな事を聞かれても困る。

ビールは、いつも適当に玄関前に置いておいたから。

いちいちチャイムを鳴らすなんて、そんな面倒な事は、していかつた。

「そうですか」

茶色の彼は、そう言つと、今度は俺の持つビールの入ったビール袋に視線を移してきた。

いつか佐倉 岬と行つた、あのコンビニに寄つて買って来たのだつた。

「あれ？ もしかしてそれは、ビールですか？ 岬にくれるとか

？」

「ええ、そうですよ」

隠す必要もないと思つたので、素直に答えた。

「えつ？ 本当に？」冗談で言つたんだけどなあ。いやあ。嬉しいな。『馳走になります』

そう言つと彼は、長い体を律儀に曲げて俺に礼を言つてきた。

なんだかこちらもつられて「いえ」なんて、ガラにもない言葉が口から出てきてしまつ。

体を元に戻した茶色の彼は、二コ一コしながら俺のことを見た。  
「ああ、私はですね。岬の、何て言つたか。えー、その、つまりがこれから暫く岬と暮す事になりますので、よろしくお願ひします」

そう言つと、彼は再び深々と頭を下げだした。

一緒に暮らす？

その言葉をもう一度頭の中で、ゆっくりと繰り返す。  
一緒に暮らすって？

この人が？

佐倉 岬と？

ああ、成る程。

つまり彼は、佐倉 岬サンの「彼」ってわけだ。

でもって俺に向つて、と言つた、こういう場面での「そーいう発言」はアレですね。

俗に言つ「威嚇射撃」。

完璧誤解されている、のだろう。

それは、やつぱり、非常にマズイだろ。

『君子危うきに近寄らず』（若しくは『割れ鍋に閉じ蓋』って、それは違うか）

そして、こいつにこそ、会社員生活で培つた外面が役に立つのだつた。

「ああ、そうですか。佐倉さんも女性お一人では何かと心配だつたでしようからこれで安心ですね。私は二階に住む須藤と申します。何かありましたらいつでも遠慮なく声を掛けてください」

俺は、そう言つて彼に向つて一礼すると、ビール入りのビニール袋を手渡した。

そして、彼の横を通り過ぎて、そのまま外階段を使った。

階段を上る自分の足音を、人ごとの様に聞きながら思つ。

ビールを持つて行くのは、もう止めよう。

例えどんな理由があるにしろ、自分の女が誰かから何かを貰うなんて、やっぱり嫌なんじゃないかと思つ。

一般的に。

そして何よりも、人の恋愛事情に首を突っ込んでしまうほど、俺は暇人じゃないことだ。

「朗、聞いてるか？」

部屋に入った途端の、坂田からの電話だった。

「ハイハイ、聞いてますよ」

大嘘。

聞いていなかつた。

受話器を左手に持ち変えて、ネクタイを緩めた。

「だから、貰つたんだよ。ビアホールの招待券をさ。二時間、飲み放題食い放題だつて、行くだろう？」

「こちやこちや」と坂田が、日にちと時間と店の場所を言い出した。

「はいはい、メモをするから少し待てつて」

スケジュール帳に、言われた通りの事を書き込む。

「でさ、朗の方は、その後どうなんだよ」

受話器の向こうでニヤつく坂田が、簡単に想像できた。

「何のことぞ」

「またまた。佐倉さんだつてば」

「誰だつけ、その人」

「お前なあ」

「悪い、キャッチが入つたわ。切るから

「オイ！ おまえんち、いつからキャッチ 」

電話を強引に切った。

幸せボケした坂田とこれ以上話しても、ムカツクだけだった。

イライラする。

緩めたネクタイを解いて、乱暴に机の上に投げる。

ふう、と溜息が出る。

そして初めて、部屋の空気がやけに重いことに気がついた。

そうだ、坂田からの電話に出ていて、部屋の窓を開けるもの忘れていた。

そりゃ窓でも開けないと、大変でしょ。

夏だしさり、と何歩か歩き出して、俺は足を止めた。

窓なんて、開けなくてもいい。

乱暴に、側にあつた冷房のリモコンのスイッチをギュッと入れた。

直したばかりのエアコンは、ゆっくり音を立てて動き出した。と、次の瞬間、ガーッと大量の冷気が部屋に流れ込んできた。

風の向き具合で、瞬間に冷気が体に直接当たってきた。体がピリッと冷えた。

汗を、かいていたんだ。

でも、これは、暑くてかいた汗じゃない。

理由が思い当たるだけに、舌打ちしてしまつ。

一体、どうしたってこうんだ。

佐倉 岬に男がいたことに、俺は動搖していた。

そして、そんな自分にイライラとした気持が止まらない。

## 11話・彼の名刺

「じゃ、岬。ガッコに行つて来るね～！」

今日も港は、朝から元気に出かけていく。

港が学校の先生になるまで、夏休みにも先生が学校に行くなんて

知らなかつた。

『夏期ブールとか、まあ、イロイロあるんだよ』

そう言われれば、そんなんどうなあつて思つ。

知つてゐるようで知らない事つて、世の中多いのかも知れない。

今朝は取引先の会社に、朝一番で書類を届けに行かなくてはならなかつた。

昨日の帰りに出来上つた書類を受け取り、家に持ち帰つた。いつもは下りしか乗らない朝の電車を、今朝は上りで使う。混んでいるんだろうなあ、と思うと気が滅入つてしまつ。でも、まあ仕方ない。

その積み重ねで、お給料を貰つてゐるんだから。

ぞろぞろと人の流れにのつて、駅へと向う。

路線図を見て、目的地までの切符を買つ。

自動改札をぐぐり、階段、と思つたら、最近出来たエレベーターが丁度来ていた。

ラッキーと思い、そこに並ぶ。

スーツ姿のサラリーマンさんたちに混じつて乗り込む。

ふう、と溜息をつき体の向きをかえると、最後に男の人飛び乗つてきたのが見えた。

「あつ」

声が出てしまった。

その人が、驚いたようにこいつを見た。

「オハヨウゴザイマス」

須藤君が、小さな声でそう言った。  
彼は、「サラリーマン」していた。

Hレベーターがプラットホームに着くと、中に乗っていた人がわ  
つと外に散つていった。

先にプラットホームに降りていた須藤君が、こっちを見ている。  
須藤君のスース姿は、初めて見たわけじゃないけど（帰りに一緒に  
になつた事があるし）なんか違つた。

例えるなら「焼き立てのパン」というか。

出来たてホヤホヤのサラリーマンと言つか。  
仕事帰りと、仕事に行くときの顔や雰囲気は、ビリか違う。  
上手く言えないけど。

須藤君の隣に立つた。

須藤君がジロリと私を見た。

「佐倉さん、いつもと時間帯違わない？」  
ぼそつとした声で、そう聞いてきた。

「うん。今日は仕事先に朝一番で書類を届けなくちゃいけなくて」  
上りの電車が隣の駅を出たランプがつく。  
「だから今日は、こっちに乗るの」

そう言つて私は、上りのプラットホームを指した。  
「どこまで乗るの？」

「ああ、あのね」

間もなく一番線に参ります電車は

私の答えと、駅のアナウンスが重なる。

「ふーん。って事は」

須藤君が、私のことを見ないで言つた。

「俺が降りる駅の先か」

## フア　　ン

電車が滑る様に一番線に入ってきた。  
ザワザワと動き出す人の中で、須藤君と私だけが隔離された空間  
にいるみたいだった。

妙な感じ。  
変な気分。

車内は、思ったよりも混んでいなくて、ほっとした。  
なんというか流れで、須藤君と同じ車両に乗った。  
つり革を掴んで、隣どうして並んだ。  
左側に立つ須藤君を、そつと見る。  
いつも港を見ているせいか、須藤君のツクリがやけに華奢に感じ  
てしまう。

夏物のスーツをきちんと着込んで、ネクタイもスーツにあつたも  
のをしていた。

靴も綺麗だし。

「都会の男の子」って感じだった。  
涼しそうで、軽やかで。

なんにも背負っていない感じ。

それに比べて、なんて私は色んなどろどろとしたものを背負つて  
いるんだろう。

そう考えると、少し落ち込んでしまった。

ふと、須藤君と目があつた。  
つい、ほほ笑んでしまう。

須藤君は、私と目があわなかつたかのよう「ブブイ」と目をやらした。

嫌われているなあ、と思つた。  
いいんだけど。別に。

次の駅で、人がどつと乗つてきた。

入り口付近の人たちは、かなりきつそうな感じだった。

私も少しだけ須藤君の方に、体を寄せなくちゃいけなくなつた。

「大丈夫？」

須藤君が声を掛けってきた。

たくさん人を乗せて重なくなつた電車が走り出す。

「うん。ありがとう、ごめん」と、その私の言葉がいい終わらないうちに、キキキ　　という電車のブレーキ音が重なつた。車内がガクンと揺れて、うわっと言う人の声も上がつた。わわわわわ、と私も足元が揺れた。

落ちそうになる書類を必死で掴む。

バランスがくずれて、体がよろける。

わわ、まずいかも、と思つた時に、目の前にバツとスーツの袖とワイシャツと、そこから伸びる手が見えた。

そして、そのまま、体ごとぎゅっと包まれた。

「佐倉さん、平気？」

須藤君だった。

須藤君が、彼の右腕で私の体をつかまえてくれたのだ。

「あ、ありがと」

クーラーが効いた、寒いくらいの車内だつたけど、その一瞬で汗が吹き出た。

ただいまの急ブレーキ、大変申し訳ございませんでした

車内アナウンスが流れ出した。

あちこちから、ほつとした溜息が漏れ出す。

電車も、ふたたび穏やかに走り出した。

でも私は緊張したままだつた。

「あ、あの、須藤君」

「は？」

須藤君の一重のオメメがきょとんとした顔でこいつを見ている。

「ありがとう。もう大丈夫」

電車は元に戻ったのに、私が須藤君の腕の中だつた。

「あっ！」「ごめん」

ぱつと、須藤君が右手を離した。

「ごめん」

須藤君はもう一度そう言つて、そのまま前を向いた。

須藤君のドナルドな口は、へそを曲げたよつた不機嫌な形になつていた。

次は、

須藤君が降りる駅のアナウンスが聞こえました。

パツと須藤君は、お財布を出すと、そこから名刺を取りだした。

「その仕事先には、何時まで？」

「私？ 午前中くらいかなあ」

書類を見せながら、簡単な説明をする予定だつたし。

「ここ、直通だから。その仕事が終つたら電話して

「えつ？ 電話？」

差し出された名刺をじっと見る。

須藤君の会社と部署と、直通の電話番号が印刷してある。

ガタンと駅に止まるとき、須藤君は何事も無かつたかのようにさつ

さと電車から降りて行つてしまつた。

シュー、とドアが閉まる。

須藤君の後ろ姿が、たくさんの人々に紛れて見えなくなつていく。

わけも分からず、須藤君の名刺を握り締めたままの私を乗せて、電車はゆっくりと次の駅に私を運びだした。

## 12話・誘つてしまつた

バカだ。

俺は、とんでもないバカだ。

男がいる女に、なに色気づいて名刺なんて渡してんだ。

「あら？ 須藤くん、一口酔い？」

エレベーターで一緒になつた、秘書室の莊野さんに声をかけられる。

「いえ。違いますよ」

頭の痛さは同じかもしれないけど。

「でも、顔色がへんね。そんな顔で仕事もないでしょ。あとで秘書室にいらっしゃい。ビタミン剤をあげるから」

軽やかなベルの音と共に、エレベーターは俺たちのフロアへと到着した。

自分で嫌悪で一杯の体を引きずりながら、俺は自分の席へと向つた。

朝のひと通りの仕事を済ませたあと、俺は秘書室に向つた。やつぱり、ビタミン剤を貰わないわけにはいかないだろう。ノックのあと、秘書室に入ると、いつもの「こく」とく莊野さんしかいなかつた。

「みなさん、『接待』ですか？」  
嫌味を含んだ声でそう聞いた。

「全く、朝からねえ」

溜息をつきながら莊野さんが答えた。

「はい。須藤君」

「莊野さんがビン」とビタミン剤を俺に渡してきた。

「ワカモノなんだから、ちやんと野菜も食べないとね」

肩をすくめながら、莊野さんは俺にウインクしてきた。

ビンに貼つてある説明書を読みながら、三錠を口に放り込む。チューイングタイプなので、噛めるみたいだ。

口の中に、すっぱい味が広がる。

「ねえ、相談。須藤君」

莊野さんが、小さな声で話し出す。

「相澤さんと、付き合わない?」

ガギツ。

勢い余って、ビタミン剤じゃなくて舌を噛んだ。

「つ。はあ?」

「誰か付き合っている人はいる?」

頭の中が真っ白になる。

「いないんだつたら」

「ちよちよちよ、ちよつと待つてくださいよ。ナンですか、ソレ」

うつ。

今度は、まだ細かく噛んでいないビタミン剤が喉に入つていったぞ。

「あら。そんなに驚かなくても。相澤さん、美人だし」

「美人だと、そういうモンダイではなくて」

「タイプじゃないかしら?」

「タイプだと、どうとかそういうことじゃなくて」と言いながら、

佐倉岬の地味な顔が浮んできた。

断然好みじやない。地味な顔。

「そお。じゃあ、振りでもいいから」

「ふりい? それは、アヤシイ。」

「なんか、あつたんですか?」

莊野さんが、大袈裟に溜息をつく。

「相澤さんの担当の常務がね、以前から、自分の甥っ子クンと相澤さんを会わせたいって、言つててね」

「はあ」

「なんかの拍子に、まあ、そーいつたプライベートな事を常務から聞かれたそうで、『お付き合いしている人はいません』って相澤さんも答えたらしいのよ。まあ、そうよね。私だつて、相澤さんの立場だつたらそう答えるわよ。いる、いないに関係なくネ」

だよな。

『『いる』なんて言つたら、今度はどんなことを聞かれるか分かつたもんじゃない。

休みを取るにしたつて、何を言われるか。

社員の私生活にまで、首を突つ込むなよ常務さんよ。

「困りましたね」

「困りましたよ。だから、相澤さんにも、『須藤くんに、彼氏の役を頼んだら』って言つたんだけど。なんか、言い出せなかつたみたいね」

相澤が？

もしかして、厄年の事を俺に教えに来てくれた時かなあ？

「でも、下手に俺みたいな社内の奴だと、今度は『仲人』をするとか言い出すんじゃないですか？」

莊野さんが、にやりと笑つた。

「大丈夫。『仲人』さんはできないわよ」

「えつ？」

「常務のところ、熟年離婚の危機らしいもの」

コリコリと肩を回しながら席に戻る。

『考えておいてね』

ひとまず、あの話は保留。

相澤こそ厄年かもしね。

机の上に載っていた、伝言メモを確認した。

社内の部署から、間仕切りについてのいくつかの問い合わせがあった。

「俺宛に、外線なんてかかつてきてないよね」

隣の席の小川さんに聞く。

「外線？ そういえば、今日はめずらしくかかつてこないですね」

書類に印線を落としたまま、小川さんがそう言つた。

佐倉 岬からの電話が気になる。

名刺を渡した時に、黒豆ちちくなオメメが大きく開いていたことを思い出す。

多分、嫌々にせよ、彼女は電話をかけてくるだろ。う。

そういう女だと思つ。

いつも、無視してくれたら、とも思つ。

無視できずに、きっとかけてくる、そんな、やけに律儀なところに腹が立つてくる。

そもそも、自分が誘つたことなのに。

なのに、佐倉 岬に対して腹を立てるなんて、全く俺は正しくない。

正しくないか。

『須藤君つて、仕事以外は、あてにならない』、と言つた莊野さんの言葉を思い出す。

そうだよ。ホントー。

佐倉 岬と関わると、そんな自分の本性を直覺せしめられてイヤになる。

そう思つたときに電話が鳴つた。

「はい、総務です」

「もしもし、佐倉と申しますが。総務の須藤さんは、いらっしゃいますか?」

佐倉 岬からだつた。

「須藤です」

受話器を持つ手に汗をかいてしまつ。

「あ。須藤君。佐倉です。あの。今朝……」

そのまま佐倉 岬は黙つてしまつた。

そりやそりや。

わけもわからず、名刺を渡されて、電話じうなんて。  
そりや、何がなんだかわからないだろ?。

俺にしたつてそつだ。

自分でもわけが分からぬ。

だから、今の今まで、佐倉 岬からの電話にびくつ対応すればいいのか決めきれてなかつた。

でも。

「今、どこですか」

俺の問いに、佐倉 岬が答える。

俺の会社の隣の駅だつた。

「お昼でも一緒にどうですか?」

時計を見ると十一時少し前だつた。

ランチには、丁度いい時間。

「最近、ビールも渡していないし

「でも」

佐倉 岬に、うだうだ言わせないよつに畳み掛けて言つた。

「申し訳ないですが、次の駅まで来てもらひますか? 東口の改札

で待っていますから

一方的にそう言つて、受話器を置く。

## 結局。

誘つてしまつた。

なんなんだ、俺は。

「あれ？ 今のつて、彼女さんからですか？」

小川さんが意味深な顔して笑う。

「あのねえ」

「だったら、お勧めのお店を教えてやおうかな。昨日、私も行った  
んですけど」

小川さんが引き出しを開けて、お店の名刺をくれた。  
黒地に白の文字で店名がぽっかりと浮き上がっていた。

## 13話・彼とのランチ

夏の日差しが眩しく煌く都会の駅前で、仮頂面した須藤君が私の事を待つて立っていた。

「佐倉さん。嫌いなものある？」

斜め前を足早に歩く須藤君から、声がした。

「ない、です」

パタパタと遅れないように、ついていく。

オフィス街のランチタイムは、綺麗な女の子たちがサンダルをパタパタさせながら歩いていた。

白いブラウスが、光に輝いてキラキラしていた。

若いなあ、と思った。

私と五つは違うんだろうなあ、と思って見た。

そういえば、前を歩く須藤君だって、私より二つ年下だった。

「……」

地下に行く階段の前で、須藤君が止まる。

黒地に白い店名が目立つ。

「……はい」

言われるままに、後について階段を下りた。

竹林のような装飾が施された入口を入れると、和服を着たお店の人

が直ぐに席の案内をしてくれた。

案内された席に、案内されるままに、大人しく座る。

四人掛けの席に、斜めに向かい合って座った。

なんか。なんかよ。

須藤君はひと言も話さないで、メニューを開いて見てている。

私もメニューを開く。

でも。

須藤君が決めないと、私だって決められない。

「佐倉さん、決まった？」

須藤君の声にぎくりとした。

「えっと。須藤君と同じで」

多分、須藤君は奢ってくれる気なんだと思つ。  
そう思つと、気軽に自分で決められない。

「へえ」

最高に意地悪な顔で須藤君が私を見る。

「二十九にもなつて、自分の食つもん決められないんだ」  
カチンとくる。

「では、私は！　『日替わり御膳』でっ！」

バシッとメニューを閉じた。

ぐつと、グラスに入つたお茶を飲む。

「あれ？　これ、そば茶だ。珍しい。お蕎麦屋さんでは多いけど」  
私の大好きなお茶だった。

くくくく、と笑い声が聞える。

「なに？」

「ゴメン」

須藤君が、くくくくと笑つている。

「いやあ、佐倉さんって、食べることが好きなんだなあ、ってさ」  
そう言いながら須藤君は、通りがかつたお店の人におーダーをしていた。

彼の顔はもう、仏頂面ではなかつた。

それから、ぽつぽつと話しぶしをした。

マンションのメンテナンスのこととか（今度、自動火災報知設備の点検があるとか）、管理人さんのこととか。

クーラーの調子はその後どうだが、あやこの電気屋さんのおじさんはどうだとか。

生活の中での「同じ」が多いから、そんな話が出来るんだと思つた。

お料理が運ばれてきた時に、結局、私と同じものを頼んだ須藤君に文句を言つと、「ボクは『まだ』一十七だから、自分の食つもん決められなくてもいいんです」なんて悪態をついてきた。

まあ、いいんだけどね。

冷たいお吸い物をいただく。  
喉越しがすっとしてて。

「おいしそう

須藤君と田があつたので、ほほ笑んでしまつ。

おいしいものを食べるのって、精神衛生上としてもここと思つ。

「外で」飯を食べるのって、久しふりだなあ

しかも、知らないお店に連れてきてもらえるなんて、あの山口ノン以来かもしれない。（まあ、あの時は自力で行つたけど）

「彼とは外で食べないの？」

須藤君が聞いてきた。

はて。

彼とは？

ああ、港のことか。

「うん、たいてい家だし

でも、港つて朝は早いし、夜も山口で遊んでいるんだがで。

「そういえば、あの子と最近夕飯を食べていいなあ」と、ふつとぼやいてしまつ。

夜になると母から電話があるから、あればきっと逃げていらるのね。

「あの子」

須藤君がつぶやく。

「ああ、『あの子』なんてオカシイわよね。そうよな、うん」「弟のことは、いつまでたっても『あの子』つて感じがするけど他の人にしてみたら、立派な成人した男性だもんね。

「いくつなの、彼

いくつ?

はて、はて。

「いくつだろ?」

ええと、誕生日がきて?

あれ?

きたつけ?

つて、今、何月だつけ?

「いや、別にいいんだけど」

須藤君が、私の困った様子を見て、そんな風に言つてくれた。

たまには、須藤君も適当なところで見逃してくれることもあるのね。

そして、やつぱり、というか。

須藤君が伝票を持って席を立つ。

「俺が払うから」

そうきつぱりと言われると、「はい」としか言えない。

別に、いいのに。

確かに彼の苦手な生き物を預かつてはいるけれど。  
でもそんなこと、どうってことないことだし。

ビールとか、お皿代とか、そんなのわざわざ貰つせびの」といひや  
ないのに。

お店を出ると、アスファルトの照り返しで、地面から湯気が出るくらい暑かつた。

これから事務所に戻つて、またひと仕事。

「あのさ、須藤君」

須藤君も眩しいのか、大きな日が細くなつていた。

「いいよ、そんなに気をつかわなくても」

須藤君が、ん?、という顔をした。

「うん、だからね。私が、みゅうを預かっているからつて、ビールを届けてくれたりとか、ランチを」馳走してくれたりとか。そんなの、いいのよ」

氣をつかわないで欲しいって言いたかった。  
もう充分してもらつた、と。

「佐倉さんには、迷惑かもしれないけど  
日差しを避けるようにか、須藤君が立つている場所から少しだけ動いた。

「お互い全くの他人なんだし。ギブ アンド テイクつことで何か形になつたケジメでもないと、だめなんぢやないですか?」

大きな口の端がにゅつと上に上がる。

「でも、物を渡せば済むとか、そういう事では」と言しながら、『遂に言つてしまつた』と思う。

「ともかく。それが俺のやり方なんで」  
ふいと須藤君が、歩き出した。

流石に私も、その後について歩いつとは思えなかつた。

港にお説教するみたいに、須藤君に話してしまつた。

須藤君は、弟ぢやないのに。

知らない街の知らない場所で。

私は、後悔でこゝの氣持で、立ひぬべつて思つてた。

『あの子』だって。自分のオトコの事を、『あの子』だって。そして、妙に年上ぶつたお説教。いつも増して、佐倉岬に腹が立った。

ビルのエントランスに入つた途端に、冷たい空気が顔に当たつた。

「あつ。須藤さん」

エレベーターホールで、相澤が俺に声を掛けてきた。もしかしたら、ずっと待っていたかも知れない。

「あの。莊野さんからお聞きかと思いますが」

「ああ」

『甥っ子くんの件』か、と思い相澤の次の言葉を待つ。

「須藤さんには、ご迷惑をおかけしました。もう、大丈夫ですから。お気になさらないでください」

相澤が、はつきりとした声でそう言つてきた。

「大丈夫って、じゃ、常務がもう会わなくていいくつて言つたってこと?」

俺のその言葉に相澤が表情をきつくした。

「私、会いますので」

睨むような目つきで、相澤が俺を見ている。

「会いますから」

ロボットの様な声で相澤が言つ。

「会つて。相澤さん、なに言つてんの?」

「だから、会えば」

そう言いながら、徐々に相澤の目には、涙が溜まりだした。

一階のレセプションホールは、お昼を終えた人達でびざんと賑  
れ上がってきた。

「ちょっと。相澤さん」

彼女の腕をとり、公衆電話が置かれている隅になつたコーナーへ  
と連れて行つた。

携帯電話の普及で利用も段々と減つてきていることは、いい死角  
だつたのだ。

電話の側では、大手園芸店からレンタルしている観葉植物の大き  
な葉が、ゆらゆらと冷気に当たつて揺れていた。

ひっぱつて来た相澤を、俺の正面に向かせた。

「会いたくないんじやなかつたの？」

だから莊野さんも、俺にまで声をかけてきたんじや。

「もう、いいんです」

即答だつた。

「ふーん。まあ、相澤さんが会いたいのならいいんじやないの  
ホント、そうなら何のモンダイもなしだ。

甥っ子くんがいい奴なら、相澤だつて儲けもんつてやつだし。

「会いたいだなんて、そんな。私は……」

怒ったような顔で、相澤が俺を見返してきた。

どうでもいいけどあ。

そんな顔を俺に向けるのは、筋違いつてもんだと思つ。

「相澤さんもさ、小学生じゃないんだからさ。会つた後にどうこう  
展開になるかつて、少しほんわかつてんだろ？」

相澤は戸惑いながらも、「クンと俯いた。

柔らかそうな茶色の髪が、ふわっと揺れた。

「会えればそれで、ハイオシマイなわけないよな。下手すると話は進  
むよ」

相澤は表情を厳しくしたまま、無言だ。

どう見ても、喜んで常務の甥っ子に会いたいって顔してないのは、  
誰にでもわかること。

「あのね。ボクたちは、ここにお仕事に来てるわけよ。お金貰つてさ。だから、『仕事キッチリ』は当然の事だけど、自分の私生活まで売る事はないんだよ」

そう俺が話すと、じわじわと相澤の瞳に涙が溜まっていくのが見えた。

ただいま涙を製造中って感じで、相澤の瞳がウルウルとしてきた。

でも、相澤は泣かない。

泣かないように、自分で葛藤しているかのように見える。そして、瞳の中の表面張力を駆使しながら、俺の事を見てくる。きっと、彼女は絶対に、泣き顔を俺には見せたくないんだ。

根性のある女だ、相澤は。

なんか、スポコンマンガの先輩後輩にでもなった気分になる。

「あのお、男の人って。やっぱり社内恋愛が周りに知られると、『結婚しなきゃいけない』って思っちゃうところがありますよね」突然、相澤がトンチンカンな事を聞いてきた。

もしかして、相澤と『付き合っている』関係になつた時の俺の心配をしてくれているんだろうか？

「ま、まあ。うーん。どうなんだろうなあ。でも『ゴママン』といふぞ、

社内恋愛破局組

「えっ？」

相澤のヘーゼルナッツの様な瞳が、いち段と大きく開かれた。

「だから。まあ、付き合つたり、別れたり。あるでしょ、普通に

『なんですか？』

「まあ、そうだな

と、答えつつ。

これは全くのまかせだ。

実のところ、社内で誰と誰が付き合つていて、誰が破局したかな  
んて、全く知らないんだなあ、俺は。

そーいう話には、ノータッチなもので。  
でも、多分、そうだと思う。

くつついたり、別れたり。

そういう事は、会社でも簡単に行われていると思つ。

男と女がいれば、むしろ当然のこと。

そういう俺だって、林と揉めてくるワケでして。

待てよ。

『相澤との事』が、会社で広まつたりでもしたら、林がお出ましになるのか？

爆弾処理女、林が。

そうなると、相澤にも迷惑がかかるなあ。

いや、待てよ。

そうしたら、相澤の事を盾に林と縁が切れるとか？

『実は、相澤とは常務公認で付き合つていたから』って。  
ここはイッパツ、ギブ アンド テイクで、相澤にも協力をしてもらつて。

いや、しかしなあ。それは、いくらなんでも、NGだよなあ。  
相澤の事を、思いつきり巻き込むことになるし。

つて事は、だよ。

俺は、相澤の事を引き受ける前に、林との関係をどうにかしないといけないって事か？

なんか、気が重いというか。

と言つよりも、今の状況じや、全くもつて不可能な気がしてきた。

そうだよ、佐倉 岬にもヤツを預かつてもうつてゐるわけだし。  
相澤の事を構つてゐるやつも、自分の事をどうにかしないといけないぢやないか！

「……私。もう少し考えてみます」

相澤が、ぽつりと言った。

「でも、会わないにしろ。須藤さん」と、ご迷惑はおかげしません

ドキリとした。

「いつのイロイロを、見透かされていくので。

「自分の力でどうにかしてみます」

ぱっと俺を見た相澤の表情は、やつときよりも少し、晴れていた。  
そして、ペコリと頭を下げる、俺の横を通り過ぎ、エレベーターへ向かっていった。

自分よりも年下の女子であり、自分の事を自分でビビりかしきりとしている。

これまでいい加減な自分に、嫌気がさしてきた。

## 15話・犬とトコモと弟

「ただいま」

港の間延びした声が聞こえる。

私は、港の方を振り向きもせずに、ひたすら床の雑巾かけに精を出す。

全く、本当に、港は！

「あれつ。いろんな夜に雑巾かけなんて、さすが元主婦。働き者だねえ」

心の底から感心したような声で港はそつまつと、冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎだした。

「岬も飲む？」

私の返事を待ちもせず、港は既に二つ皿のコップに麦茶を注いでいた。

「ありがとう。そこに置いておいて」

溜息ひとつついて、私はそう港に返事をした。

「ねえ、港。」

私は、『この床の件』を話し出す。

「今日、連れ込んだでしょ」

「えつ？」

港が笑いながらとぼける。

「そうねえ、犬が一匹に子どもが一人つてとにかく」

「おーっ！ さつすが、岬サマ。大当たりでござります」

はあ。

またが、と思う。

雑巾掛けの手を休め、港に向かって。

「あのさあ、港はセンセイなんだからさ、あまり特定の子どもと親しくするのは、どうかと思うよ」

港の今の受け持ちは、一年生だつた。

「あと、庭で水遊びをするのは構わないけど、泥だらけの足で家の中を歩かないでね」

仕事から帰つて来て、私は驚いてしまつた。  
床の色が、やや白めの茶色 つまり、泥の乾いた色に変色していただだ。

そして『十寧』に、犯人のモノと思われる大きな足跡と、小さな足跡と、犬の足跡が残つていたのだった。

そして、その後始末を、私はしているといつわけ。

「岬、庭にあるやつ見た？」

港は麦茶を片手に、嬉しそうに聞いてくる。

「うん。すごい基地ができていたね。二人で作ったの？」

庭には、木の枝や、小石や、ペットボトルでできた小さな基地があつた。

見ただけで、楽しい時間を過ごしたことがわかるものだった。

「ほんと、吉成が作つたんだ」

生徒の名前は、『吉成君』というのだつ。

「うちの庭もいいけど、キミの家の方が広い庭があるでしょ」

私たちが育つた家には、ここよりも大きな庭があつた。

「嫌なことを言つなか、岬は。いいんだよ、狭くても。広さより快適さを取るのだ、ワシは」

全く。何が『ワシは』よ。

そんな私の気持も知らないで、港は偉そうに立つたまま、私を見下ろしている。

「佐倉センセイ。キミのお母さんが、心配しますよ」

「いいんですよ、佐倉サン。そもそも、今時、親の知人の娘に会つて、どうよ？」

港には、そういう種類のいわゆる『お見合いの話』がいくつかある。

「やだ、今回もその事で揉めて飛び出してきたわけ？ もう、進歩ないなあ。港に関しては、そういうの賛成だな、私は。それに、もしかしたらさ『松たかこ』ちゃんが来るかもしれないしい」

港をからかう。

「岬。そのネタ、微妙に古い」

港が私の言葉に、クレームをつけてくる。

「古くてもいいんです。ともかくお母さんは、心配なんだヨ。港がコンナだから」

「『コンナ』って、なんだよ」

「ああ。コンナっていうのは、『じうじう』ことよ」

私は、汚れた雑巾を港の目の前に差し出した。

「港はさ、子どもの事が大好きで、どの子も大切にするでしょ。それはさ、凄く、凄くエネルギーのいることでしょ」

港は、優しすぎるのだ。

何度も、何度も、子どものことで悩んで、苦しんでいる港を私たち家族は見てきた。

だからこそ。

「港の事をサポートしてくれる人がいればいいなあって思つのは、お母さんだけじゃないよ」

私だつてそう思つ。

「だいたいね。港は多すぎるのよ、ガールフレンドが。でさ、『みんないい子で一人に決められない』なんて言つから、お見合いの話になるのよ。嫌なら、その中から『一人を』さつさと自分で決めなさい！」

港は男女問わず友達が多い。

それは、それでいいけれど。

港のもうさを知つている、母や私にとつては、どうもそれだけでは物足りない。

結婚は『本人の問題』という言葉で片付けられない複雑な感情が、家族の中には存在するのだ。

「いいよ。岬がいるから」

面倒くさそうな声で港が言つ。

出たつ！

「よくない！」

即座に言い返す。

先生になつたところで、港のこんなとこはなかこうかひらひら

とも変わらない。

面倒なことがあると、その矛先はいつも私に来るのだ。

「ほら、邪魔な仁も消えた事だし」

「なんで、仁のことが、港に関係あるのよ」

話がいやな方向になつてきた。

「いやあ、別れて正解よ。岬ちゃん」

港が大袈裟なゼスチャーで、手で何かを追い払う動きをした。

「そこまで、港が言つことじやないでしょ」

港が『しまつた』といつ表情をした。

でも、もう遅いんだから。

「私、ちょっと出てくるから。あとは港が拭いとくんだからね」「雑巾を置いて、港の横を通り過ぎる。

「み、みさきー」

思いつきり港が慌てている。

「もし、少しでも汚かつたら。強制送還」

そう言しながら、ぎろりと港を睨ん部屋を出た。

外へ出た途端に、夏の夜風が、わーっと髪を揺らしていった。  
ぶつくさ言いながらも、きっとピカピカに床を磨き上げるで  
う港の為に、私はビールを買ひにコンビニへと向つた。

## 16話・もう、いい

朝からバタバタと走り回る。

悪筆の新人が発注した品が、業者さんの型番の読み違えという事態を招き、結果全くの別物が納品されたりとか（しかもその新人は、注文すること自体も遅くて、頼んだ方はその品が今日必要だつたり）、社内便のアルバイトの子が「総務」と「業務」を間違えて今日一日書類を配り歩いたとか、秘書と常務が（相澤じやなかつたけど）言い合いになつたとか。

今日に限つてそんな信じられないことが次々と起こり、自分の仕事に取り掛かれたのは四時過ぎだつた。

更に今日は、坂田に飲みに誘われていた日でもあつた。  
パスするか？

約束の時間は七時半だつた。

今は六時過ぎ。

しかも世間では夏休みの八月の金曜。

フロアに人は殆どいなかつた。

そんな中、自分の机の上にある今日中に仕上げたい書類の束を見つめる。

やつぱり、坂田に断わりの電話を入れたほうがいいだろう。

それで、ついでにアイス珈琲でも飲もう。

人が少くなつたフロアは、その分クーラーが効いてますますで寒くなつてきていた。

でも空気が乾燥しているのか、喉は無性に乾いていた。

自販の珈琲の紙コップに口をつけたまま、携帯を取り出す。

禁煙コーナーの窓の外には、都会の夏の夕焼けがオレンジ色に滲

んでいた。

「須藤さん」

呼ばれて振り向くと、甘い香りをさせた林が帰り仕度の済んだ姿で立っていた。

「よお」

林が、にこりと笑いかけてきた。

「今日、大変でしたよね」

林も業務なので、社内便パックの被害にあつた一人だ。

「ああ、そうだね。お疲れさん」

「夏だからって、社内便にアルバイトを頼むのってどうなんでしょう」

「どうなんでしょう、と言われましてもね。

「そこいら辺は、あちらさんの都合が色いろあるんだろう」  
社内便の仕事は、業者に委託していた。

「まあ、どうにかやっていくしかないでしょう、お互

いそういうもんなのだ。

「須藤さんは、優しいから  
優しいって、またかよ。

「俺が?」

「ええ。だって」

林がすっと俺に近寄り、小さな声で話していく。

「みんな、会社のみんな言っていますよ。何か困ったときには総務の須藤のところに行けばどうにかなるって。それに、最近では秘書の誰かさんの相談にもよく乗っているみたいだし」

相澤のことか。

「相談になんて、乗つてないよ

そう言いながら携帯を内ポケットにしまった。

「ふーん」

不機嫌な形に林の唇が歪んだ。

「じゃ、なんだろ。やけに仲がいこよくな気がするけど」

はあ。

「仲がいいねえ。まあ、秘書の人とはみんなあんな感じだよ、俺は。それでもって、好みつてことで言えば相澤さんよりも莊野さんの方かなあ」

相澤のことで、これ以上あれこれと林と話したくなかった。  
「やだあ。年上好みなんだ、須藤さんって」  
「やだあ。年上好みませんでした、須藤さん」

「やだ。大丈夫？ 珈琲、こぼれませんでした？」

「いや、大丈夫」

手に持っていた珈琲の紙コップが傾いてしまったのだ。

年上好み。

動搖してしまつ。

マンションの下の階に男と住む誰かを思い出してしまったから。  
そして誰かの彼の「暫く」という言葉通りに、いまだにお二人仲良くな一緒に住んでいるようだつたし。  
もうそのまま、ずっと住むのかもしれないし。

「ねえ、須藤さん。今晚は、これからお暇ですか？」  
林が聞いてくる。

「予定がある」

仕事の為に断わろうとしている予定だけだ。

「誰と？」

じーっと林が俺を見つめる。

「言わないといけないの？」

俺も林を見つめ返す。

「聞く権利があると思う、私には」  
林も負けない。

「だって、私は須藤さんにプロポーズしてるんですよ？」

「お断わりしましたけど」

「納得がいきません」

「何に納得がいかないのさ」

「だつて？」

「だつて？」

「私たち、そういう関係でしたよね？」

「林がズバリと言つてくる

「関係は、したよな」

「それは、そうだ。」

「なら」

林は、キッと俺を見据えてきた。

「林さんは、そういう関係になつたから、俺と結婚したいんだ？」

「林に聞く。」

「違います」

「違う？」

「違います」

「じゃ、なんだ？」

林が肩からさげたショルダーの位置を変えながら、こっちをじっと見た。

「好きだからでしょ。須藤さんのことが」

ドスンと衝撃が来た、林の言葉に。

「好きだから。須藤さんのことが好きだから。だから『みんなも後から来るから』なんて須藤さんに嘘をついてまで家に行つて。好きだから、好きだから、須藤さんとも」「

「好き？ 僕の事を？」

「当たり前です。私は、嫌いな人とはそんなことしません」  
いや、ちょっと待て。

「林が俺を好き？」

賭けとか、気まぐれとか、遊びじゃなくて？

林が本気だなんて、考えもしなかった事で混乱する。

そうだ、考えもしなかったんだ、俺は。  
林の氣持を。

「ごめん」

林の顔が蒼白になる。

「ごめんって。それ、どうこいつ意味ですか

「君のことは、好きじゃない」

バックの紐を摑む林の指先が、きゅっと白くなつた。

「嘘、ですよね？ そんなの。あんなことじついて、私のこと好き  
じゃないなんて」

「ごめん」

「そんなの、そんなの。嘘、嘘ですね」

「ごめん」

「ごめん、ですって？ 散々その気させといて、今更？ 今更そ  
んなこと言つて！」

すつと、林の手が動くのが見えた。

そして、林の夏用のバックが、弧を描いてそのまま俺の顔にヒッ  
トしてきた。

流石に、体がよろける。

そして当然の様に、珈琲はこぼれ、スーツを濡らした。

「私、須藤さんは、須藤さんは、照れているだけかつて思つたから

真っ白な顔で林が続ける。

「須藤さん、仕事の話とかすごく聞いてくれたし。だから

それは、いつも自信満々の林の姿ではなかつた。  
けど俺が、林をこんな風にさせてしまつたんだ。

莊野さんの言葉を思い出す。

『ああいうの、ポイント高いのよ』

「ここ」の「ナー」を作る時も、すごく私のことを認めてくれたから。

「私、嬉しいくて」「

「ごめん」「

「ごめん、だなんて」「

林が手に持っていたバックを肩に掛け直した。

「いい。もう」「

しばらく無言で俺たちは見つめ合った。

「もう、いい」「

その言葉を残して、林はスタスターと俺に背を向けて歩き出した。

床に散らばった氷を屈んで拾い、紙コップに入れる。

喉を潤すはずだったアイス珈琲は、ズボンと床の上にぶちまけられていた。

「痛つてえ」

今ごろになつて、林に叩かれた頬がジンジンと痛くなつてくる。

「冷てえ」

おまけに、珈琲で濡れたズボンにクーラーの冷気が当たりだした。

胸ポケットに入れた携帯が、屈むたびに「ごそ、ごそ」と揺れる。

俺は、濡れていない左手を使い内ポケットから携帯を取り出した。

坂田のがっかりした顔が、日に浮んで消えた。

## 17話・真夜中のコンパンハ

「岬ちゃん」

朝食の珈琲にミルクをたっぷりと注ぎながら港が言った。  
港が「岬ちゃん」なんて呼んでくる時は、要注意。

今までの経験上りくなことがないのは、わかっている。

「なあに？ 港クン。食費でも入れてくれるの？」

「あつ。痛いところをつくなあ。でも、それはそうだよね。うん、

払う

「えつ？ 待つてよ、待つてよ。つてことは、まだいるわけ？」

「はい」

私は二～四田のつもつでいたのに、あれから港はずすのをうつりにいた。

「ああ、そうそう。そのことなんだけれど。あと一週間は、岬んと  
ここにいてもいいかなあ」

「なに、その具体的な数字は？」

港はへへへと笑っている。絶対に何かを隠しているわ、この口。

「あつ。やべ。遅刻する！」

バタバタとデカイなりをした港が動き出す。

港がいると、部屋が狭く感じる。

港が緑色のキャップを目深に被り、スニーカーを履く。

「ほんと似合つね、そーいう格好  
わが弟ながら、感心してしまつ。

「惚れるなよ、岬

「ハイハイ。あつ、ねえ、港

「ん？」

玄関のノブに手を掛けたまま港が振り向く。

「港つて、今いくつだっけ？」

「一十七」

そう言つて茶色の顔一杯でニヤリと笑うと、港は夏の朝の光の中に飛び出しついた。

「港は、一十七かあ。一十七でよかつたんだ。そつか」須藤君に聞かれて、咄嗟に答えられなかつたので気になつていたのだ。

学年では二つ違つけれど、生まれ月のアレコロで年の差がいつも必ず二つとは限らなかつたし。

つてことは、須藤君と港は同じ年なのね。

珈琲を飲みながら、ふーんと思つ。

そう思いながら、机の上に置いてある物に目が留まる。

「鍵と携帯」

港のだ。

「あの口、忘れていつたのね」

馬鹿港。

私は仕事があるのに。一日中家にはいられないのに。

佐倉港クン、今日は締め出し決定でござります。

後で実家にも電話をしないとなあと思つ、ここが開いていなかつたら実家に戻るかもしけないし。

溜息が出来る。

あれで、二十七歳。

あの、スーツがよく似合ひつかり者の須藤君と港が、同じ年だなんて思えない。

「港には緊張感が足りないのよー。須藤君の方が港よりもずっとお兄さんに見えるわ」

そう独り言を言いながら、須藤君とお皿を食べたことを思い出したりもして、胸がズキンとした。

怒らせてしまつた。

さう。須藤君の声「ひ」とは、それなりに筋は通つてゐるのだ。

「問題は」

「仁の顔が浮んだ。

「すべて私にあるんだわ」「手の中のカップの珈琲が、暗く深く揺れた。

港のことが気になつたので、スーパーで買い物もせずに真っ直ぐ家に帰つた途端、家の電話のベルがなつた。

有加からだつた。

「ええと。今日、これから?」

「うん。岬ちゃん、お暇?」

「えつと。実は、み

港がここにいるなんて知つたら、また有加からお小言をもらつたうだと思った。

『岬ちゃんは甘やかしすぎ…』なんてね。

でもまあ、港だってずっとこるわけじゃないし。（あと一週間くらいのことらしいし。本人いわく）

だから、まあ、いいよね。言わなくてても。

「ごめんね。今日は、無理なんだ」

「そつかあ」

そつかあ、だなんて、有加の淋しい声に心が揺れる。

「有加、何があつたの?」

「あのね。坂田さんとね、約束をしてたんだ。今日」

「あ、さう」

「楽しみにしてたんだけど

「うん」

「キャンセルされちゃつた」

「……えつ」

「坂田さん、仕事が終わらないから、今日はバスしたいって

「……なるほど」

「で、暇になつたの」

「ふーん、それは残念だつたね」

「なにか凄い理由があつてのことかと『キヤドキ』としてしまつたけれど、単に仕事が忙しいつてことなのね。」

「上手くいつてるんだ、坂田君と」

「うーん。多分?」

「多分なんて、弱氣なことを言わないで。ね、大丈夫よ」

「可愛いなあ、有加は。」

「えへへ。実はね、今日や。岬ちゃんアーティストの須藤君も来る予定だつたんだ」

須藤君の名前を聞いてドキンとした。

「そうなんだ」

「三枚、飲み放題の券があつて」

「ふーん」

「もし、もしもや、四枚あつたら岬ちゃんも来た?」

「飲み放題に?」

「そう、飲み放題に」

「……行かないよ」

「ふーん」

「行かないからね」

「ハイハイ」

「そうそう。『ハイハイ』なんだからね」

「ハイハイ、分かりましたよ。誘いませんよ。もつ、岬ちゃんつてば、固いんだから」

「悪かったわね」

「まあ、いいや、そのことは。でもなあ、悔しいなあ、港に負けるなんて」

「ん?」

「どうせ港絡みのことや、今日は私は遊んでもらえないんでしょ」

「……港がうちにいるの知つてた？」

「知らないわけないでしょ、岬ちゃん。親同士で情報がぎゅんぎゅん飛んでるつていうのよ。ほんともう、岬ちゃんは香氣なんだから」

「それは、失礼しました」

「じゃあね、岬ちゃん。港にもようしけね」

「うん、伝えとく

「バイバイ」

「うん、バイバイ」

有加が受話器を置く音が聞えた。

時計は六時を過ぎていた。

港からの連絡は、まだ無い。

録画をしていた映画を見ようとビデオをセットした。  
港が来てから、港のベースで生活が回っていたのでゆっくつとうして過ごす時間もなかった。

リモコンで再生ボタンを押す。

画面が切り替わり映画が始まった。

「ん？ 東宝？」

衛星で洋画を録画したはずだったけど。

『ゴジラ モスラ キングギドラ 大怪獣総攻撃』

は？

驚いてビデオを止めてカセットを出す。

見出しには、間違いなく私の字で、これから見る予定だった映画の題名が書かれていた。

「みいなあとおー！！」

帰つてきたら、ただではすまないからー！

なのに、待てど暮せど、港は帰つてこない。

私の怒りマックスも、もう戻の状態になつてしまつていた。

十一時を過ぎてゐる

鍵を持つていればもう寝てしまうところだけれど、実家にも戻つていいないので、そうもいかない。

まあ、友だちや彼女の所に泊まつて いるのならそれでもいいけれ

でも、丁寧ハハ加減な割には、セーラー服の上にジナは肆意に車絡

してくる子だったから、だから気になる。

気になるけど、まさか港の携帯のメモリーを調べてまでどうにか

アラビア語

突然、静かな住宅街に救急車の音が響いた。

もしかして。

サンダルをつつかけて玄関の扉を開ける。

扇を扇ぐ音、一串の茶筅豆の音が、聞こえたけれど、その音は段々と遠くの方へと消えていつた

だからって、大丈夫ってことじやないけど。

でも、安心した

近所の明かりも消えている。

昼間が暑かつただけに、涼しく感じる。  
気持がよかつた。

「ついでだから、マンションの前まで出てみようかな  
もしかしたら、どこからか港がテクテクと歩いて帰つて来るかも  
しないし。

そう思つて、扉に鍵をかけて、エントランスへと向かつた。

少しずつマンションショウなのだけれど（だから、家賃もお安

かつた)、エントランスはゆつたりとしていて、感じがよかつた。集合ポストの横を通り過ぎ、表へ出ようとしたら、エントランスへと上がる為の短い階段に誰かが座っているのが見えた。

ふ、不良?

不良なんて言葉、久しぶりに頭に浮んだわ、なんて思いつつ、その人の背中を眺める。

あれ? もしかして。

階段に座つて頭を膝につけたまま(体育座り?)動かないその人の横をそっと通る。

階段を、静かに静かに下りる。

その人は、顔も上げない。

自分以外の誰かがここにいること、全く気がつかないみたいだ。

マンション前の道路に立ち、左右をゆっくりと見渡す。暗い道のどちらからも港は歩いてきそうにはなかつた。

どうしよう。

港といい、階段に座り込んでいるこの人といい。

「……須藤、君?」

その人に声を掛ける。

寝ているのかしら?

「須藤君、だよね?」

寝ているのなら、大変。

夏だから凍死はしないだろうけど、風邪はひくかも。

「ねえ、大丈夫?」

私の声が聞えたのか、その人はゆっくりと顔を上げてきた。

そして、その二重な目をゆっくりと開け、焦点の定まらない目で

私の顔をじーっと見だした。

「……コンバンハ」

須藤君つてば、こんな状態なのに挨拶をしてきた!

こんばんは、だつて！

「こんばんは」

なんか妙な会話だつた。

でもこの先、これよりももっと妙な出来事が起つてしまつて  
ことを。

この時の私には、予想ができなかつた。

## 18話・好きなんだらうなあ

やばいなあ、と思つた。  
すきつ腹に、これほぐると。

「まあ、須藤。たまにはいいじゃないか」

あの後、残業を終えようやく帰れると思つた俺に、同じ会社で大学の先輩でもある池野さんがそう声を掛けてきたのだ。

「ゴメンー。朗。仕事が終らん。今日の飲みは延期して！」

携帯のメールには、坂田からのこんなメッセージが入っていた。林とのゴタゴタの後に、坂田に電話をしようとして気がついたものだった。

それなら、と冷たいズボンを穿いたまま（勿論、シミにならない様に水洗いはしたけれど）片つ端からガシガシと仕事を片付けていった。

そして、そんな俺に池野さんは声を掛けってきたのだ。  
いつもだったら、そういう『飲み』のお誘いには一切乗らない俺  
だったが、疲れていて腹も減つてて、まあいいか、なんて思つて。  
それがまずかった。

「須藤。『十四代』は、飲んだことがあるか？」

池野さんは、そう言いながらあれこれと日本酒を俺に勧めだした。

そして、延々と奥さんの愚痴をじぼじぼした。

すきつ腹に日本酒＆愚痴。

これは、悪酔いのパターンなんではないかい？と思いつつ、ま  
あそうなつたらそうなつたでいいや、とも思つて。  
もう、なんでもいいや、つてな感じになつて。  
で、今の状態。

俺は、池野さんの愚痴をひたすら黙つて聞き（「メントする気力もなかつた（）、勧められる銘柄も全て飲んだ（断る気力もなかつた）。

結果、池野さんは「満足されたようでお帰りアソバシ、残った俺は予想通り悪酔い状態。

帰り際に池野さんはあんだけ愚痴つた奥さんのこと」「でも、可愛いところもあるんだよなあ」なんてフォローもして。

つまりは、もしかして、愚痴ではなく惚氣だつたのだろうか。

……迷惑。

非常に、迷惑。

やつてられないなあ、なんて思つたあと、酔つて重くなつた足をただ前に出していくことだけに集中することにした。足が前に出続ければ、必ず家には着くのだから。

……でも、それももう限界。

ペタンと座り込む。

なんとか、氣力で帰つては來たけれど、見慣れた自宅マンションを見た途端に体がへなへなとなつてしまつた。

いつもは、歩いてしか通らないマンション入り口の階段に、へたりこんで座つてしまつ。

ハイハイ、ワタクシ。

右から見ても左から見ても、立派な酔つ払い「ゴザイマス。

全く、学生でもないのにこんなに酔つて。

なあにやつてんのおー、と自分で思つ。

可笑しい。

笑える。

笑つてしまえ。

ハハハ、と笑うつもりが、口が上手く開かずくクククと籠つてしまふ。

それも、笑える。

ペタンと座つたコンクリートの階段から、ジンジンと冷たさが伝

わってくる。

熱くなつた体を冷やしだす。

きいもちいい。

明日は休みなんだし、このままじこで寝るのも有りだよなあ、と思えてくる。

ところで、今、何時なんだろう?

住宅街のここからは、十時過ぎると物音ひとつしなくなるから。だから静かだ、すいぐ。

でもまあ、電車があつたつてことは、一時は過ぎていらないんだろううけど。

多分、ねつ。

とはいえ、電車を降りてから時間は随分と経っているのかもしないし。

そうだ、時計を見りやいいんだ。時計を。

なんて思つたら、いきなり救急車のサイレンの音がした。びっくりした。

もしかして、俺の事を誰かさんが通報したとか?

つーことは、なんだ? もしかして、俺つてばこれから救急病院行きか?

家はココなのこ、病院なんかに連れて行かれひやつたりするわけ?

笑える。

非常に、笑える。

笑い出したくなる。

「須藤、君?」

はあ?

救急隊員サンは、俺の名前をこ存知なのか?

しかも、女かいな?

「須藤君、だよね?」

ゆづくじと顔をあげ、重たい目を開ける。

「大丈夫？」

黒豆。

なんだ。救急隊員サンじやないじゃないか。

これは、これは、黒豆オメメの佐倉 岬サンでしたか。  
しかも、俺の顔を覗き込んでいたりして。

そーいや、サイレンの音は、どーした?  
もう聞こえないなあ。

「コンバンハ」

とにかく、佐倉 岬に挨拶だけはして、また目を閉じる。  
「挨拶は、ご近所付き合いの必須事項。  
こんな酔っ払いでもね。

「こんばんは」

ありやりや。

適当に流せばいいのに、佐倉 岬は、いつもの如く馬鹿丁寧に答えてくるし。

笑える。

笑っちゃまえ。

「須藤君、どうしたの?」

クククと、急に笑い出した俺に、佐倉 岬が焦ったような声を出してきた。

「笑える、と思つてさ」

笑える。

何もかもが笑える。

馬鹿正直に挨拶を返してくる佐倉 岬にも、俺を好きだと呟つた林にも、珍しい日本酒を勧めながら奥さんの愚痴だか惚氣だかを話し出す池野さんにも。

そして、そんなものを全てがバカバカしいと斜めに見ている自分自身にも。

行き先をなくした、アノ生物にも。

もう、バカバカしくなつて笑える。

「もう、爆笑」

クククと、笑いが止まらない。

「須藤君、風邪引くよ。部屋に帰りつつ。」

おーっ！

まだいました『スカ、佐倉 岬サンは。お節介女。

「部屋って何や？ 佐倉さんの部屋の」と？」  
そう軽口を言って、再び目を開く。

目を開いて驚いた。

佐倉 岬の顔が至近距離で見えたからだ。

へつ？ と一瞬正気に戻ってしまった。

といきなり俺の両脇に、佐倉 岬の両腕がそれぞれ入ってきた。

「須藤君。ほら、立つて」

細い腕をした佐倉 岬が、俺を立たせる為に体を持ち上げようと  
しだしていたのだ。

ううん、仕方がないなあと思いつ、俺もよいしょ、と立ち上がりう  
とした。

けど。

「れつ？」

自分が思うよりも、アルコールが体に回っていたようだった。  
足が思うように動かない。

上手く立てない。

ゆらゆらよろよろとしながら、なんとか体を動かす。

そんな俺を佐倉 岬が支える。

「須藤君、歩ける？」

佐倉 岬が聞いてくる。

「多分」

多分、歩けるとは思つけれど。  
体を横に向けられる。

「ほり、階段よ」

佐倉 岬の声に足を一步踏み出そうとした。

「「わっ、わわわ」「

けじ、やっぱり『分』は『分』で。

俺は、佐倉 岬と一緒にようけながら、その場に再びしゃがみ込んでしまった。

で、しゃがみ込んだ俺の腕の中には、当然の様に佐倉 岬がいたりする。

華奢な体が、すっぽりと俺の腕の中に入っていた。

「ダメかも

佐倉 岬を腕の中に入れたまま、俺はつぶやいた。

「今日は、『口で寝ます』

佐倉 岬の髪の香りを感じながら、佐倉 岬の肩に顎をのつけたままで、そう言った。

そうだ、寝ちゃえ、寝ちゃえ。

丁度いい抱き枕もあることだし。でも、少し骨っぽいかも。

「だ、ダメよ！ ほら起きて！」

眠るモードに入った俺の気持なんて知るよしもない佐倉 岬は、必死な声を出しながら、俺をぎゅうぎゅうと掛け上げようとしている。

でも、非協力的な俺の体は、佐倉 岬にはどうも扱えないようだつた。

「うーん。どうしよう

しゃがみ込んだまま、佐倉 岬が悩みだした。

どうして『口で』の人が悩むのか、俺には全く分からん。

「馬鹿じゃないの、佐倉さん。俺を置いて部屋に帰ればいいだけじゃん

そういうえば、例の彼だって部屋であなたの事を待っているんじゃないの？

「それにさ。あなたはなんでこんな時間にこんなトコにいるのさ？

】

抱き合つたような形のまま、佐倉 岬の後頭部に向かつて話しかける。

「弟が」

オトート?

佐倉 岬には弟がいるのか。

「弟が帰つて来なくて、で、家にも帰つていないつていうからなんじゃそれ。

「佐倉さんの弟つて、小学生?」

「そんなわけないでしょ」

佐倉 岬の声も、俺の後頭部に響きだす。

「あのね、あなたの弟が高校生だか大学生だか知らんけど。赤ちゃん扱いしてんじゃないの? その『弟』とやらを」  
そう言いながら、佐倉 岬が自分の彼のことを『あの』だなんて言つたことも思い出してしまつた。

「佐倉さん、馬鹿にしてんでしょ。男のことを、なめてんでしょ」

ああ、脳みそがどんどん沸騰していくのがわかる。

「だいたいね。女が、こんな遅くに弟を探そうとのこと出でたり。酔っ払つた奴にお節介を焼きだしたりって、非常識なんだよ。全く、何なんだよ、あなたは」

「こんな俺の言葉に、佐倉 岬は、何も言わない。

「と言つか、一体何様のつもり?」

反応が無いのをいいことに、言いたいことをズバズバと言つた。でも、佐倉 岬は何も言わない。

沈黙が続く。

酔つ払いの戯言だと思っているのかもしれない、佐倉 岬は。だから俺も、もう何も言わない。

佐倉 岬を腕の中に入れたまま。

佐倉 岬の肩に顎をのせながら。

あ、この間、テレビで「こんなシーンが映っていたなあ」と思つ。

井の頭公園が出てくる、女優の卵と画家のお話。

いつもして抱き合つて、声の響きで。……響きで、なんだつけ？

そり、何か言葉を言つんだ。

「そうよね。うん。そうだわ」

突然の佐倉 岬の声が、俺の体に響いた。

くつついていると、声は体の中にも響いてくる。

佐倉 岬の声が、俺の体に入つて消化される。

消化されたその言葉に腹が立つ。

「前々から言いたかったんだけど、あんたの脳みそはトーフなのか？ なんでいちいち納得するんだよ。でもって、なんで俺は、こんなにむきになつてあんたにな」

佐倉 岬の肩から顔を離し、両腕を掴んで、そう言つた。

『何を言おうとしたんだ？ 俺は。』

全く、なにをムキになつてんだよ。

『朗つていつも冷静よね』

『どうか？』

『そりよ。自分の進路だつて。あんなに家具好き男のくせじで、全く関係ないところで働くことにしてるし』

『趣味より安定を選んだのさ』

『ふーん』

『なんだよ』

『私のことだつてや』

『吉岡のことつて、何だよ』

『好きなくせに。私のこと。でも、私が『親友の彼女』だからつて何もしてこない』

『それは、何か勘違いだろ？』

『私は、そんなうぬぼれ屋じゃない。でも、そう思つんだもん』

『仮にそうだとして。どうして欲しいの俺に。俺は「メンだよ。」  
そういうた「タ」は』

『ゴタゴタ？ なによ、それ！』

『坂田と別れたいんなら、俺を使わいで自分でどうにかすればいい』

『要するに、自分が当事者になるのは、ごめんだってことよね』

『そうだよ。面倒なのは、ごめんなんだよ』

『そんなんで、朗は人生楽しいの？』

『楽しく暮す為に、そうしているんだり？』

突然また、あの大学四年の時のやりとりが蘇った。

佐倉 岬と知り合つてから、二度目だ。

大学の時のあれも、確かこんな夏の夜だった。

だから、思い出すのか？

それとも、俺の心の何かがあの思い出を引き出すのか？

いつも外野でじょうとする。

面倒くさいことにば、足をつっこまない。

ゴタゴタの当事者にはならない。

いつも傍観者でいたい。

そんな風に、生きてきた。

今、俺の目の前にいるのは、『近所さん』で、『年上』で、しかも『男と一緒に住む』女。

日本全国探しても、面倒くささではベストテンに入るだろう。  
でも。

何故か無視できない。

適当に出来ない。

外野になれない。

彼女に対しては、何かとムキになってしまふ。

好きなんだろ？なあ。

俺は。

佐倉 岬のことだ。

段々と酔いが覚めてきた頭には、どう考へてもその答しかなかつた。

だから、自分と同じ年ぐらいの男を『あのこ』なんて言われて腹が立つし、男がいるのに俺にこんなお節介をやいてくる佐倉 岬にも腹が立つんだろう。

腹が立ちつつも、彼女の側にいたくて。つまり、面倒な事になつても手に入れたいんだろう。

この人を。

「俺、部屋に戻るから」

佐倉 岬から手を離し、階段に手をついて、体をゆっくりと起す。

佐倉 岬の体温が、俺から徐々に離れていく。  
なんとか立つた体で、コンクリートの壁に寄りかかる。

佐倉 岬を見る。

佐倉 岬も立ち上がり、俺のことを見ていた。

「俺、あなたのことが好きだ」

素直な気持が、口から零れ落ちるようにして言葉になる。  
そしてその言葉は、再び俺の胸の中にストンと落ちていき。  
パズルの一ピースのように、心の真ん中にピタリと嵌つた。

## 19話・一十九にもなつて

明け方近く、港は帰つて來た。  
背中に、小さな男の子を背負つて。

「いいお天氣」

ぼーっと庭を眺めながら思う。  
みゅうの入つた水槽は、日陰になるように少し動かした。  
時折風に吹かれた葉の動きで、ちらちらと夏の日差しが水槽の水  
に光つては揺れていた。

あなたの方が好きだ

水面の煌きを見ながら、夕べの須藤君の言葉を思い出していた。  
一人で立ち上がりもしない程に、彼のイメージには合わない程に、  
ぐでんぐでんに須藤君は酔つていた。  
そんな人の言つたことなんて、本気にしちゃいけない。聞き流せ  
ばいい。

聞き流さなくちゃいけない。

それに。

そもそも、そんな言葉を私は受け取れない。

部屋のチャイムがなつた。

一瞬、身構えてしまい、そしてそんな自分に呆れてしまった。

「岬ちゃん、私  
有加だつた。

「ひやあ、なにアノ状態」

有加は、ベットを見ながら呟つた。  
確かにそう。

泥だらけの港と男の子が、洋服を着たまま私のベットに転がつて  
いるんだもの。

「ベッドごと、洗濯機に放り込みたいって感じね」  
有加が溜息をついた。

「本当にねえ」

港のすることには、本当に毎回毎回、溜息しかでない。

「あの」、港の教え子くん?」

有加が聞いてきた。

「うん。多分」

きっと、以前ここで基地を作った男の子なのだろうと思つた。  
そんな気がした。

「私、お風呂作るわ」

有加に声をかけた。

きっとお湯も、じゅぶりになるんだろうな」と思いながら。

お皿は、有加が作ってくれたサラダと、ひさしがあるベーコン  
とブロッコリーを使ったパスタにしようと思つた。

「もう作り始める?」

そう有加が聞いてきた時に、「……おはよ」と、港がぼーっとし  
た様子で起きてきた。

「岬、なんか飲むもん」

「はい、はい、はい」と返事をしながら、パタパタとキッチンへと  
向つた。

「バカ港、おはよう」

有加の声がした。

「ん。有加があ。ひみもいい加減に岬離れしなきによ

港の間延びした声が聞えた。

「その台詞。港だけには、言われたくない」

ブンと怒る有加の声がした。

冷蔵庫から出した麦茶をコップに注いで渡すと、港はそれをそのままイックに飲み干した。

そして、「俺、風呂に入るわ」と言って、そのまま浴室へと消えていった。

「……せんせい」

ベットから声が聞える。

「はいはい」

今度は、そつちにパタパタと移動する。

「岬ちゃん、ご苦労様だわあ」

背中で有加の声を聞く。

「こんにちは」

ベットの上に寝ぼけ眼おなまで座っている男の子に声を掛けた。

「先生はね、今お風呂だよ。君も入る？」

痩せて真黒な男の子が、じっと私を見ている。

「先生のお姉さん？」

探るような瞳だ。

「そうだよ、佐倉先生のお姉さんだよ」

私のその言葉に、どこか安心したような表情を男の子は浮かべた。

「色は似てないけど、田は似てる」

男の子が言つ。

笑つてしまつ。

「うん、そうだね。よく見ているんだね。じゃあさ、あつちで冷た  
い麦茶でも飲もうか？」

田で男の子を促すように、有加のいる部屋に視線を移す。

「こんにちは」

テクテクと私の後ろをついて来た男の子に、有加が声を掛けた。

「……こんにちは」

男の子も言ひ。

男の子も、私が出した麦茶を「ゴクゴクと飲んだ。

「おっ。吉成、起きたか。ちょうどいい、風呂に入れ

泥の黒さの無くなつた港が、ひょいと顔を出した。

「やっぱ風呂はいいなあ。こう、生まれ変わる感じがするよ。あつそうそう岬、吉成用にさーシャツとか短パンとか貸してよ」

「はーはー」

「生まれ変わつたなんなら、少しは岬ちゃんに迷惑をかけるのを止めにしたら、『佐倉先生』。で、岬ちゃんは岬ちゃんで、返事に若さが感じられないし!」

もうしようがないなあ、と言いながら有加が苦笑している。

「若さかあ。いいの、それはもう。有加サンに任せたから」

「えつ? 私? 若さなんて、ないよつ。会社じゅさりげなく勤続年数長いほうになつてきたし」

「おお。有加も、もう三十九か」

「バカ港。港の分のお昼は、ないからね」

「あつ、間違えた。有加。おまえ、今年十九だつけ?」

「それは、若すぎだつてば」

そんなおバカなイトコ三人の会話を、吉成君は不思議な顔をして見ていた。

「あつ。ボク、ビールが飲みたいでーす」

「お昼」はんを食べながら、突然に港が言ひ。ビールつて聞いて、思わずむせてしまつ。

須藤君を思い出してしまつたから。

「な、ないでーす」

「ほりほりほとしながら、それだけ言った。

「つっしゃーー。じゃあ、買い物に行くぞ。岬」

人がまだ食べているのこのうのに、港が背中をボンと叩いた。

「もう、港つてば。そんなの一人で、」と言いながら港の顔を見ると。

……ああ、はいはい。そうですかあ。この顔にピンと来たらってヤツですね。

「有加、こめん。すぐに帰つてくるから」

「はいはい、じゅりくり」

こつものことな、つて感じで有加が言つた。

「吉成君、あのおじさんとおばさんがない間に、一人でおいしいアイスを食べようね」

そう言つて、笑いかける有加の顔を、吉成君は困ったように見上げていた。

「どうするの？ 吉成君。港のクラスの子なんでしょう？」

「コンビニへと歩きながら港に聞く。

「うん、まあ。あ、そうそう。昨日は悪かつたよ、岬に連絡もしないでさ。で、吉成の事だけ、今日もつ一回、親御さんと会つて話すから」

はあ、と溜息出る。

「港さ。何があつたか知らないけど。今は夏休みで、しかもあんな時間に連れ帰つてきて。いくらなんでも踏み込みすぎなんじやないの、そのじ家庭の問題に。港の関わる範疇を越えていくと思つけど」

「どう考へても、おかしいと思つた。

「……その範疇つてやつはね、一体誰が決めるの？」

港がそう言つた。

「誰つて。一般的によ

そう私が答えると、港は一度開きかけた口を閉じてしまった。

しかし、次の瞬間。

港は、妙なことを話し出した。

「岬が仁と付き合っていたとき」

は？ 私と仁？ この話にどう関係があるのだろう。

「反対だった。だって、おまえ、仁といふと、変だったもん」

港が歩きながら言ひ。

「変つて」

「岬は、こつもこの言葉で仁の氣にいるよう活動いて。あんなの、絶対に変だと思っていた」

「……それは」

「気がつくと思った、ほつといったって岬は。そんなの変だつて、そんな関係は変なんだつてことに気がつくつて。でも岬は、気がつかないで結婚までして」

体の温度がすつと下がるのが分つた。

「俺たちは家族だけど、付き合っているのは岬と仁なんだから、これは踏み込めないって思つて。言つべきではないと思つて。俺は、岬に正面きつて何も意見をしなかつた。自分の本当のところの言葉を何一つ言えなかつた。でも、言えよかつた。範疇とか、部外者だとか、そんな言葉で逃げないで、言えよかつた」

そう言つて、港が立ち止まり振り向く。

「俺は、岬と仁が付き合つのは反対だと。結婚なんて、どんなにもないと」

「港」

「今のあいつ、吉成を見ていると思い出すんだ、岬のことを。親の気にいる子よりもこよつけよつけがんばつて、身動きが取れないあいつを見ていると、岬と重なるんだ」

「どんと胸を突かれたような衝撃が走る。

「だから、今度は、吉成の力になりたい。岬の時は、俺は何もできなかつたから」

港は、そう言つたきり、ふたりと黙つてしまつた。

私も何も言えなくなつてしまつた。

そのまま一人して、クーラーががんがんに効いたコンビニに入り、「ゴロゴロと缶ビールをカゴに入れた。

お互い無言のままだつた。

レジの前までスタスターと歩いて行つた港が、突然ぐるっとこっちを振り返つた。

「金、忘れた」

港は、とっても心細そうな顔をしていた。

それは、昔から知つていて、彼の表情だつた。

「もう。バカね」

クスクスと笑いながら、私はお財布を出した。

「ごめん」

「いいよ」

「ごめん」

「いいつてば」

そんなやり取りをしながら、お互い照れくさくて顔が見れなかつた。

私なんて、危うく涙まで出てしまいそうだつた。  
港の色んな気持が私の心に流れてくるようだ。

そして、情けなくなつた。自分に。

港に、私のことでそんな思いをさせていたなんて。

心配はしてくれているとは思つていたけど、それは私の予想をはるかに上回ることだつたから。

……ううん。

心配をかけているつて、本当に思つていたのだろうか。

周りの事に目がいかないくらい、私は自分のことで一杯一杯だつたんじゃないだろうか。

自分の事ばかり。

そうだ。いつだって、私はそつだ。

自分で決めて選んだ相手なのに、自分から逃げ出してしまった。

上手く生きられない。

二十九にもなって。

人に心配ばかりかけている。

夏の暑い日差しの中に身を置きながらも、体はやけに冷たくて、  
私は思わず腕を擦つてしまつた。  
けれど、擦つても擦つても、気持ちが悪いほどに体は温まらない。

まるで体の中から冷氣が生み出されてしまふよつた、そんな不安を  
伴つた冷たさが、私の体を取り巻きだした。

暑いなあ。

暑い。

あつ。

あ?

がばつと音が出るような勢いで、体を起した。

頭をいじって（ああ、風呂に入つてない）、床に散ばったスーツを見て（ああ、即クリーニングだあ）、次に。

佐倉 岬の驚いた顔を思い出した。

部屋の窓を全開にした。

洋服についていた煙草の煙で、部屋の中がヤ一臭かつた。  
洋服を纏めてイスに掛けて、そのままシャワーを浴びにいった。  
なんじやこりや、と膝小僧あたりを見ると、青あざができていた。

この年で、こんな作るかなあ。

がつくりときた。

思い出す。

ああ、これは確か階段の辺りで。

ああ、きっと、あのよろよろしていた時にだと。

はあ、と溜息が出る。

当然の様に、あの様子を全部見られていただらうなあ、と思ひ。  
そんな失態の数々を思い出すと溜息は出るけど、あの時間をやり直したいとか消したいとは思わない。

覚悟は、出来ている。

佐倉 岬に好きだと言つた。

それは、もう、自分でさえ逃げられない事実だから。

せつぱりとした髪をがしがしとバスタオルで拭きながら、冷蔵庫

からミネラルウォーターを出した。

きんきんに冷えていたそれを、そのまま、でっかいペットボトルのまま「ぐぐくと飲んだ。

時計は、もう一時近くになっていた。

今日も暑い一日だ。

シーツやタオルを洗濯して、クリーニングに持っていくものを纏めたりしていたら、家を出るのが夕方近くになってしまった。

マンションの Horton ランスに出ると、ばったりと佐倉 崎の従姉妹の有加ちゃん（だつたよな？）に会った。

お互い目が合い、ぺこりと挨拶をした。

「お買い物ですか？」

有加ちゃんが聞いてくる。

「うん、まあ。あと、クリーニングに」

そう言ってスーツやシャツの入った袋を持ち上げて見せる。

「マメですね、須藤さんつて」

感心したような顔で、有加ちゃんが俺を見た。

「マメ、といつか。自分でしないと、ねえ」

マメとか、そういう問題でもないと思つただけだ。

「あの、坂田さんから」

「はー？」

「昨日、須藤さんにも飲み会中止の連絡つてありましたか？」

「うん。携帯のメールに」

「そうですか」

「うん」

多分、有加ちゃんは昨日のことで何か気になることがあるんだろううなあ、と思いつつ、そう思つてゐるのに聞いてあげない俺は嫌な奴かなあとも思つ。

「あのや。 もしかして、昨日は佐倉さんの家に泊まっていたとか？」

「え？ 泊まつてはいませんけど」

「そつか。いや。……そつにえばや。佐倉さんの弟つてや、帰つてきたわけ？」

「はい、今朝、つて。まあ、よく御存じで。もしかして、須藤さんにもそのことで御迷惑をおかけしたとか？」

「いやあ、まあ。そんなことは」

「ほんと、あのお騒がせ男つてば。散々岬ちゃんに心配をかけた挙句、朝帰りですよ。朝帰り！ しかも、もう、びりどりになつて。もう本当にあいつは、いつまでたつても岬ちゃんに甘えて。岬ちゃん大好き人間だから」

そう言つ有加ちゃんの顔を見て、俺は笑つてしまつ。

「そう言つ起きみも、好きだよね。佐倉さんのこと」

「えへへ。ばれたか。そう。凄く好き。大好き。岬ちゃんの周りの人つて、みんな岬ちゃんが好きなんですよ。ほら、岬ちゃんつてお世話上手だし」

「確かに」

おせつかいは、佐倉 岬のDNAに染み込んでいるんだな。

「でも、岬ちゃんつて自分の世話は人にさせないつていうか、本当の所を見せてくれないつていうか」

「本当のといひ？」

「そつ。岬ちゃんは岬ちゃんを演じているつていうか」

ああ、なるほど。

でもまあ、多少なりとも入つて言つ奴は、佐倉 岬に限らずそんなところがあるんじやないかつて思つけど。

でもまあ、彼女はそう思つていないうつだから、あえてそんなことは言わなわけです。

「でも、どうして？ 須藤さん、どうしてそんなに岬ちゃんのことを見くんですか？」

突然有加ちゃんが、大きな目をぱっちり開けて、俺の顔を覗いてきた。

この顔を見て、坂田や、佐倉 岬が彼女に敵わないのが少しわかつた気がした。

真つ直ぐなんだなあ、彼女は。

『『岬ちゃんの周りの人つて、みんな岬ちゃんが好き』なんだろ？ 生憎俺も彼女の上の部屋に住んでいる『周りの人』になってしまったしね』

えつ、と有加ちゃんの目がひと回り大きくなつた。

「つまり。そーいうこと

自分に言い聞かせるように、俺はそう言つた。

なんだか駅まで有加ちゃんを送る形になつて、そのままクリーニングに寄つて、珈琲屋に入つた。

腹は減つていなかつたけど、無性にインスタントではない、きちんとといった珈琲が飲みたくなつたのだ。

「いらっしゃいませ」

カウンターには、マスターがいて、その隣りにはマスターのいれる珈琲の様子をじっと見てゐる小柄な女の子がいた。たまに来るこの店は、珈琲も美味くて落ち着ける、いい店だつた。

窓側の席に座つて、のんびりと外を眺める。

眺めながら、ああ、ともかくやることをやらないとなあと思つた。

やる」と。

佐倉 岬の家に置いてもらつてゐるアノ生物を、引き取りに行くこと。

あれを自分で引き取らないと、何も始められないと思つた。

林に対しても、佐倉 岬に対しても。

しかし。

アノ生物があ。

ああ、考えただけで、手の平に汗が滲んできた。  
人つて字を手の平に書くのは、こんなことにも有効だろ？  
うか、なんてことを考えていたら。

「えつ？ エツ？」

窓の外を、佐倉 岬の男が子ども連れで通り過ぎるのが見えた。

「ウソダロ」

思わず身を乗り出して、もつ後ろ姿しか見えない二人を田で追つた。

「子ども」

「子ども？」

待て待て。

つてことは、佐倉 岬の男は、子持ちってことか？  
もしくは、佐倉 岬との間の子どもとか？  
まあ、年齢的にも、ありえないのだろう。  
いや、しかし待てよ。

佐倉 岬のキャラクターからして、自分の子どもと（どんな理由  
があるにせよ）離れて暮すような感じには見えない。  
まあ、世の中にはいろんな事情があるとは思うけど。  
事情を抜きにすると、そうだと想つ。

『エレベーターになつて帰つてきた』

いや、でも弟は小学生ではないつて言つていた。

なんだか、妙な感じがした。

もしかして、俺は、何かを勘違いしている?

「お待たせしました」

この店の看板娘のマスターの孫が、珈琲を運んできた。

この珈琲を飲んだら。

カップに口をつける。

ほろ苦い深い味のする珈琲が、まろやかに喉を通っていく。

俺は、佐倉 岬に会いに行こうと思つた。

## 21話・泣いてもいいよ

港と部屋に戻つたら、吉成君と有加は本当にアイスを食べていた。

一人そろつて庭のほうに足を投げ出しながら、口の周りをチョコ色に染めていた。

「亀、飼つてる？」

チョコの髪をつけた吉成君が聞いてくる。

吉成君は網戸の向こうのみゅうつの水槽を見ていた。須藤君から預かっていることは言わない。

吉成君は、ふーん、と言つたあと、まるでみゅうに「おこで、おいで」をするかのように足の指を動かした。

「うちは、犬」

吉成君が言ひ。

「あら。そなんだ」と知らぬ振りで私も答える。

「そういうえば岬ちゃんって、生き物を育てるのが上手だよね。まあ、この弟がいたら上手にならざるを得ないっていうかねえ。あ、今、私の頭の中に、岬ちゃんが誰かさんの代わりに水槽や虫がごを洗つている映像が浮かんだわあ」

有加が「ねえ、佐倉先生」なんて言つて港を見ている。

「ちえ。なんだよ」

身に覚えのある港が、ぽりぽりと頭を搔く。

港が途中で世話をしなくなつた生き物は、結局私が育てる」とことなつていたから。

カブト虫の幼虫や、めだか。

それこそ、亀だったこともあった。

「岬ちやん、洗面所を使うよ」

アイスを食べ終わった有加が歯を磨きだした。

「俺は、電話を使う」

港は子機を持つてベットの部屋に入つていった。

「僕も、」

吉成君が、私の顔を見上げている。

「ん?」「

「歯を磨く」

「うん、じゃあ、あのお姉ちやんのあとね」

そう言って、食器を片付けようとしたらい、吉成君にシャツを引つ

張られた。

しゃがんで、視線を吉成君に合わせる。

「ない

「え?」「

「歯ブラシ」

「ああ、貸してあげるよ」

ほつとした表情が吉成君に浮ぶ。

岬と重なる。

すきんと胸が痛む。

「さつきの、喧嘩?」

吉成君が言つ。

「さつきの?」

「『バ力港』って

ああ、さつきの有加の言葉ね。

「喧嘩じゃないよ。うーん、なんていうかなあ。仲良しだと、あんなことを言つても大丈夫な時があるのよ」

「先生のお姉さん、喧つ?」

「うーん、言つよ

……誰に?

「言つてた、私? 」

仁に、あんなこと言えてた？

岬は僕が好きなんだろ？ 好きだから、僕の気にいるような人間になりたいんだろ？

僕に愛されたいんだろ？ だったら、僕が気にいる女になるように努力をすればいい。

好きだった。

憧れて。

少しでも仁に近づきたくて。

だから努力して。

仁に好かれる人間になりたかった。

もう一緒に暮せないって、どういう事だよ。 一体、何年間一緒にいたと思っているんだよ。

結婚して一年を過ぎた頃から、私は体調がおかしくなってしまった。

でも、親にも病院の先生にも、仁とのことは話せなかつた。自分が悪いからこんなことになるのだと思った。

こんな風に、自分の好きな人の希望に添えないのは、自分が悪いからだと。

自分が悪いんだから、もっと、がんばらないと、って。がんばって、仁の望む私にならないと、って。もっと、もっと、がんばらないと。

もっと。  
もっと。

もつと。

努力が足りないんだよ。辛抱が足りないんだよ。  
僕のことを見ているんだろう？ だったら岬が、もつとが  
んぱらないと。

そんなに甘ったれたことを言って、いい大人が恥ずかしく  
ないの？

……でも。  
苦しくなってきた。

「仁」の生活が。

そして、一体今までどうやって「仁」と付き合ってきたのだろうと、  
自分でも考えるようになってしまった。

そして、私は気がついてしまった。

「仁」と結婚する前は、「仁」と一緒にいない時間で、自分の気持のバラ  
ンスを保っていた、と。

でも、結婚して。

生活の全てに「仁」が絡んでくると。

もう、何一つ自分で決められないくらいに「仁」が私の中まで侵食  
してきた。

息も出来なくなっちゃって、「仁」の側にいるのが苦しくなってしまった。

別れたいだつて？ そんなこと、今更よく言えるよな。

結局、おまえは自己中心なんだよ。散々、僕のことを振り

回して。

おまえの事は、……許さない。

全身から冷汗が出てきた。

ガクガクと体が崩れ落ちる。

涙も。

コントロールが効かずに、出でてしまいそうになる。

「先生のお姉さん？」

吉成君のいる前で、こんなになつちゃダメなのに。  
子どもに、こんなところを見せちゃダメなのに。  
必死で涙を堪える。

すると、ふいに。

小さな温かな手が、私の頭にのつた。

そして、ゆっくり、ゆっくりと動き出した。

かううじて流れずに溜まつた涙の向こうに、吉成君の顔が見えた。

「泣いてもいいって、先生が言った」

「えっ？」

「お、お父さんもお母さんも。『泣いちやいけない』って。『我慢しなさい』って。でも、先生は泣いてもいいって言った。痛いときや悲しい時は、泣いてもいいって」

「うん」

「先生もよく泣いたつて。転んで泣いたりしてたつて。泣くのは、恥ずかしいことじゃないって」

さつきから単語でしか話をしなかつた吉成君が、顔を真つ赤にしながら私に一生懸命に話し掛けてくれる。

小さな吉成君が、気持ちの全部で私をなぐさめようとしてくれている。

大人だとか、子どもだとかそんな垣根を全部なしにして、今吉成君と私は同じ田線で同じ場所に立つていいんだ、と強く感じた。

人つて、凄い。

温かい。

ありがたい。

そして、その吉成君の言葉で、私は港の小さじ時のことも思って出していた。

港は、転んでは泣いて。

喧嘩して負けたといつては、泣いて。  
いつもどおりの顔で泣くもんだから、涙の流れた縦の線が顔に  
できていく。

それが可笑しいやら、でも笑つとまた泣くからって、ぐつと我慢  
して。

「うん。港なんて、泣かない田はないってくらい、よく泣いていた  
よ」

自然と顔が、ほころんでくる。

「先生は、たくさん泣いたから。だから今は強いのかな  
港が強い？」

「強いの？ 港って？」

こっちが驚いてしまった。

「だつて泣かないもん」

あはは、と思つ。

そつか。

そうかもね。

「だから。先生のお姉さん、泣いてもいいよ」

「えつ？」

「痛そうな顔だつた」

「痛くないよ。どいつも」

「平気？」

「平氣だよ」

吉成君のはにかんだ笑顔に答えるように、私も笑つてみせた。

「あれ？ 岬。どつか痛いの？」

子機を持ったままで港がこっちに戻ってきた。

「なんでもないよ。大丈夫だよ」

「お待たせへ！岬ちゃん、洗面所ありがとう」

口の周りのチョコも、はげかかった口紅も綺麗に直した有加がひょいりと顔を出した。

「有加。次、吉成君が使うから」

バタバタとする中で、ストック用に買つてあつた歯ブラシを吉成君に渡す。

「ほら、吉成君、こっちにおいでよ」

有加が呼ぶ。

てくてくと吉成君が洗面所に向つて歩き出す。

その様子を見ながら港が「これから親御さんとこで、吉成を連れて帰るよ」と言った。

有加が帰り。

そして、港が吉成君を家に送つていった。

賑やかだった家が、とたんに静かになつた。

「さてと」

庭に干していた洗濯物を取り込み始めた。

「あら、」

小さな真四角の、吉成君のハンカチが残つていた。

吉成君の服は、あつという間に乾き（布が少ないせいだと思つけど）結局彼はそれを着て帰つた。  
だからこれは。

「忘れ物だあ」

ピンポン

チャイムがなつた。  
港だと思った。

「はいはー

このハンカチを取りにきたのね、と、ドアを開けた。  
『やあ、悪い悪い』って言いながら、港がそこに立つていて思つた。

「ここにちは。こんばんは、かな

だけどそこには、港ではなくて。  
須藤君が立つていた。

## 22話・嘘じやないから

思いがけず勢いよく扉が開き、笑顔の佐倉 岬がそこにいた。

「須藤君」

俺の名前を呼ぶと、佐倉 岬の表情は強張こわばった。

「確認もしないで、扉を開けるのは危ないと思いますけどね」「その表情に少し傷つき、強い口調でそんなことを言ってしまった。

「そうよね。須藤君だとわかつていたら、開けなかつた」

佐倉 岬も、そんな台詞を言つた。

それは、上等。

「あなたに預かつて貰つていたものを取りにきたんですけど」

その言葉を一気に言つ。

そう言わないと、最後まで言えない気がしたから。

「えつ？ 持ち主さんが、取りに来てくれたの？」

驚いたような佐倉 岬の声だった。

「残念ながら、それはもうないかな」

無いだろう、きっと。

「でも、須藤君は」

心配そうに佐倉 岬が言つ。

「まあ、そうだけど。でも、そうしないと」

人に預かつて貰つたのが、そもそも間違いだったのだし。

「わかつたわ。で、ええと」

佐倉 岬の視線が部屋の奥へと注がれる。

「じゃあ、持つてくるからここで待つて」

そう言つて佐倉 岬は、俺に玄関内で待つように言つた。

自分の部屋と同じ造りの部屋。

造りは同じでも、どこか違う空気を感じる。

佐倉 岬のパタパタと歩く音とガラス窓を開ける音が聞えた。  
部屋の中を見ないように」と、視線を下のほうにしていた俺の耳に、

佐倉 岬の足が見えた。

小さな水槽と小さな紙の手さげ袋を持つた佐倉 岬が俺の前に立つていた。

俺はまともにその水槽の中が見られず、誤魔化すかの様に今度は斜め上を見上げた。

その瞬間、ガランとした佐倉 岬の部屋が見えた。  
家具らしい家具が、一切ない部屋だった。

「須藤君？」

佐倉 岬が俺に声を掛けてきた。

「あっ。じゃあ、すみませんがそここの床に置いてくれますか。自分で持つんで」

そう言いながら、これから自分の取るべき行動を想像して、やばいくらいに手の平に汗が滲み出でくるのがわかつた。

まさか、汗で水槽が滑るなんてことは、ないだろうな？

「私が、運ぶわ」

佐倉 岬の言葉に驚く。

「いいよ、佐倉さん。自分でやるから」

「須藤君の意地だけで運んで、万が一水槽が落ちたりでもしたら、みゅうが可哀相」

そう言われると、なにも言えない。

「須藤君の部屋まで、私が運ぶから」

佐倉 岬がそう言いながらサンダルを履いた。

「……お願いします」

「ああ、本当に。」

佐倉 岬の前では、何一ついとこうなしつて感じの俺だった。

玄関まで運んでくれた佐倉 岬に礼を言った。

「この先は（予定としては、みゅうにはベランダに行つてもいいはず）  
定）、気合でどうにかするしかないだろ？」

帰つていこうとする佐倉 岬に声を掛けた。

「弟さん、帰つて來たつて？」

少しでも、なんでもいいから話しをしたいと思つた。

「そう、明け方近くに帰つて來たの。御心配をおかけしました」

固い表情で佐倉 岬が答えた。

「もしかして、子どもを連れて？」

「一か八かでカマをかける。

「えつ？ どうしてそれを？」

佐倉 岬が、黒豆のオメメを一杯に大きくして驚いている。

「さつき。小学生の男の子を連れて歩く、『佐倉さんの弟』を見かけたから」

「ああ。うん、そうなの。あの男の子は…ちょっと知り合いの子で」

弟。

彼は、佐倉 岬の男じゃない。

「あはは」

ああ、勿論。

男がいよつが、どうにかするつもりだつたけど。

でもやつぱり、いなに越したことはない。

佐倉 岬が、俺のことをどう思つているのかわからない状態なのに、それでもやつぱりほつとしてしまつた。

「どうしたの？ 須藤君」

佐倉 岬が、突然笑い出した俺を見て驚いている。

「いや、ごめん。ほつとして」

そして、また笑ってしまった。

「もしかして、弟のことを、そんなに心配してくれていたのか？」

申し訳なさそうな顔をして、佐倉 岬が俺を見る。

「そういうわけではないけれど」なんて、正直に答えてしまう。佐倉 岬は、俺のその言葉にどう返していいのかわからないような顔をしていた。

そして自分の部屋に帰るタイミングをどう切り出したものか、と  
いう頼りなさげな様子で、俺の前に立っていた。

自分の瞳の中に、佐倉 岬がいる。

それがとても、くすぐったい。

本当に、なんて俺の体は正直なんだろう、と思つ。  
目の前にいる人が、佐倉 岬だつてことだけで、気分が浮かれて  
しまうなんて。

でも、もつと求めてしまう。

自分の瞳に佐倉 岬が映るよつに、彼女の瞳にも自分を映して欲  
しいと。

……坂田以下、だな。

「昨日、俺が言つたことは、嘘じやないから」

佐倉 岬がギクリとした表情になる。

「ああ、昨日じゃないか、あれは今日だつたかも」

「……私。す、須藤君には、何も言わせてませんから」

そう言つて、俺をきつと睨むと、佐倉 岬は外階段を駆け下りて  
いった。

サンダルのペタペタした音が間抜けに響く。

「じゃあ、また言いに行くから」

外廊下から一階を見下ろしてそう叫んだ。

階段を降りきつた佐倉 岬が、びくんとしてこつちを見上げ、そ  
して泣きそうな顔で部屋へと入つて行つた。



なんだらう。

私つて、なんだらう。

どうして、須藤君の言葉や仕草に気持ちがこんなに揺れてしまつんだらう。

十時近くになつて、港が帰つてきた。

「ただいま」

はあ、と溜息をつきながら港が床にへたんと座つた。

「お帰り」

私も、はあ、と溜息をついた。

「あれれ？ 岬、なんかあつたの？」

港が私の顔を見上げてきた。

「ないです。何も」

でも、溜息が出てしまつ。

「あのさあ。吉成さんといふや」

「うん」

「まあ。うん。ようやく、親御さんと俺とで田線が同じになれるよ  
うなあ、なれなこよくな、つてまあ、そんな感じかな

「うん」

「そんなん、直ぐビビのひのひとはできないからね。今までの」と  
もあるわけだし

「うそ。そうだね」

「岬のところにいたのもや、吉成のこともあっての」とだつたんだ  
けど。実家だと、ほんと。いつもこうと動けなかつただらう」

「そうね。うん」

確かに、それは港の言ひ通りだと思った。

実家にいたら、両親にもあれこれと説明しなくてはいけないことに  
になつていただろうから。

吉成君のことだって、泊めるなんてことは出来なかつたかもしけ  
ない。

庭から風が流れたきた。

それとともに、チリリといつもの風鈴の音が聞えた。

港に「ビールでも飲む？」と聞いたら、にかつと笑つた。

冷蔵庫から冷えたビールを出して、姉弟二人して、床に座つて飲  
んだ。

「スドー君、見かけたわさ」

港が言つ。

「喫茶店にいた。あちらさんが気がついたかは不明だけど」

港が私の顔を覗き込む。

「あいつ、岬のこと好きだろ」

ぼそつと港が言つ。

私が返事をしないのを知つていて、疑問文では訊いてこない。  
確定している事実を話すように、言つてくる。

「で、岬もスドー君が気になる、と」

「違う」

違う。

「須藤君なんて、気になつてなんかない。むしろ、嫌いよ」

そう。

嫌い。

大嫌い。

「ひょ。初めて聞いた」

「なによ」

「岬が、誰かを嫌いだなんて言つの、初めて聞いた」

「嘘よ。そんなの」

「嘘じやないよ。俺なんて嫌いな奴は結構いたからさ、いつもそんなこと言つていたけど。岬なんて『みんなイイヒトよ』なんて言つててさ」

「そんなの、覚えてない。もひ、ここよ。止めよひよ、こんな話は

「へえ～。ふーん。じゃあ、止めるけどさ。ま、ともかく俺は、明日家に帰るわ

えつ？

「な、なんどよ」

「あ？」

「港、そんな。なんで今なのよ。そんなに突然に、帰るなんて言わないでよ」

そう言いながら、自分でも何を言いだすんだひづ、と驚く。

私は、港を早く家に帰したいって思つていたはずなのよ。

「お願い。港、帰らないで。もう少しだけいてよ」

「岬」

「港がいてくれないと、私……私

「スドー君に、落ちちゃう、つて？」

「ば、ばか。そんなんじや」

「そんな顔してるよ、岬ちゃん。ここじやん、落ちれば

「何言つているの。港、一体、何を言つてこるのよ

「ん。岬さま」

そう言つながら、港がゴクゴクと水のようビールを飲んだ。

「落ちる時は、落ちるんだよ。人の気持ちつてやつはさ。好きなんて気持ちは、頭で考えてこねくり出すものじやないだろ？」

「違う。私は、須藤君なんか

「好きじやない？」

「そうよ」「みよ

「ふーん。まあ、どうでもいいけどね」

「なによ。そんな投げやりな言い方をして

「いや、そろそろ夏休みも終わるなあ、と」

「突然。何が言いたいんだか、意味がわからない」

「岬には、きっとわからないよなあ」

「港！」

港はいつも言つて、残りのビールを飲み干した。

「岬のところに来たのは、吉成のことだけじゃないんだ」

いつも言つて、空になつた缶をペコペコとくじまして音を出しだす。

「逃げたんだ、俺も。親から」

「港」

「ほら、いつのオヤジさんも教師やつてるだろ？だから、ぶつかるんだ。俺と、さ」

父は私立の高校で教師をしている。

「なかなか、意見が合わなくてさ」

港が缶をへこます手を止めた。

「でも、吉成が。小学生の男の子でも、自分の親と向むかひおつとしてこるので、俺が逃げててどうするつてね」

そう言つと、港は立ち上がつた。

「場所から逃げても、人からは逃げられないんだなあ」

独り言のようだ、港は言つた。

「つまり、そーいう訳で。俺は、明日帰るから」

そう言つと、そのでつかい体をのそのそと動かしながら、港は缶を「ゴミ箱に捨てに行つた。

帰るんだ。

港は、家に。

もう、自分で世話を出来なくなつたカブトムシを私に預けていた

港じゃない。

なんでも、私に頼むつとする港じゃない。

場所から逃げても、人からは逃げられない。

その言葉は、港自身への言葉でもあり、吉成君に対する言葉でもあります。

そしてなによりも。

私に対する言葉でもあった。

## 24話・情けない

狐につままれる、ところのほほんな感じだらうか。

会社に着いたら、机の上にFAXが置いてあつて、散々見積もり金額をこねていた業者からこいつちの希望額での見積書が届いていた。

見積書だけ。

普通、送り状とか付けるだらうが、と唖然としたが、まあ送り状が付いていたつて金額が高いよりは、なくても安いほうが多いに決まっている。

……しつかしなあ。

なんて思つていたら、今度は昼休み明けに、相澤が社内の男と付き合つているらしいなんてことを、小川さんが言つてきた。

「なんでも同級生だとか。一緒にいるところを、誰だかがばつたり会つて、で聞いたとか」

いいなあ、結構力ツコイイ男の子らしいのよね、なんて小川さんが言つている。

「ん？ 社内の男？」

確かに、以前社内恋愛のことで相澤とは話したことがあった。

その時は、丁度俺とカモフラージュで付き合つかとかなんとかそんな話が出でていた時だったから、てっきり俺のことかと思つたけど。

ふーん、そう。同級生。意外とやるなあ、相澤。

ともかくそんなんで、なんだかんだといふことが、あれよあれよと、つまり先週までの「ちやじちやが、一気に丸く收まりだしたのだ。

そんな中、林のことが気になった。

会社を休んでいたのだ。

「今朝、会社に電話があつて。体調が悪いらしくて  
林と同じ部署の女の子がそう教えてくれた。

家に帰る足取りが重い。  
あの生物がいるかと思うと、理性では割り切れない、へこんでしまう感情が湧いてくる。

水槽は、ベランダに運んだ。（布をかけて見えないようにして）  
餌も、箱から出して、勘で水槽に入れた。（餌のパッケージは見  
ないよう）

遠巻きで、水槽の様子を見ると、なにかしらが蠢いていたので、  
多分あの生物はこの週末も変わりなく元気だったと思う。  
多分。

「あ。スドー君！」

マンションの玄関に入ったなり、声を掛けられた。

「こんばんは」

佐倉 岬の弟だった。

やけにでっかい荷物を持っている。

「丁度よかつた。スドー君の家の鍵、預かつててさ」

そう言つて、佐倉弟はポケットから俺の部屋の鍵と思われるもの  
を出した。

「今さ、スドー君の彼女が鍵をポストに入れようと苦労してて。で、  
通りがかつたボクが成り行きで預かりました」

佐倉弟の日に焼けた手の中から俺の手に、その鍵は渡つた。

「ありがとうございました」

林が持つて来たんだと思つ。

でも、なんでわざわざ？

「あとで、水槽を持ってたんだけど。あれは、なんか見覚えがある  
ような

よ」

水槽？

「すみません、ちょっと急いでいるので。鍵、本当にありがとうございました」

佐倉弟に礼をして、俺は外階段を駆け上がった。

手の平にある鍵で、部屋の扉を開ける。

そしてそのまま、ベランダ側の窓のカーテンを開けた。

水槽は、無かった。

反射的に、机の上も見た。

メモも手紙も、何もなかつた。

そのまま、脱力して俺は床に座り込んでしまった。

ひんやりとした床の冷たさが布越しに、足に伝わってきた。

ほつとしたような、でも、そんなことを感じてしまう自分が情けないような。

なんともいえない感情の中、俺はしばらくそこを動けなかつた。

## 25話・私、苦しかった

港は家に帰つた。

一瞬私も、いつそこから引っ越してしまおうか、なんて考えたりもした。

でも、そんな時。

港を思つた。

吉成君を思つた。

私も、話せなきやいけないと思つた。

須藤君と。

そうは思つても、いざ須藤君のところに行ひとすると、気持ちが揺れてしまつた。

自分からわざわざ須藤君の部屋に行くのも、考えれば考える程に自意識過剰な行為なんぢやないかって思つたり。

須藤君にとっては、「好き」だとかそんな言葉は、とても簡単な意味なのかもしれないって思つたり。

でも。

また何かの機会に須藤君から爆弾のような言葉を落とされると、いなら、自分から出向いてこの話を終わりにしたほうがいいと思つた。

玄関を出てそのままの勢いで、外階段を上がつた。  
上がつたはいいけど、また須藤君の部屋の前で、立ち止つてしまつた。

須藤君に会つのを、躊躇してしまつ。

そして、そんなことで迷つて いる自分に笑つてしまつ。自意識過剰な女だとか、突然来て非常識なヤツだとか、むしろそう思われて呆れられて嫌われたほうがいいのに、心のどこかで、そんな風に思われたくないって思う自分がいるのだから。

「佐倉です」

インター フォンに向つて話す。

うちと同じ色をした須藤君の部屋の扉が開く。

「シャツに、ジーンズ姿の須藤君が扉を開けた。

「こんばんは、あの。須藤君にお話しが

膝の辺りが、がたがたと震えるのがわかる。

「こり、しつかりしろ！」と自分に言つ。

「話し、ねえ」

須藤君がドナルドな口に意地悪な笑いを浮かべながら、「話してもいいけど。どうで話すの？」と訊いてきた。

……確かに。

『話す』なんてことだけを思つてここまで來たけれど、どうで話そうかなんてことは考えていなかつた。

でも、須藤君の部屋に來たつてことは。

というか、当然の様に須藤君の部屋で話す氣でいたのだけど。

「まさか佐倉さんのことだから、無防備にも俺の部屋で話すなんて思つて來たんじゃないだろうね」

図星。

図星だけど、だからこそ。

「そんな、そんな意地悪な言い方をしなくてもいいでしょー…」

私は、須藤君に怒鳴つてしまつた。

こんな状況で。

それを見て、須藤君が笑う。

「それでこそ、強気な佐倉 岬さんだね」

須藤君が、靴を履きだす。

「じゃあ、公園にでも行こ。あのコンビニの側の  
ついでコンビニでも買つかなあ、なんて須藤君が言つた。

夜道を須藤君と歩く。

思えば須藤君とは、ここに越してきてからよく一緒に歩いたと思  
う。

まだ、会つてそんなに時間は経っていないのに、彼の後ろ姿を私  
の瞳は既に覚えていた。

こうして歩くと、『懐かしいな』なんて気持ちも湧いてきた。  
知り合つたばかりの人に対してもこんな気持ちになるのは不思議な  
気がした。

そして、須藤君と一緒に歩くことが、ちつとも嫌じやない自分に  
も気がついてしまった。

港の言つ通り、私は須藤君が気になるんだと思つ。  
でも、気になつたところで、なんだと呟つのだらう。

おまえを許さない。

仁の声が聞える。

そうだ。

私は、誰かに近づく資格はないのだ。

こんな、私みたいな自分勝手で我儘な人間は、人に好意を持つこ  
と自体が許されないことなのだ。

なのに、よくもそんなことが思えたものだと思つ。

公園の側に来ると、茂つた木の青い匂いがしてきた。  
公園の向い側には、いつものコンビニが見えた。

「なんか、飲む？」

須藤君が聞いてくる。

確かに、須藤君はビールが飲みたいって言つていた。

「うん」

二人で、夜のコンビニに入つていった。

夜のコンビニに入るたびに、その灯の明るさに目がつぶれてしまいそうだと思う。

「あ、須藤さん？」

すらりと背の高い綺麗な女の子が、ヘーゼルナッツの様な瞳を私たちに向けてきた。

彼女は、Tシャツに七分丈のパンツをすつきりと着こなしていた。

「あれ、相澤さん。何してんの？」

須藤君も驚いている。

「私は、何て言うか。……買い物ですが」「もしも」と顔を赤くしてしゃべる相澤さんの後ろには、痩せた背の高い男の子が立つっていた。

「こんばんは」

その男の子が、須藤君と私の顔を見て挨拶をしてきた。

その礼儀正しい挨拶の仕方に、初対面にも関わらず思わずこちらも「こんばんは」なんて答えてしまった。

「ええと。あれ？ 確か君は？」

「今年入社しました、阿久津です」

男の子がそう答えた。

「ああ、なるほどね。ハイハイ」

須藤君が面白そうに笑つた。

「君たちの家つて、この側なの？」

須藤君が聞く。

「はい。この先の方で」

男の子の説明によると、どうやら彼らはこの「コンビニを挟んで私たちとは反対側の街に住んでいるようだつた。

同じ会社の人なんだ。

須藤君から渡された名刺を思い出す。

ここにいる三人は、同じ名刺を持つのだろう。

それは、有名企業のものだつた。

この場所にいる四人目は、私じゃないと思った。

「彼女は秘書なんだ。で、彼は新人クン。噂では、同級生だとかいうことだけどね」「う」と

コンビニから出て、公園に入りながら須藤君が言つ。

有名企業の、絵に描いたようなカップル。

須藤君も、『そこ』にいればいいと思つた。

「座る?」

木の細長いベンチを指して、須藤君が言つ。

私が頷くと、須藤君が先に座つた。

私もその隣りに、少し離れて座つた。

ベンチに座ると、鬱蒼と茂った樹木の間から微かに星が見えた。

「ああ、星があ。東京も、昔はもう少しよく見えたよな

「……そうね」

昔つてことは、須藤君も東京で育つたのかなあ、と思つた。

そんなことすら私は知らなかつた。

須藤君にしたつて、私のことなんて何も知らないんだと思つ。

なのに、気持ちが近づいてしまつた。

落ちる時は、落ちる。

そうなのかもしれない。

理屈ではない。

そうなのかかもしれない。

「で、話しつて？」

須藤君が、ビールの缶を開けながら聞いてきた。

「あ。うん。……私のことなんだけど」

そう言いながら、私はペットボトルのお茶を両手で握り締めた。手が、その周りについている水滴で濡れる。

「佐倉さんのこと？」

不思議そうな顔で須藤君が私のを見た。

「佐倉さんのことつて。

聞いてどうすんの」

須藤君が言つ。

えつ？ と思つ。

聞いてどうすんの、なんて。

「だから、聞いてどうするのか？ って聞いているんだけど」

まさか、そんな反応が返ってくるとは思わなかつたので、私はなんて答えていいのか分らず、口は開いているのに言葉が出なかつた。

聞いてどうするのかって、そんなこと聞かれても。

「ただ、須藤君に聞いてもらいたい、というか  
やつと、それだけ私は言えた。

「ふーん。じゃあ、ただ聞けばいいんだ」

須藤君がビールを「くく」と飲んだ。

ただ聞けばいい。

確かに、私もそう言つたけど。  
なんか、変じやない？

この会話つて。

だから、ええと、つまり。

「あ、つまり、私の話を聞いてもらひつて、

「それで？」

挑戦的な瞳で須藤君が私を見る。

それで、つて。

『それで』、私はこんなんだからもう近づかないで欲しいなんて言つのは、それを言葉に出すのつて、やっぱり高飛車なのだろうか。

ああ、でもいいのよ。ここ、それでも。

高飛車でも、自意識過剰でも。

とにかく、話さないと。

「佐倉さんが何を言いたいのかよくわからないけどさ。聞く前にひと言言つておくと。俺、別に佐倉さんのことで何を聞いても、この間言つた気持ちは変わらないから」

そう言つと、須藤君は腕を組み足まで組んで、「ああ、ビーザ」なんて芝居がかつた仕草をした。

全く、須藤君つて。

本当に、嫌なやつ。

そう思つて、その彼の横顔を見た。

でもその須藤君の横顔は、その表情は、私が想像したものとは違ひ、とても硬かつた。

それを見て、私が思つより彼は余裕がないのかも知れないと思つた。

私の視線を感じたような須藤君がこいつちを見て、一重の綺麗な瞳で『なに?』と聞いてきた。

私はその須藤君の瞳を見ながら、口を開いた。

「私ね、離婚したばかりなの」

静かにはつきりと、その言葉を告げた。

「なるほどね」

須藤君も私を見つめたままそう言った。

なるほどね。

そんな須藤君の答えに、私はドキドキとした。

「話すことって、それでおしまい？」

須藤君がそう言つ。

「そんな。それでおしまい、だなんて。なんで。なんで？ なんで？」

そんな簡単に、そんなことが言えるの？」

そんな簡単に。

『なるほどね』なんて言葉を。

『それでおしまい？』なんて言葉を。

何もかもわかつたかのような、そんな言い方をして。

「そう聞こえた？ 別に、俺、簡単にそう言つたわけじゃないよ」

そう言つて、須藤君は空を見上げてビールの缶に口をつけた。

「『なるほどね』って言つたのは、俺の中にあつたあなたへの色んな疑問が解決されたからだよ」

そしてまたごくごくと須藤君はビールを飲んだ。

「佐倉 岬つて人の無防備さとかいろいろな感じからしてさ、あなた的人生に男がいないわけがないと思っていたから。なのに実際は男つ気はないし、合コンにも乗り気でもない。それに加え、あなたの従姉妹。合コンであなたが一番人気つて聞いた時の従姉妹の嬉しそうな顔」

須藤君が、私の方を向きなおした。

「普通、同性の従姉妹が自分よりも人気があつたって知つて、そこまで素直に喜べる人はいないでしょ。まあ、彼女のキャラつていうのもあるだろうけどさ。ともかく、彼女からはあなたを誰かとくつつけたそうな空気が出ていたわけ。だから、離婚したばかりと聞いて『ああ、なるほどね』って思つたわけ。おわかり？」

「おわかり」と聞かれれば、そうだとしか答えられない。

こんな風に私の言ったことを受け取る須藤君に対し、この先私は自分のことをどう話せばいいんだろう。

彼は、須藤君は、私が思つてゐるよりも、私のことを知つているのかもしない。

須藤君は、私が今までどんな風に育つて暮らしてきたかなんてことは知らなくても。

そんなことを、私の一切のそれを知らなくとも、私の行動や言葉の中から今のそのままの私を見ていてくれたのかもしない。  
そう思いながら、「人が人を知る」という意味の中に、単なるデータ的な要素を「知る」だけで「知つてゐる、知らない」と表現してしまうことがいかに多いかってことに気づいた。

何処で生まれて、学歴はどうだとか。

全くそれのないところで、彼は私を見ていてくれたのかもれない。

「そんなことを須藤君に言われたら、この先何を話したらいいのかわからなくなつたわ」

私は情けない声で、ぽつりと言つた。

「つてことはさ、それほど重要なことじやないんだよ。佐倉さんが話そうとしていることは」

須藤君は、からつとした声でそう言つた。

「重要じやない？ 離婚の原因は、私にあるとこに？」  
須藤君のその言葉に、私はカチンときた。

「おっ。またまた佐倉 岬の強氣が出てきたじやない」

その言い方にも腹が立つて、私は須藤君に手を上げてしまつた。ペットボトルのお茶が、ベンチの上に転がる。

須藤君のビールが、地面に落ちる。

須藤君の手が私の両手首を掴んだ。

「どうして、須藤君はいつもいつもいつも」

涙声になつてしまつ。

そんな声が、自分の耳にはまるで他人の声のように響いた。

こんな声、自分で聞いたことが無い。  
そもそも、人前で泣いたりなんかしない。

須藤君の言葉は、私の心の中の一一番痛いところをつぶやく。「

そして、私の心の扉をノックする。

彼の言葉で、私は本気になってしまつ。

なりふり構わず、そのままの自分でぶつかつてしまつ。

気持ちが、かき乱されてしまう。

「離婚の原因は、佐倉さんのボーリョクとか?」

意地悪な顔で、須藤君が私を見る。

「ぐ、悔しい」

そんな冗談で会話を返されるのが悔しい。  
こんなに簡単に泣いてしまうのが悔しい。  
力で敵わないのが悔しい。

「手、痛いから離して」

私のその言葉に、須藤君は黙つたまま手首を握る力を緩めてくれた。

そして、彼の左手は私の右手を握りなおした。

須藤君と私は、手を繋いだ形になってしまった。

「なんで?」

繋がれた手を見て私は聞く。

「佐倉さんが逃げないように」

須藤君の静かな声が、夜の公園に響いた。

「俺もさ、いろいろと考えたんだ。珍しくもね。自分のこととか、  
あなたのこととか。で、青くなつたよ。今まで自分がいかにいい加  
減に生きてきたかって自覚してさ」

須藤君が話し出す。

「そんなの、自覚なんでしたくなかったし、したところで『だから

何?』って感じになると思つたんだけど

須藤君のその声は、今まで聞いた彼の声のどの色とも違つていた。

須藤君が私に、私と同じ目線に立つて自分の気持ちを話してきてくれるのがわかつた。

「佐倉さんといふと、そんな自分のさくれに気がつかされることになつて、面倒だと思つた。佐倉さんのこと、面倒な女だつてさ」で、佐倉さんに会つた時にについて意地悪な話し方をしちやつたよなあ、なんて言つた。

「だけど。それだけじゃなかつたんだよなあ。あなたのこと、面倒な女だけじゃないつて思つて」

須藤君のかされたような声が続く。

「なんというか、摩訶不思議な感情なんだけど」

ぴたんとした須藤君の手の冷たさを感じる。

「面倒だと思つたけど」

須藤君が、私の手を少しだけ強く握つてきた。

「佐倉さんとなら、そんな自分とも向き合つて歩いていけるかなあと思つたんだ」

須藤君の、いつもは意地悪にしか笑わないその口が、とても優しく笑つた。

「あなたが、好きなんだ」

その笑顔に、私はとてもない暗闇に突き落とされた気持ちになる。

沈黙が闇を覆う。

須藤君は、気持ちの全部で私に向つてきた。  
彼には迷いがなかつた。

そして、その言葉はストレートに私の心に刺さつた。

まるで、鏡を見るように、私の心と須藤君の心は同じだつた。

全く違う人生を歩いてきた私たちだけど、お互いの心の中に、自分と共鳴するものを見つけてしまったのだ。

でも、だからこそ。

そこに行つてはいけない。

「私は、もう誰とも一緒に歩かない」

それが私の答えだった。

「そうきたか」

須藤君が私の手をゆっくりと離す。

「まあ、でも。その答えは、俺のことが嫌いとかいうんじゃないんだろうしな」

「……嫌いよ」

「説得力なし」

そう言つて笑うと、須藤君はベンチから立ち上がった。  
そして、地面に転がっている缶を拾つた。

「まあ、今日のところは、帰りますか」

そう言つて歩き出した。

ゆっくりと立ち上がる私の目には、地面にビールが転がった時にできた、濡れた地面のシミが見えた。

私は結局ひと口も飲まなかつたお茶を持つた。

あんなに冷たかつたのに、もう既にぬるんでいた。

須藤君が、缶をゴミ箱に入れた。

そのあとを私は、とぼとぼとついて歩いた。

二人して歩きだした。

あんな話をしたのに、一緒に同じように帰る私たちが可笑しかった。

まるで、喧嘩をした小学生同士が、通学路が同じ為に仕方なく一緒に帰るような、そんな感じだった。

そして、一緒に歩くうちに、いつの間にか仲直りをして、途中からはまた騒いで歩き出すような。

なんだ喧嘩しても、きっと同じようにして仲直りしていく友達のよつな。

歩きながら、怖いくらいに確信に満ちた答えが私を襲つた。

そうだ。

この人は。

この人は、私の相手だと。

「佐倉さん？」

立ち止まつた私に須藤君が振向き、声をかけた。

「どうして？ どうして私と一緒になんて帰れるの？」

流れる涙をこれ以上見せたくない、私は両手で顔を隠した。  
「ちつとも、須藤君の望むような答えも、ちつとも出せないのに。」

……どうして、私を拒否しないの？」

「もつと、もつと。岬が努力しないと。

「どうして？ どうして？」

どうして、あなたと違う私を受け入れてくれるの？

「……同じ答えを持つ人なんて、いないんじゃないの？」  
ぽつり、と須藤君が言った。

「佐倉さんは、自分がなりたい自分になればいいんじゃないのかな」

そんな言葉に驚いて、手を離して須藤君を見た。

「自分がなりたい自分？」

「うーん。それも、本当はかなり難しいけど

そう言って、須藤君が舌を出す。

「俺の場合は、それを目指すというか。……うん、自由に生きたかつた。面倒なことを避けて、楽に、楽しくって」須藤君が私に近づき、私が持っていたペットボトルを持ってくれた。

そしてあいている方の手で、私の手を握った。  
やつぱり冷たい、ひんやりとピターンした手だった。  
でもその手の平には、うつすらと汗があつた。

汗なんかかきそうに無い手の人だと思ったのに。

最初に会つた時は、私はそう思つていた。須藤君のことを。  
「でも、そうしていろいろうちに。全てにおいていい加減になつてきて。  
そのせいで、いろんなことが自由でなくなつてきた」  
手を繋いだまま私たちは歩き出した。

「難しいね、佐倉さん。自分を生きるつて

「自分を、生きる  
自分を。

自分の人生を。

「でも、私は。そんなことは、出来ない。ひどいことをしたから。  
彼に」

「……俺だつて

須藤君が言つ。

「じゃあ、一人して死ぬ？」

歩きながら須藤君が言つ。

「死んだら、許されるの？」

そんな、選択肢があるの？

「許されるも、許されないも。死んだら、自分から死を選んだのなら。ただ終るだけだよ。ただね

「終るだけ」

「そう、ドラマが途中で打ち切りになるよう」。ただ、ぶつりと終るだけ。それだけ。……やっぱ、俺はそれは嫌だな

「えつ？」

「ここまで、団太く生きてきたんだから。うーん、そうだなあ。須藤的に考えるのなら、俺がこれから自分の人生をまつとうることで、今までのことは総決算つてことだ」

「そ、総決算？」

「うん。だから、佐倉さんも一緒に生きようよ。まあ、そうだなあ。初めて会った時に自転車の後に乗った時のよつな、佐倉さんははつたりと度胸と強気と俺の団太さがあつたら、たいていのことは乗り切れると思うけどね」

須藤君の瞳の中に私が映る。

生きていている私が。

そして戸惑っている私が。

須藤君、須藤君。

「私、苦しかった。誰にも言えないことがあって」

もう、私は隠さなかつた。

流れる涙も。

醜い本当の感情も。

だめな私も。

辛かつた感情も。

ここにいるのは、いつも頼りられる「岬ちゃん」じゃなかつた。弟のことを心配したり、従姉妹の恋を応援したり、親にも心配を掛けたくないとおもつて一人暮らしをしている、そんな「岬ちゃん」では。

そして、誰かの期待に答えようとする「岬」でもなかつた。

愛されたいために自分の気持ちを押し殺して、仁の側で過ごした「岬」でも。

須藤君の前にいるのは、ただの「佐倉 岬」だった。

「佐倉さんの話を聞くよ。でもそれは、佐倉さんと離れるために聞くんじゃないって、俺が佐倉さんと一緒にいたいから聞く話だからね」

その言葉を、私は須藤君の腕の中で聞いた。

Tシャツ越しに、須藤君の体温を感じた。

その体温を感じながら、私という人間を初めて受け止めてくれた人に会つた不思議を感じた。

私はもう、泣ぐのを止めなかつた。

夏の夜の風が私たちの髪を揺らした。  
遠くで、風鈴の音がちりりと聞えた。

## 26話・彼女と会つて、彼女と生きて

季節がゆっくりと変つていく。

もう、涼やかな風に揺れていた風鈴の音も聞こえなくなっていた。

相澤と新人クンは、いつのまにか社内公認のカップルになつていた。

秘書室に行くたびに、そのことでからかつてやるつとチャンスを伺つていたが、なんと俺のほうが逆に「須藤さんの彼女つて素敵な人ですね」なんて言われてしまつた。

あの、弱氣だつた相澤は今何処。

悔しいんで俺もそんな時はこつ言つてやる。

「いい女だろ？ やっぱりいい男には、いい女がつくんだよな」つて。

会社の側の街路樹の葉が黄金色に染まる頃、社内報に林の結婚の記事が出た。

「この一人つて、前から噂があつたのよね」

小川さんはそう言つと、「ああ、うらやましい」と大きく溜息をつきながらそれを眺めていた。

前から噂？

その事実に混乱するとともに、正直ほつとする気持ちもあり。

こんな風に考える俺は地獄行きだなといつつ、林については、これ以上考えるのは止めにした。

坂田と有加ちゃんも、あのまま上手くいってこようがついた。

有加ちゃんと上手くいくようになった影響か、坂田からの連絡もそしてヤツが俺の部屋に来ることも、めっきり減っていた。

「たまには来いよ

そんなメールを打つてはみるけど、書いたまま送信できず、保留にしてしまうことが多かった。

便りの無いのはなんとかつてことだらうしなあ、と。

そして保留のままのメールは、送られることなく、削除となつた。

「ビールの季節も、そろそろおしまいだね」

髪を短く切った佐倉 岬が、俺の隣りでそう言つた。

彼女の持論は、夏はビール、冬は日本酒らしい。

あの夏の日の夜から、ぽつりぽつりと彼女は自分のことを話しだした。

正直言つて、俺が受け止められることを越えている、彼女の夫からの精神的な虐待を俺は感じた。

でも、彼女は俺に話してくれた。

俺が、一緒に生きようと言つたからだ。

彼女の細い体を抱きながら、自分の腕の中に、自分の愛情の全てを傾ける相手がいるという幸せを感じた。

そして思った。

愛情は、あつたのだろうと。

彼女と彼の間にも。

その形がどうであれ、きっとあったのだろうと。

正しい形の愛情なんて、この世には存在しないのかもしれない。

愛情なんて、所詮は個人のエゴに過ぎないのかもしれない。

俺自身、彼女に対して、そんな気持ちの迷宮に入りこんでしまうことがある。

でも、やっぱり俺は、愛情にはそれだけじゃない何かがあると信じたいと思つた。

それは、彼女と会つて、彼女と生きて。

初めて、自分の人生を歩き出せたような、心地のよい責任を感じることが出来たからだ。

こんな風に人の気持ちを変える力も、愛情にはあるんじゃないかなって思えるようになつてきたからだ。

「今度、銀座においしい日本酒でも買いに行こうか。岬」

俺のそんな言葉に、「そうだね」と佐倉岬が、穏やかな顔で笑つた。

26話・彼女と会って、彼女と生きて（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4288p/>

---

Rebirth

2011年4月28日12時40分発行